
テイルズオブジァビス Average

Akamanto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブジァビス Average

【Nコード】

N0460S

【作者名】

Akamanto

【あらすじ】

幼い頃、誘拐されたキムラスカ王国の公爵子息ルークは、身を守る為、王命により軟禁生活を余儀なくされていた。何の不自由も無いが、屋敷の内だけの退屈な毎日。そんなある日、ルークは一人の少女と出逢う。

様々な出逢いと別れを経て、少年は自身の生まれた意味を知る。

第一話 預言の世界（前書き）

ルークが本当に嫌いな方、原作の性格のティアが好きな方は、読まない事をおすすめします。

第一話 預言の世界

スコア
預言

それは星の誕生から消滅までの記憶を有する第七音素セブンスフォニムを利用して未来に起こるであろう様々な出来事を見通したものである。

今から二千年以上前の創世暦時代。

ローレライの始祖ユリア・ジューエは人類に未曾有の大繁栄をもたらすべく惑星オールドラントが歩みであろう歴史の預言を詠んだ。

フライング・トスコア
惑星預言と呼ばれるこの特別な預言は、その後人類の歴史を大きく変える事になる。

惑星預言がもたらすのは未曾有の大繁栄、預言を守る事こそが約束された未来を掴む最良の方法。

長い年月を経て、預言への敬虔な思いは何時しか強迫観念と依存へと変わり、人類を救うはずの預言は人を支配し始めた。

そして新暦2011年、その不自然な摂理に疑問を覚えた一人の男によって歴史は再び大きく変わろうとしていた。

キムラスカ・ランバルディア王国 光の王都『バチカル』
レムガーデン・レム・23の日

その日、ルーク・フォン・ファブレは少しばかり不機嫌だった。何故なら彼の剣術の師ヴァン・グランツが今日からしばらく、この屋敷に来れないという事だからだ。ヴァンはルークにとってヒーローだった。

強く優しく何でも知っている、ダートという国の神託の盾騎士団オラクルの

主席総長（騎士団長）をしていて「とにかくカッコイイ！」の一言なのだ。

しかし今回はその余所の国の騎士団長というのが仇となった。ダアトの導師（国王みたいなモンらしい）のナントカというのが行方不明らしく、探しに行かなくてはいけないらしいのだ。

（ヴァン師匠、ウチの白光騎士団になつてくれればイイのに…）

そうなれば毎日、会えるし剣の修行も出来る。この屋敷から外、に出る事が出来ないルークにとってヴァンとの剣の修行が、唯一の楽しみだった。

使用人で親友のガイや、白光騎士団の騎士とも修行は出来るが、やっぱりヴァンとやるのが一番楽しいと感じたからだ。

今日、ヴァンが来れない間の変わりの神託の盾の騎士も屋敷に来ているらしい。しかしヴァンでなければ誰だって同じでルークにとっては「意味が無い…」のだ。

中庭に到着すると、そこにはヴァンと共に見知らぬ少女が待っていた。

新入りのメイド…という事では無いようだ。ゆったりとした白い法衣に、音叉状の杖、どう見てもヴァンと同じダアトの関係者であるという事は、この少女が『代わりの騎士』なのだろうか？

ヴァンの話では「私やガイとは違う方向性の強さを持った者だ。きっと良い刺激になる」との事だった。

しかし、ヴァン言葉を疑う訳では無いが、ルークには彼女がとても強くは見えないというより、戦いをする様な人間には見えなかった。ヴァンの髪と同じ亜麻色の髪を綺麗に三つ編みにし、透き通る様な白い肌、法衣の袖から覗く手は細く華奢で、少なくともルークが思い描く『騎士』という感じでは無い。屋敷で働くメイド達の方が、まだ力強くルークには見えた。

「ルーク、紹介しよう。これが先程、話した代わりの者だ。名はメシュティアリカという」

ヴァンが少女、メシュティアリカを示し名を告げる。やはり、彼女が『代わりの騎士』の様だ。

「お初にお目にかかります。ルーク・フォン・ファブレ様…、メシュティアリカ・グランツと申します」

少女は自身の名を改めて告げ、深々と恭しく頭を下げる。少女の胡桃色の髪が、ふわりと揺らぎ太陽の光と交わる。

何故かは解らないが、ルークは不自然に成らない様、手櫛で伸ばし放題の自身の緋色の髪を整え背筋を伸ばし

「おお、ル、ルークだ。よろしくな」

と握手をしようと左手を差し出した。

これがルークの、そして世界の運命を変える、出会いであった。

第一話 預言の世界（後書き）

このテイルズオブジァビスAverageは『最高傑作』を狙った奇抜な物語では無く、あくまでも『凡作』或いは『普通』を目指して書こうと思っています。

Average＝平凡な、平均的

第二話 自己紹介

ルークは少女メシユティアリカに握手をする為に左手を差し出した。

しかし返ってきたのは、握手では無く別の物だった。メシユティアリカは何を思ったか、ルークの目の前に跪き。差し出されたルークの左手を優しく支えると、静かに手の甲に口付けをした。

瞬間、ルークの頭が真っ白になった。そして、みるみる顔が紅潮するのが自分でも理解できた。

（ナニゴト！？ヤワラけえ？ナニした？ナニされた？！）

「？…あのう、ルーク様？」

思考がほぼ停止し、動けないルークに困惑するメシユティアリカは呼び掛ける。

その声に我に返ったルークは、弾かれる様に後ろに飛びメシユティアリカから間合いをとり…

「なっ、何しやがる！！」

と思わず叫んでしまった。

「え…？も、申し訳ありません！ルーク様！」

「あ、いや怒ってる訳じゃなくてだな。別に…良いから、もう立てよ」

跪いた姿勢から、そのまま土下座をしかねないメシユティアリカを目の当たりにしたルークは更に、冷静さを取り戻す。

「すまない、ルーク。驚かせてしまったな？妹は堅物でな、杓子定規な行動になりやすい。許してやって欲しい」

しばらくルーク達のやり取りを見ていたヴァンが苦笑しつつ、二人を執り成す様に間に立ちルークに頭を下げる。

「いえ！全然気にしてないです。ヨユーです！…ん？妹？」

ルークは師に頭を下げられて、慌てて姿勢を正すが、ヴァンの言葉に疑問符を浮かべる。

「ハハハ…そうだ。歳は今年で十と六、お前とも話が合うだろう」
「はあ…」

未だ跪いた姿勢のままのメシュティアリカに、再び注目するルーク。なるほど、髪の毛や瞳の色、眼差しも師になんとなく似ている。そういう言われれば、家名が同じであった。

「ティア、何時まで跪いている？ルークは許してくれたのだ。それでは、逆に非礼だぞ？」

「はい、おにい…主席総長」

「ティア…話したと思うが、ルークはある事情で、このお屋敷から出る事が出来ない。故に先程の様な貴族の慣例には不慣れなのだ」
「あ…」

兄に指摘され、やっと姿勢を正すメシュティアリカ。なるほど、堅物である。そして、ルークの境遇を失念していた事を自覚し、更に申し訳なさそうな顔になる。

「申し訳ありません、ルーク様。不愉快な思いを…」 「ふ、フユカイなんて思ってたねえよ！ただ、ちょっと驚いただけだから、イチーイチ謝んな。ウゼエから…」

「はい、申しわ…」

「謝んな！」

「ええと…ありがとうございます？」

「ん…」

メシユティアリカの顔も見ず言葉も横柄だが、ルークが彼女を
気遣っている事は誰の目にも明らかであった。

何故だか解らないが、ルークは少女を視界に入れる事が出来ず、
頭を掻きながら中庭のあちこちに視線を彷徨わせていた。

ふと、ルークは妙な物を見た。よく庭師のペールが世話している、
植え込みの向こう側に黄色い毛玉が揺れている。くつくくつ、と
音を立てている。

「ガイイ！ナニ隠れて笑ってやがる！？ケツ飛ばすぞー！」

黄色い毛玉に向かって、ルークは吠える。

「ハハハ、悪い悪い。しかし…今はルーク坊っちゃんには刺激が
強かったなあ？ククク…」

「坊っちゃん言うな！」

植え込みの向こう側から金髪碧眼、長身の青年が爽やかだがイ
タズラっぽい微笑みを浮かべ姿を表した。

「特に、彼女の様な美しいご婦人の挨拶なら、尚更だ。ハハハ」

「ヘーキだつつつたる！いきなりだったから、ちょっと驚いただけ
だ！」

「うーん。まあ、そういう事にしといてやろっ」

「この、ヤロ…」

本当に気安いやり取りである。しかし、ガイと呼ばれた青年は雰囲気や容姿はともかく、その出で立ちは貴族の物では無い。帯刀している事から騎士なのだろうか？メシュティアリカには見当が着かなかった。

「あのう…ルーク様、こちらの方は？」

メシュティアリカは思わずルークに尋ねてしまう。

「こいつはガイ。ウチの使用人兼、オレの親友みたいなモンだ」

「おいおい、みたいなモンじゃなくて、親友だろ？」

ガイと呼ばれた青年は、ルークの肩を小突く様に叩き、屈託無く微笑えむ。

「親友…ですか？使用人の方が？」

「ああ、まあガイは特別だ」

ルークも、また屈託の無い笑みをメシュティアリカに向ける。

「初めまして、メシュティアリカ・グランツと申します。ガイ…ええと」

「ガイ・セシルだ。よろしくな、メシュティアリカ・グランツ様」

ガイは爽やかな微笑みでメシュティアリカの自己紹介と疑問に答える。

「ティアと呼び捨てで構いません。セシルさん」

「ハハハ、使用人風情が神託の盾の騎士様を呼び捨てになんて出来ませんよ」

「でも、わたしの方が年下ですし。騎士と言っても、まだまだで…」

ガイは苦笑しつつ腕を組みしばし、何かを考える。

「そう…だな。これからグランツ謡将が来れない間、ルーク坊つちやんのお守りをする仲だし。よろしく、ティア。その代わり俺の事もガイで頼むよ?」

「はい、…ガイ」

爽やかな微笑みの青年剣士と、少しはにかんだ少女騎士のやり取り。まるで物語の一場面の様に、微笑ましくも甘い。年頃の少年少女達が見れば思わず、ときめいてしまう事だろう。

しかし、この場にいる唯一の少年、ルーク・フォン・ファブレはときめいてなどいなかった。むしろイライラしていた。そう、何故かイライラしていた。

そしてルークは…

「おい、ガイ! お守りってなんだ!? あと坊っちゃんは止めるって言ってんだろ!」

特に気にしていなかった事で、無理矢理にガイに食って掛かり、彼とメシュティアリカの間に割って入った。

「ハハハ、早速打ち解けたな。これが若さか…少し羨ましい」

少年少女達のふれあいを、見守っていたヴァンが嬉しそうに笑うが、最後の言葉に少し自嘲の陰りが見える。

「さて、自己紹介は一通り済んだな? ルーク、稽古を始めよう。これから来れなくなる分、今日はとことん付き合っぞ?」

ヴァンは陰りを払拭する様に明るく優しい口調で、中庭の中央に移動する。

用意していた訓練用の木剣を掲げ、ルークに微笑み掛ける。

「はい！師匠！じゃ、ガイもメシュティアリカも後でな！」

本当に嬉しそうに、元気良く返事をし、ルークは腰の木剣を抜き友人二人に明るく声をかけ師に続き中央へ向かう。

「ああ、あんま情けない剣は振るなよ？今日はギャラリーが一人多いからな。ハハハ」

「お怪我などしませんように……」

ルークの笑顔に、思い思いの返答をするメシュティアリカとガイ。二人が中庭の外周に設けられたベンチへと向かおうとした時、異変は起きた。

第二話 自己紹介（後書き）

原作のティアも実力主義のオラクル騎士団の騎士です。

そしてオラクルの騎士である事に強い誇りを持っています。

しかし、彼女は公爵子息であるルークと公爵家の使用人であるガイに横柄な口調（いわゆるタメ口）で初対面から接します。ルークがワガママな悪い奴でガイが平民だからと言う理由も考えられますが、その他の町民や村人には敬語で接しています。

公爵家の使用人ともなれば身分が低いかもしれませんが、貴族であるという事も珍しくはありません。

階級や身分を重んじる騎士が外見や態度で接し方を変えろというのは、もっとも行ってはいけない事なのです。

第三話 突然の旅立ち

ルークは十歳の時、何者かに誘拐された（敵国であるマルクト帝国の仕業と見られている）。

その時のショックからなのか、発見された時には全ての記憶を失っていた。

そう、全てだ。喋り方も歩き方も、十年の人生で得た全てを忘れ去ってしまった。

そして、その誘拐事件がルークに残したもう一つの傷痕が有る。それは原因不明の幻聴を伴う頭痛、何人もの医者や治療術士がルークを診たが、原因は杳として知れなかった。

その頭痛は一定周期でルークを襲った。何時もなら直ぐに治まるのだが、今回は少し様子が違った。

（ツ…なん、だよ！こんなつ、時にい…！）

声に成らない呻きを漏らし、ルークはその場に蹲ってしまう。

「ルーク様！？」

もつとも、ルークに近い位置にいたメシュティアリカが咄嗟にルークの身体を支える。

そこで初めて、メシュティアリカはルークの身体が淡く輝いている事に気が付いた。

（これは、第七音素…？）

その瞬間、ルークの輝きが力を増し、目を開けている事さえ難しくなる。

「いかん！二人共離れる！」「ルーク！ティア！」

目が眩み、ヴァンとガイも二人に思う様に近付く事が出来ない。

一方、メシュティアリカ自身も、何とか音素の働きを抑えようと意識を集中する。

その瞬間、メシュティアリカはこの場にいる誰とも違う声を聞いた。男なのか女なのか、老いているのか若いのか、不可思議な声。

『響け…ローレライの意志よ届け…開くのだ！』

次の瞬間、中庭全体が凄まじい輝きに包まれた。

「ルーク！！ティア！！」

ヴァンとガイが同時にルーク達を呼ぶが、輝きが治まった時二人の姿は、もうその場には無く彼らの呼び掛けは虚しく空中へと消えた。

第三話 突然の旅立ち（後書き）

ゲーム本編ではティアはルークの家、つまり大貴族の屋敷に「ダ
アト本国では警備が厳しい」という理由で、情報部所属の彼女は「
ユリアの預言の子」が匿われている事を知らずに襲撃を敢行します。
ルークの事情を資料レベルでは把握する事が出来る（預言の管理
者の大詠師の直属の部下なら絶対に把握しているべき事柄ではあり
ます）立場ですが、全く知らない様子でルークの「人生経験の浅さ
から来る無知」をバカにし続けます。

優秀な諜報部員のやるべき事ではありません。

手前味噌ではありますが、この話の転移方法の方がまだ『リアル』
だと思います。

第四話 初めての空、海、大地

『ルー…さ……ーク…ま』

頭痛は治まったが、まだ声が聞こえる。しかし、いつもの声とは感じが違う。

（なんか…いやじゃない…）

不思議な安心感を感じルークの瞼は、さらに重くなる。

嗅いだ事の無い香りの風。少し硬いが心地良い、さらさらとそよぐ不思議なベツト。そして、何より枕が良い。適度に柔らかく適度に温かい。

『ルーク様…』

ルークは、その声がメシユティアリカの声だという事に気が付いた。

未だ、重い瞼をうつすらと開けた。

「ルーク様…気が付かれたんですね。…良かった。何処か痛む所や違和感を感じる所は有りませんか？」

仄かな灯りに照らされた、少女の柔らかな微笑みが目の前にあった。

そこでもうやくルークは自分が、とある姿勢にある事に気が付いた。

読書…屋敷から出る事の出来ない退屈な毎日、剣術の修行には遠く及ばないが、ルークの毎日の退屈しのぎ。小難しい物は全く読まなかったが、英雄譚や冒険譚をルークは好んで読んだ。時には、

親友のガイや従姉のナタリアでさえ二の足を踏む様な、頁数、巻数の物語を読破した事さえ有った。

そんな物語の主人公達が傷付き倒れた時、或いは闘いに勝利し休息をとる際に良く登場し、魅力的なヒロインと共にとる姿勢。ルークも何だか解らないが憧れたそんな姿勢。

『膝枕』

を今、ルークはメシユティアリカにして貰っていた。

急激に覚醒する意識、ルークは横滑りする形でメシユティアリカと距離を取り、一瞬にして立ち上がり、体勢を整えた。

「…ル、ルーク様？」

ルークの余りの見事な体捌きに、メシユティアリカは目を白黒させる。

「しまった…！」ルークはそう思った。

「あ、いや…ワリい。ちょっとビックリしちゃって」「申し訳あ…」

「だから、謝んなって…！ところで、此処ドコなんだ？屋敷ん中…じゃ絶対無いよな？」

周囲を見回すルーク。それは見た事も無い、一種、幻想的な光景だった。仄かな光を灯した不思議な花、が一面に咲き誇り満月と共にルーク達を優しく照らしている。

星空との境目が曖昧で、まるで以前読んだ童話の様に星の海に迷い込んでしまったのではと、ルークは錯覚してしまう。

しばしの沈黙の後、沈痛な面持ちでティアは口を開いた。

「はい、凄い勢いで飛ばされてしまったので…バチカルから、かなり離れていると思います」

「は？飛ばされたって…どうしてそんな事に？」

ルークの傾げていた頭を更に傾げる、訳が解らなかった。

「ルーク様とわたしの間で、『超振動』が起きたんです。あ、超振動というのは、同位体…同じ音素振動数を持つ物が、稀に起こす現象の事です。ルーク様もわたしも、第七音素術士だったので…。あの時、ルーク様が頭痛で苦しまれている時、第七音素の大きな鳴動を感じました。…抑えようとしたのですが制御しきれずに…」

説明を進める程に、メシユティアリ力は俯き、口調が弱くなっている。

第七音素とか超振動とか難しい事は解らなかったが、メシユティアリ力が自身を責めている事は、ルークにも解った。

「お、おいおい、アレだろ?!『マレに起こる』んだろ?チョーシンドーだっけか?事故みたいなモンだ。事故!それに、オレの頭痛が原因なら、オマエは巻き込まれただけだろ?オマエは悪くねえよ!あとウゼエから謝んなよ?」

一息にまくし立てるルークとやや呆氣に取られるメシユティアリ力。

「ええと…ありがとうございます?」

「ん…」

照れくさくなったルークはそっぽを向いてしまう。ふと、その時ルークの耳に、聞いた事の無い不思議な音が響く。

不規則な、しかし何処か規則的な響き。丘の向こう側から、絶え間なく響いている。

「何の音だ？ザバザバ鳴ってんぞ？」

「これは『潮騒』、海の波が鳴らす音ですね。此処からは海が近いですから」

メシユティアリカが、やはり丘の向こう側を指差す。ルークは光る花を踏まない様、気を付けながら歩いていき…

それは、物凄く大きな水溜まりだった。月明かりが海面にも星空を作り、波に合わせて瞬いている。

夜は暗くて詰まらないと、ルークは思っていたが『外の夜』は暗いだけでは無いらしい。こんなにも光に溢れている。

「これが…海…。初めて見た…」

「…夜の海を、こんな風に見るのは、わたしも初めてです。素敵です…」

ルークとメシユティアリカは、しばらく何も言わず、夜の海を並んで眺め続けた。

第四話 初めての空、海、大地（後書き）

少し詩的な話でした。いかがでしたか？

ルークは原作ゲームでは、外の世界に憧れを抱きつつも旅をする事には不満の嵐でしたが、この物語のルークは少し違います。

それは、原作ゲームとは性格の違うティアとの出会いがルークの『世界を見る目』を少し変えたからです。

たった一つの出会いが人生を変える。それはルークの様に『幼い子供』なら尚更です。

第五話 讃歌と讃術

「…ところで、これからどうすんだ？」

ルークが、海からメシュティアリカに視線を移し聞いた。

「そうですね…先ずは此処で朝になるのを待つて、それから山を降りましょう。月明かりで明るいといっても山を降るのは危険ですし、何より、夜に活発化する魔物の方が多いので…」

「！、魔物…。この辺にいるのか…？」

ルークと共に飛ばされて来たのだろう、足元に転がっていた訓練用の木剣を拾い上げルークは身構える。

『魔物』それはオールドラントにおいて、人間の天敵とも言える存在である。魔物と言っても、神話や伝承に登場する様な悪魔や妖の類だけで無く、人間に害を成す動物や植物の総称でもある。

屋敷から出る事の出来なかったルークでも、魔物の恐ろしさは知っていた。

「あ、心配ありません。魔物を寄せ付け無い讃術ふじゅつを使つて結界を張つてあります。よほど音素の扱いに長けた魔物では無い限り大丈夫です。それに、そういった魔物は、こういう環境には先ずは居ません」

魔物と聞いて身構えるルークを安心させる様、努めて柔らかな口調でメシュティアリカは説明する。

「そ、そうか…」

ルークは明らかにホツとした表情をし、木剣を腰の鞘に戻す。

改めて周りを見ると、自分達をぐるりと月明かりや花の光とは違う、淡い光の線が囲っている事に気が着いた。

「これが譜術か…。初めて見た。メシユティアリカは譜術士だったのか？」

「はい…正確には、譜歌を使って、仲間の傷を癒したり戦い易い様にする『音律士』と言っんですが…」

「ふか？譜術とは違い物なのか？」

『音素』…惑星誕生時から有る物で、オールドドラントに存在する全ての物の源である。音素は、第一音素の間、第二音素の土、第三音素の風、第四音素の水、第五音素の火、第六音素の光、そしてどれにも属さない第七音素の七つに大別される。

それらの音素に干渉し、魔術的奇跡を起こす技術、それが譜術であり、譜術を操る技術者を『譜術士』と呼ぶ。

そして、譜術を用いる詠唱に旋律をつけ、歌う事で発動させる術を『譜歌』と呼び、その歌い手を『音律士』と呼ぶ。歌詞やメロディによって、敵を攻撃する物から、傷を癒す物まで様々な譜歌がある。しかし、その効力は譜術には及ばず、実戦よりも儀式的な役割の方が強い。

「へえ、譜術にも色々あんのか…。なあ、オレも第七音素使えるだよな？確か…ケガとか治せるだよな？」

「はい、素養を持っていて訓練さえすれば、必ず使える様に成れます」

ルークが新しい遊びを、発見した子供の様にキラキラした目で質問し、メシュティアリカは柔らかな微笑みと共に答える。

「ヴァン師匠もやっぱスゲエのか？」

「そうですね…兄は譜術士としても、音律士としても優秀だと思います。本人は『器用貧乏なだけ』と否定しますけど」

「ハハ、やっぱ師匠は何でも知ってて、何でも出来るスゴい師匠なんだ」

ルークは尊敬する師の知らなかった一面を知り、嬉しそうに頷いている。

そんなルークに目を細めるメシュティアリカ。

「もし良かったら…譜術や譜歌、音素の扱い方をお教えしましょうか？もしかしたら、あの頭痛も和らげられるかもしれません」

「えっ、マジで？！あっ…やっぱイイや。教わるならヴァン師匠がイイ。オレの師匠はヴァン師匠だけだ。あ…べ、別にオマエがキライとかイヤだってわけじゃねえからな！？」

「いえ、出過ぎた事を言いました。お許し下さい…」

「謝んなって！それより！朝まで待つんだろ？もつと譜術の事とか教えてくれよ」

ルークはその場に腰を下ろし、完全に聞きの姿勢になりつつメシュティアリカの袖を引っ張る。

メシュティアリカは、微苦笑を浮かべながらもルークに続きその場に腰を下ろした。

第五話 譜歌と譜術（後書き）

世界観の説明の為の話でした。

独自の世界観を持つ物語では、アビスでも、そうである様にルークのような『世間知らず』や『好奇心旺盛な子供』『物知らず』なキャラクターを登場させて読者やプレイヤーの疑問を代弁させてキャラクターと共に自然に『世界』を知って行くという手法は良く使われます。

しかし、原作ゲームでは、同時に『ルークの無知さを浮き彫りして、批判する手段』としても多用されます。

皆さんはルークと一緒に旅をする『もう一人の主人公』として、どう感じますか？

第六話 馳せる想い

『譜業』それは、音素を用いた科学技術の総称。その代表的な物が『音機関』と呼ばれる機械群。

ルークも屋敷にいる時、音機関好きの使用人兼親友のガイから、音楽が聞ける箱や芝刈り機、などを見せてもらった事が有った。

しかし、メシュティアリカによれば、音機関はそうした小さな機械だけで無いらしい。

馬のいない馬車、大きな客船、巨大な戦艦、それになんと、空飛ぶ船をルークの家、ファブレ家が主体と成って作ろうとしているらしいのだ。

ルークには、想像すら出来ない話だった。

『精霊』『晶霊』『音素集合体』と呼ばれる者は、おとぎ話だけの存在では無いらしい。

闇のシャドウ、土のノーム、風のシルフ、水のウェンディーネ、火のイフリート、光のレム、そして第七音素のローレライ。

メシュティアリカが言うには、それらの存在は何処にでもいるし、何処にもいない、ひどく曖昧で目には見えない。しかし、譜術や譜歌を使う時、確かに何か『気配』を感じるらしいのだ。

やはり、外の世界は屋敷の内とは違う。『面白そうな物』が溢れている。

もしかしたら、この旅でその『面白そうな物』に乗る事が、出会う事が出来るかもしれない。

不安も恐怖も有る、しかし好奇心の方が今は大きい。

ルークは、まだ見ぬ広大な世界へと想像の翼を広げた。

メシュティアリカは『精霊』の伝説に話題を移そうとした時、ルークがうつらうつら、と眠りかけている事に気が着いた。

「ルーク様…？」

「ううん……」

なんとか返事？はできるらしいが…。

メシュティアリカは、苦笑しつつ法衣の上着部分を肩から外し、畳んで即席の枕を作る。

そして、手慣れ動きで即席枕に、優しくルークを横たえる。治癒術士でもある彼女は、こうした事に慣れていた。しばらくしてルークの寝息が聞こえてきた。

「火炎の子らよ…『アビアース・フレイム』」

メシュティアリカとルークを中心に第五音素、火の力が集まり、周りの空気が少し暖くなる。

これで風邪の心配はない。敵を射ったり、殴ったりするよりも、メシュティアリカはこういう譜術の使い方の方が得意だった。

神託の盾騎士団・第六師団、通称『鋼のカンタビレ隊』。師団長カンタビレ謡士は、女性とは思えない程、威風堂々とした武者ぶりの『鋼』の二つ名に相応し騎士だった。

しかし、私生活では、かなり…いや、少しスボラな人だった。

『なんか寒い、ティア部屋あっためろ』

『あちい…涼しくしろティア』

『空気を入れ換えたい。でも寒い、窓は開けたくない。ティアなんとかしろ』

…という感じで、入団早々、何故か師団長の側付きに成ってしまっ

たメシュティアリカは、何かと、こき…いや、重宝され譜術の繊細な操作を自然と身に付ける事が出来た。

しかし、純粋な戦闘技術はさほど上達しなかった。

カンタビレ謡士曰く

『才能が無いワケじゃないが、明らかに向いて無い』

との事だった。確かに、実戦的訓練でも勝ち星は、ほとんど無かった。

そんな『弱い』自分が、こんな何処だか解らない場所から首都バチカルまで、無事にルークを送り届ける事が出来るのか？

いや、出来る出来ないの問題では無い。そう…

「やらなければならない。そうする以外にない…」

事だった。

メシュティアリカは、神託の騎士として是が非でもルークを守りぬく事を心に誓い、自身も休息を取るため、ルークの隣に腰を下ろし静かに目を閉じ…

「どうか、ルーク様にローレライのご加護を…」

歌う様に祈りを捧げた。

第六話 馳せる想い（後書き）

世界観の説明の続きでした。そしてティアの変化した過去を少し説明しました。

原作ゲームの彼女は『前衛もこなせる後方支援担当』（ゲーム本編でのキャラ性能はそこまで万能型ではありませんが……）でしたが、最初から何のためらいも無くルークを前衛で戦わせ、『詠唱中は守って』貰おうとしますが、この物語の彼女は少し違います。

『戦う事の才能の無い騎士』の彼女の戦いにしばしお付き合いください。

第七話 旅の始まり

「ルーク様…ルーク様…」

「うう…ん…もすこし…寝かせてくれ…」

「…そうですね。ではもう少し…」

おかしい…いつもなら此処らで、執事のラムダスかガイ、たまにナタリアが出て来て叩き起こされるはずだが、とルークは寝ぼけた頭の中で首を傾げた。しばらくして、ある事を思い出し一気に眠気が覚めた。

（そーいや外に来たんだっけか…）

「待った…！おきるおきるうゝっ！」

ルークはガバリと起き上がり、ついでに身体を伸ばす。

「おはようございます、ルーク様。良く眠れましたか？」

「まあまあかな。…つか、メシユティアリカは早起きだな？今何時くらいだ？」

微笑み挨拶をする、メシユティアリカに頷くだけで答えるルーク。

「午前六時半を、少し過ぎたくらいですね」

法衣の袂から懐中時計を取り出しルークにも見える様にしてメシユティアリカは答える。

「マジかよ？未知の時間帯だな…。いつも、こんな早えのか？」

「はい、まあだいたい…。一応、騎士なので」

実際には一睡もしていないのだが、「一々言う事でも無い…」と考えるルークの質問に苦笑しつつ答える。

「ふーん…」

ルークは、呆れやら尊敬やらが、ない交ぜに成った顔をする。

「ルーク様、出発する前にこれを召し上がって下さい」

今度は腰のポーチから、懷紙に包まれた丸くて小さい物を取り出したメシュティアリカは、ルークに渡した。

「なんだこりゃ？アメか？」

「これは『グミ』と言って、疲れや怪我を癒す事が出来るお薬の様なお菓子です」

ふーんと呟きつつ包みを解き『グミ』とやらを観察するルーク。

「ああ、コレかあ。黄色いのと水色の奴なら、屋敷で食った事あるわ。ん、コレはリング味か？ケツコーイケルじゃん」

どうやら、ルークは『グミ』の中でも高級品『パイングミ』や『ミラクルグミ』しか食べた事が無いらしかったが、一番安い『アップルグミ』も気に入ってくれたらしく、メシュティアリカは内心ホッとした。

ルークに続いてメシュティアリカも、グミを一口口に含む。

「そんじゃ、行こうぜ！」

「はい、参りましょう」

ルークが、居ても立ってもいられないといった様子で、そそく

さと立ち上がる。

まるで、遊び場に急ぐ子供の様なルークを、微笑ましく思いながらも、これからの困難を思い、気を引き締めメシュティアリ力はルークに続く。

「この花、朝は光らないんだな？」

「はい、それは…ルーク様、止まって…！」

「あ？」

草原の草花を眺めながら歩いていると、突然メシュティアリ力が制止の声を上げる。

背の高い草の陰に隠れ、法衣の袂から手鏡を取出し、道の先を様子を伺うメシュティアリカ。

「魔物です…」

「あれが…」

鏡には、人の頭程の大きさの球根の身体から、鞭の様な葉を二本生やした魔物が、辺りを仕切りに警戒している。

「気付かれているの…？警戒行動をとってる…」

「どうすんだ…！？」

声を押さえながらも、悲鳴じみた声を上げるルーク。一方メシュティアリカは手鏡で再度、様子を伺う。

「このまま、やり過ごす事が出来れば…駄目です、気付いた様です…」

「なにいい！」

「ルーク様はこの場に！…倒すしかない…！」

メシュティアリカは、両手でしっかり杖を握りしめ、魔物の前に飛び出す。

『キイイイ！！』

メシュティアリカを見つけた魔物は、奇妙に甲高い声を上げ、鞭の様な葉を振り回し襲い掛かってくる。

メシュティアリカの音素に共鳴し、音叉の杖の先端が輝く。メシュティアリカは、それを魔物に向け振り下ろす。

光の球体が矢の様に飛び、正確に魔物を捕らえた。魔物の突進が止まる。

メシュティアリカは、そのまま畳み掛けるべく二度三度と杖を振る。魔物は、音素の粒と体液を飛び散らせ宙を舞い、地面に叩きつけられ動かなくなった。

（良かった、なんとかなった…。でも…）

メシュティアリカは、戦いに勝った事に安堵するも、無惨に倒れた魔物を見つめ…

「ごめんなさい…」

と一言だけ、悲しげに呟いた。

第七話 旅の始まり（後書き）

初めての戦闘シーンでした。いかがでしたでしょうか？

原作のティアは、ルークに『責任を持って屋敷まで送る』と言った、ほとんどその直後に何のためらいもなく、当たり前のように戦闘に参加させ、前衛に据えます。

しかし、ティアは『自分自身で戦う事を選び軍人に成った』人で、ルークは『戦う事を考えた事すらないが戦いに巻き込まれた』人です。この二人を同列に扱う事はかなり苦しいと思います。

例えるなら、『貴方は警官ではありません。でも剣道を習っているので犯罪者を逮捕する為に銃が得意な警官を守って戦って下さい。』と言っている様な物ですね。

皆さんはどう感じましたか？

第八話 ルークの決意

メシュティアリカは、大きく静かに息を吐き、呼吸を整える。

「メシュティアリカ…大丈夫…なのか？」

「はい、大丈夫です。行きましょう。貴方はわたしが御守り致します。必ず…」

不安な表情を浮かべ、ルークが駆け寄ってくる。それに、柔らかに微笑み『何でもない事』であつた様な口振りで答え、歩き出すメシュティアリカ。

ルークは何となく、釈然としない顔をしつつも、あえて何も言わず、彼女に続き歩きだした。

ルーク達は先程の魔物との戦いから、30分もしない内に、新たな魔物と遭遇し戦闘に成っていた。

しかも今度は、先程の球根の魔物だけで無く、ルークの身長ほども有る体高を持つ、イノシシが二頭。合わせて三体同時に襲い掛かってきた。

杖だけでは無く、法衣の下に隠し持っている、ナイフを取出しメシュティアリカは迎え撃つ。

先程の戦闘の焼直しと言っても良い様に、音素の矢だけで球根の魔物をたおす。しかし、そんな事には目もくれず、イノシシがメシュティアリカに向かって猛然と突進してくる。

メシュティアリカも音素の矢とナイフを同時に放つが、イノシシの針金の様な体毛と強靱な筋肉に阻まれ、突進の速度を少し緩める事しか出来ない。咄嗟に横跳びで突進の軌道から逃れるが、体勢が整える前にもう一頭のイノシシが、メシュティアリカ目がけて突

進する。

(しまった…)

メシュティアリカは直撃を覚悟したが、イノシシの体当たりが彼女に届く事は無かった。

地を這う衝撃の波がイノシシの右前足を弾き、前のめりに倒し、鼻や顎を突進の勢いそのままに、したたかに地面に叩きつける。さらに、緋色の突風がメシュティアリカの横をすり抜け、イノシシに激突した。

火薬の様な炸裂音と共に、断末魔の声を上げ2メートル程、イノシシが地面を転がり、ぐったりと動かなくなった。

「ル、ルーク様…！何故…？いけません…！」

そう、緋色の突風はルークであった。木剣を左手で下げ、イノシシを吹き飛ばした右手を、突き出したままの姿勢で固まっている。

「ルーク様…?!」「つつ…何でもねえ！来るぞっ…！」

ルークは何かを振り払うかの様に頭を振り、木剣を正眼に構え、メシュティアリカを庇う様に前に出る。

大きく身体を、揺すり方向転換をするイノシシ。ルーク達に対し、鼻息荒く小気味よく右後ろ足で地面を蹴って調子を取る。全力勝負というわけらしい。

しばし、睨み合う両者。先に動いたのはルークだった。

「うおおらああ…！」

ルークは、一気に敵との間合いを詰める。

イノシシも負けじと、突進する。

あわや正面衝突、という瞬間ルークは身体を独楽の様に回転させ、上半身の力と回転の勢いを乗せて、イノシシの脇腹めがけて木剣を叩きつけた。 バランスを崩し、横転するイノシシ。体勢を立て直そうと、四肢をバタつかせるが、メシユティアリカがその暇を与えない。

メシユティアリカの音叉の杖が先程よりも大きく鳴動する。両手で強く握りしめた杖を、槍の様にイノシシに向け突き出す。

それは、言うなれば『音の爆発』。要領は音素の矢と同じだが、威力は段違いだった。もつとも音素を溜める事、と相手の動きを封じる事、が出来なければ放て無い。つまり守って貰わなければ繰り出す事すら、まま成らない不完全な技だった。

イノシシは鞠の様に転がり、近くの岩にぶつかり、ようやく止まった。死んではない様だが、白目を剥き泡を吹いて痙攣している。しばらくは動く事もまま成らないだろう。

「もう、大丈夫な様です。ルーク様：助かりました。でも、あんな危険な真似：貴方にもしもの事があつたら…」

魔物の気配が、他に無い事を確信して初めて構えを解き、メシユティアリカはルークに頭を下げ、先程の『助太刀』の礼を言いつつも、強めの口調でその軽率さを嗜めようとするが、ルークの発した言葉に続ける事は出来なかった。

「う、うるせえ…！女の後ろに隠れっぱなしなんて、ダセエ事デキるかよ！！男は女を守るモンだつて母上が言っていた！それにオレはヴァン師匠の一番弟子だ！守ってもらうほどヤワじゃねえ！」
「ルーク様…」

「それに…オマエ魔物に近づかれたトタン、動きがゼンゼン悪くなつたぞ？もし、オレが戦わないセイで、そーなつてて、オマエに何

かあったら…なんかイヤだ！…じゃなくて！師匠がイヤに思うだろ？！オレも顔向け出来ないみたいなの？！」

途中で気恥ずかしくなってしまうたルークは、『自分本意』に聞こえる様な何か取り繕うが、余り成功していなかった。

「確かに…わたしは戦いは余り得意…いえ、苦手です。『音律士』は本来、仲間の剣士達を『戦い易い様に』『傷付かない様に』『傷付いても癒せる様に』譜術や譜歌を行使するのが役割ですから…」

自身の無力さを恥じる様に、少しうなだれメシュティアリカは自身の『弱さ』を告白する。

「だつたら…！」

「それでも、わたしは『騎士』です。『弱い』事を理由に『守られるべき方』に守って頂く様な真似は出来ません…！」

「…なんだよソレ？ワケ解んねえ…。オマエが何て言おうと、オレは戦う！勝手に戦うからな！オマエが『騎士』とか『弱い』とか、知らねえし！守る守られるなんか考えてないね！」

メシュティアリカは凜然と言い放つが、ルークも負けじと噛み付かんばかりに叫び返す。

睨み合うルークとメシュティアリカ。

全く目を反らそうとしない二人。しかし、先に折れたのはメシュティアリカだった。

「解りました…。わたしでは、貴方を守りきる事が出来ません。『協力』していただけますか？勿論、わたしも全力で、貴方を支援します」

「よおし！まかせとけ…！」

微笑みつつも、不安を隠し切れない複雑な表情のメシュティアリカと、屈託の無いが頼もしい笑顔のルーク。

この時、本当の意味でルークとメシュティアリカの『二人の旅』が始まった。

第八話 ルークの決意（後書き）

ルークの初陣の回でした。戦闘シーンでは『魔神剣』や『虎牙破斬』の様な技名を叫ばせるのでは無く、説明文だけで表現しようと頑張りました。いかがでしたか？

原作ゲームのティアが所属する『情報部』と同じ役割を持った組織は現実にも存在します。

それは要するに007の様な、いわゆる『スパイ』の集団です。扱う物が『情報』ですので、それを守り通す高い戦闘技術を求められます。しかし、それ以上に求められる物が有ります。

それは『味方を作る力』とでも言うべき物です。

『情報源』『人間』と言っても過言でも有りませんので、その『人間』を時にはおどし、おだて、なだめ、すかし『味方』にし様々な支援を引き出します。悪い言い方をすれば『人心掌握技術』とでも言うべきでしょうか。

しかし、原作のティアはルークのワガママで世間知らずな言動に、呆れ、怒り、ことごとく文句を付け彼と衝突します。

ティアは世界有数の『精強無比の騎士団』を率いる人物を倒そうとしています。

ならば、ルークを通して『王室と縁の深い公爵家』を味方にした方が有利に成りますし、公爵家が無理だとしても、仲間は一人でも多い方が良いでしょう。

しかし、やった事は『ワガママな子供』のルークと言い合いをして『無知』に呆れ、彼をバカにする事だけでした。

ティアのキャラクター設定として『経験豊富な優秀な軍人』と有りますが、皆さんは、どう感じますか？

第九話 方向性がちがう

ルークは『シャープネス』という譜術によって、音素の刃を纏い、力を増した木剣を振るイノシシ（サイノツサと言っらしい）を打ち据える。 キュウコン（こちらはプチプリと言っらしい）が、鞭の様な葉を振り回しルークに体当たり気味に打ち着ける。しかし、譜術『バリアー』によってルークの全身を覆う、音素の障壁に阻まれ、ルークの肌を切り裂く事が出来ない。受けた右手に薄らと赤い線が出来るのみ。それを無視してルークは、プチプリを木剣で殴り倒す。

最後の一匹のサイノツサが、力強い四肢を駆使してルークに突進するが、譜術『デープミスト』によって、視覚を惑わされルークには無く、その後方に有る大木に激突してしまう。

目を回すサイノツサに、ルークが一足飛びで接近し大上段から渾身の木剣を打ち下ろす。着地と同時に、木剣を返し全身のバネを総動員し、身体ごと刃を跳ね上げる。サイノツサが妙にか細い声を漏らし、その場に仰向けに倒れ伏す。慎重にサイノツサに近づき、木剣の先でつつき安全を確かめるルーク。

「どうだ！！これが、ヴァン師匠直伝のオレの剣だ！！」

ルークが誰に言うでも無く威勢良く吠える。

正直に言えば本当は今にも逃げ出したい位に怖かった。しかし、ルークは逃げなかった、戦った。そして勝った。メシュティアリカの譜術が有ったからだ。彼女が居たから勝てた。

なるほど『音律士』『第七音素譜術士』と、特別な名前を用意されている事に納得出来る。

彼女の様な能力を持った人物が一人いるか、いないか、では大分戦い方が違ってくるだろう事は、戦闘の『素人』のルークにでも

解った。

しかし、当のメシュティアリカ自身は何やら浮かない顔をしている。

未だ、ルークが戦う事に納得しきれていないのだ。ルークは、そんな彼女の様子に気付かず

「じゃつ、行こうぜ？」

と歩き出すが、数歩進んだ所でメシュティアリカが立ち止まったまま、だという事に気付いた。

「お、おい？どうしたんだよ？ボウっとして…まさかどっかやられたのか？！」

「え？あ、いえ！違います。大丈夫です…」

「ホントかよ…？」

ルークはメシュティアリカの身体をジロジロ見回し、傷が無い事を確認すると少しほっとする。

「じゃあ、どうしたんだよ？」

「いえ…その…わたしは、こんなに弱かったんだ…と思ひまして…。少し落ち込んでいたんです」

それは、ルークにとって意外な答えだった。

「いや、弱くねえだろ？三、四匹出て来るまで投げナイフとか光の弾とかでスゴかっただろ？カッコよかっただろ？」

ルークは素直に思った事を口にするが、メシュティアリカは困った様に苦笑するばかりで…

「はい…あれには、わたしも自信が有ったんです。ですが、思っていた程でも無くて…。この辺りの魔物はあまり強い部類では無いはず、なんです…」

『あまり強く無い』？ルークにとって聞き捨てならない台詞が聞こえたが、今はあえて無視する事にする。今はメシュティアリカを元氣付ける方が先決だと思った。

何か不自然に成らず、彼女を元氣付ける話題を無いだろうか？話を反らす材料でも良いが…

その時、右手に何やら違和感がある事に気が付いた。先程、魔物に受けた傷…と言うよりアザ、であった。この程度の傷は、剣の稽古では日常茶飯事で全く気にならなかったが、『これだ！』とルークは胸中で、今は自身の未熟さを棚に上げ、歓声を上げた。

「イッテエー！なんかイテエと思ったら、あん時かあ！？オマエ、治癒術使えるんだよな？！なおしてくれよ！」

多少、大袈裟に早口でまくし立てルークはメシュティアリカにルークは右手のアザを見せる。

「は、はい…！少しじつとして下さい。癒しの光よ…『ファーストエイド』」

メシュティアリカはルークのアザを覆う様に両手を、かざすと淡い光がアザを優しく包み込む。たちどころに、アザが消えてしまう。

「おお！やっぱ治癒術はベンリだな！師匠とはホーコーサーつうのか？ホーコーサーがちがうスゴさだな！」

早口にはあるが、ルークは素直にメシュティアリカの譜術を称讃する。

「ふふ…これ位は、治癒術士なら誰でも出来る事なので。そこまで凄くは…」

「オレはデキねえぞ？だから、やっぱスゴいんだと思うぜ？」

「ルーク様…」

メシュティアリカの謙遜…と言うより自己否定を、ルークは真つ向から封殺する。

「王族の仕事もメイドやコックの仕事もホーコーサーが、ちがうだけでジョレツ？を付ける事はデキない、しちゃイケナイって師匠と母上が言ってた！だから…その…ケンソンだか何だか知らねえけど…逆にイヤミつばいんだよ！ウゼエんだよ！！だから…やめろよ。オマエはスゲエで良いだろ…？」

初めこそ真つ直ぐにメシュティアリカを見つめていたルークだったが、言葉を紡ぐにつれて視線が上下左右に泳ぎ口調と言い回しが荒くなっていく。しかし、心からの気持ちでメシュティアリカに感謝し、尊敬を抱いている事は明らかだった。

「ルーク様…。ありがとうございます…」

「ん…。ん？いや、礼を言うならオレのほうじゃねえ？」

「ふふ…いいえ。わたしの方ですよ」

「ア、アホな事言っでねえで、さっさと行くぞ！」

「はい…」

ルークは照れくささが限界に来て、逃げる様にして歩き始めた。

そんなルークの不器用な態度に微苦笑しつつ、メッシュティアリカは彼の後に続いた。

第九話 方向性がちがう（後書き）

この物語のティアは『回復支援型キャラ』として、原作の彼女よりパワーアップしています。

この回では、ルークはティアの事を精一杯フォローします。

ルークはこんなに気の回る奴では無いと思う方も多いかもしれませんが、原作ゲームにおいても、第一印象が最悪な『謎の侵入者』のティアが平謝りするのを見て思わず『どんな形であれ外に出られてラッキー』といった感じでフォローします。しかし、ティアは、それをフォローだと全く気付かず『バカな話』と自分から振った話題であるにも拘らず、一方的に話を打ち切ります。

皆さんはどう感じますか？

第十話 大切なペンダント

「おらあぁっ！！」

気合い一閃。ルークはサイノツサの額に交差法気味に、踏み込みと腰の捻りで威力を増した木剣を叩き着ける。

譜術で強化された、ルークの剣は魔物を一撃で昏倒させる。

「どうだ！なんとなく『コツ』が解ってきただろオレ？」

「はい…無駄な動きが段々と無くなって来ています。でも、『慣れ始め』が一番怖い時です…。油断大敵です」

「解つてら！師匠が『ユダン』するトコなんか想像デキねえしな？
師匠の場合『ヨユー』だろ？オレもいつか『ヨユー』を感じさせる
剣士になるぜ！よし！行こうぜ！！」

木剣を掲げて、はしゃぐルークにメシユティアリカは、彼の實力を評価しながらも注意を促す。ルークはムツとした顔をするも、直ぐに屈托無く笑い、自身の夢を語り元気良く歩き出す。

…と、その時ルークは爪先に何か光る物を見つけた。石では無い様だった。それは…

「ペンダント…？」

特徴的な薄紫色の宝石が美しい首飾りだった。拾い上げて見ると吊り紐が切れてしまっている。

「あ、それは…」

「なんだ、オマエのか？ほらよ」

メシュティアリカは自身の胸元と、ルークの持つペンダントを交互に見る。

ルークは、特に気にする様子も無く気軽に手渡す。

「良かった…ありがとうございます。ルーク様…」

ペンダントを大切そうに押し抱き、メシュティアリカはルークに深々と頭を下げた。

「お…おう、別にひろっただけだし…。そんなに大事なモンなのか？」

予想以上の感謝のされように困惑するも、そのペンダントにルークは興味を抱いた。

「はい、大切な御守りです」

「オマモリか…良かったな。無くさなくて」

「はい、本当にありが…」

「やめろって！何べんも礼を言われる事じゃねえだろ？ウザイって…」

やや乱暴な口調で、そっぽを向くルーク。

そして、メシュティアリカは少し考え込み…

「ええと…助かりました？」

「ん…ん？それも礼だろ？」

「…そうでしょうか？」

しばし、二人揃って首を傾げる。

「ま、いいか！『もちずもたれる』ってヤツだ！仲間だしな！」

「もちず…？ああ、『持ちつ持たれず』ですね？」

「そうとも言うな……。いいんだよ！意味は知ってんだから！よし、いくぞ！」

快活にフォローしつつ話題を切り上げる『時々ことわざを交えて明るく話す賢く優しいオレ』の演出に失敗したルークは、屋敷に戻ったら真っ先に国語辞典を読もうと心に誓い、再び歩き始めた。

魔物と戦い、時には逃げ、隠れてやり過ごしたり、と確実にルーク達は、溪谷を下って行く。

次第に、森の木々が疎らになっていく。

「もう少しです。後は街道に出る事が出来れば、此处がどの辺りなのか解るはずです」

「やっとかよ……でも、これでまた、ツマンねえ屋敷の中に逆戻りか…おもいつきり遠くだったらイイのに」

「ルーク様…早くお屋敷に着けば、それだけ早く公爵様、お屋敷の方々は安心なさいます。きっと、それが一番ですよ…」

確かに魔物は恐ろしい。しかし、ルークにとってはその『恐怖』という感情も屋敷では到底味わえない『新鮮』な物だった。

メシュティアリカの言う事も解る。父親のファブレ公爵が狼狽えたりする様は、想像出来ないが従姉のナタリアは勿論、親友のガイ、庭師のペール、メイド達は泣いてしまったかもしれない。母親のシュザンヌに至ってはショックで寝込んでしまっているかもしれない。

しかし、一度『新鮮な刺激』を体感してしまったルークに、成

人までの三年間耐えられるだろうか？

しかし、国王である叔父インゴベルトの言い付けは絶対だ。ルークのワガママで優しいシュザンヌが叱責を受けるかもしれない、耐えるしか無い事だった。

『恐いけど出来るだけゆっくり帰りたい』というのが、ルークの素直な思いだった。

今は考えても仕方がないと、ルークは頭を振り話題を変える事にした。

「トコロでさっ…もしもの話、ココがマルクトだったらどうする？」

「それは…困りますね。マルクトには、ファブレ公爵に恨みを持っている人も多いでしょうから…ルーク様を狙って、という事も…」

「マジでか…！？」

想像に反して、重い話題に成りそうな事に驚愕するルークだったが、彼はめげなかった。

「そ、そ、そうなったら…ほら、ヤ、ヤバイしさあ…ケーゴやめねえ？前に読んだ本で主人公のヤツら、そうやってミブン隠してたんだよ」

「は、はあ、でも…」

突然の提案にメシユティアリ力は困惑するが…

「イイじゃねえか？『仲間』だろ？オレら。バレてフクロにされるよりイイだろ？命令だぜ？」

「…解りました。じゃなくて…解ったわ。勿論、私的な場面だけです…だけね？ルーク…」

「お、おう…」

苦笑しながらも、ルークの提案を受け入れ。メシユティアリカは彼を『呼び捨て』にし、敬語を止めて話しかける。ルークは自分が言い出した事にも関わらず、照れくさく成り、そっぽを向く。

「わたしの事は『ティア』と呼んでくださ…呼んで。親しい人は皆そう呼ぶから…」

「お、おう…」

微笑むティアに、目を合わせる事無く頷くルーク。

とその時、小川の向こう側は森の木々が消え視界が開けた。

「出口か？」

「その様です…様ね」

山道から桶を抱え、眠そつな顔をした中年男が表れた。

「ふあ…？なんだお前ら？こんな朝から…まさか『漆黒の翼』か！？…なんてあ盗賊みたいな連中が、こんな早起きなワケ無いよな？あははは！」

中年男は、一人で冗談を言つて一人で勝手に笑う。そんな男に、ルークはかなり『カチン』ときたが、ティアの『まあまあ』という微笑で抑えられ、とりあえず黙っている事にした。

「わたし達は道に迷ってしましまして、此处から首都へはどう行けば良いのでしょうか？」

「首都？なら、ちょうど良い。俺は辻馬車の馭者だ。終点は首都だぞ？」

「マジか？！ヤツタな！乗っけてもらおうぜ！」

願ってもない事だった。色々な物を見たいのは山々だが『安全』には変えられない。

「そうです…そうね。この辺りの土地勘が無いので、お願い出来ますか？所で、その…」

ティアも馬車を使う事には異論は無い様だが、何やら言い淀む。

「おいくら位…？あまり持ち合わせが無いので…」

「首都までとなると、一人一万二千ガルドだが、どうだ？」

「う…」

公爵邸から『着のみ着のまま』飛ばされてきたティアにとっては、とても払えるはずがない大金であった。

しばし考え込むティアだったが、何か決意する様に頷き、先程ルークが拾った『大切なペンダント』を取出し…

「それでも乗せて頂けますか？」

…と馭者に手渡す。

「へえ、これは大した宝石だ。よし、乗せよう」

「ちよつと待った！！おい、ティア！それ大事なモンなんだろ！？」

ティアの行動に驚き、ルークは大声で馭者との間に割って入る。

「首都に着いたら、ウチで払うよ。だからソレは止めとけ。なっ！？」

「そっはいかないよ。前払いで無いと…」

「ああん?!このオレが乗り逃げするつてのか!?コラア!!」

ティアを苦笑して止めつつ、馭者には睨み付けドスの効いた声で脅すルーク。

「ルーク…そんな言い方してはダメよ。貴方の安全の方が重要です。今はペンダントよりずっとね?」

ティアは馭者に詰め寄るルークを、諫め微笑みかける。

「でもよお…」

「ありがとう、ルーク。大丈夫だから…。馭者さん、お願い致します」

今度はティアがルークと馭者の間に入り、頭を下げる。

…とその時である。

「『スタールビー』かの?しかも薄紫色、こりやまた珍しい。小豆色や真つ赤な奴はよく見るし赤みが強い方が装飾品としては高価だが、薄紫は『護符』としては一番だ…」

それは、初老の男の声だった。見れば、変わった服を着て、腰に剣を二本差した男が馬車が有るであろう道の向こうから、こちらに近づいてくる。そして、ティアのペンダントの『目利き』は続く。

「それ位のモンなら、その筋の店に持ち込めば『十万ガルド』は軽いだろっの…」

腕を組み、うんうんと一人納得している男。

「つまり、何が言いたいかと言うとの…」

不敵に笑い、子供のヤンチャを諷める様な声音で、馭者に『びしり』と指差し男は吠えた。

「『あこぎな商売してんじゃねえ！』…って話だの。あははは」

第十話 大切なペンダント（後書き）

『大切なペンダントを馬車に、させてティアが可哀想』『気付かないルークは無神経』という意見をよく目にしますが、出会って一日あるいは数時間と経っていない間柄で『母親の形見の品』という深い部分まで解る物でしょうか？

個人的には解ったら解ったで、その種の身の上話もすてないのに、逆に恐いと感じますが…。

この回は色々詰め込み過ぎた感じですが、いかがでしたか？
オリジナルパーティーキャラクターが次回より本格的に登場します。

メアリー・スーに成らない様気を付けて書いていきます。

第十一話 お節介おじさん

「その首飾りの形、随分昔に流行ったモンだ…。わしも亡妻に送ろうとしての…。金が足りずに、安モンの指輪に名前を彫って貰うので精一杯…。あの時の店員殿の『渋さ』と言ったら、もうのう！あははは」

突然やって来た男は、いきなり遠い目をして語り始めた。顔を赤らめたり、苦笑したり、頷いたり、と何とも、良く口の動く男だった。

ルークは「屋敷の外のおっさんって皆こんなかよ？ウゼエ…」
と思い始めた。

ティアは男の話よりも、出で立ちの方が気になった。顔は良く日に焼けていて、深く刻まれた『笑い皺』がこの男の人柄を明確に示しているが、農民と言われたら、そうとしか見えない平凡な顔立ちだった。しかし、男の服は少し変わっていた。直線的な裁断と縫製が、特徴的な服、軽く反りの有る細身の剣、何とも珍しい格好だった。

（確か…『キモノ』と『カタナ』だったかな？）

ティアは直属の上司カンタビレ謡士が、似た服を部屋着として着ていたのを思い出した。「だらしないなあ…」というイメージしか無かったが、どうやらそれは、着ている本人に問題が有ったらしい。

それはさておき、男の話は佳境に入っていた。

「…ずばり『その首飾りは誰かからの贈り物。もしかしたら大切な

形見の品!？」って話だの。どうかの?当たらずとも遠からずだろ?」

男はにやり、とティアに笑いかける。

「それは、その…」

「本当かよ…?そんな大事なモンを…!やっぱナシナシ!アトばらいだ!!」

確かに『兄から贈られた母の形見』だった。思わずティアは口籠もる。

ティアを咎める様に睨んだルークは、馭者に向かって声を荒げる。

「まあ、お前さんも食い扶持が懸かってんだ…。『あんま突っ掛かるのも可哀想』って話だの。そこで相談なんだがの、ご両人」

馭者の肩をぽんと、気安く叩きつつ、ルークとティアに人の良い笑顔を向ける。

「なんだよ…?」

「…なんでしよう?」

流石に二人は警戒するが、男は気にする様子も無く続ける。

「とりあえず首都に行くのは一先ず諦めて『払えるだけ払って行けるトコまで行く』ってのは駄目かの?」

妥当な提案だった。ルークとティアは、肩透かしを食らった気分になる。

「いくら位出せるのかの？」

「ええと、これだけ…千ガルドです」

「オレは、百ガルド有った…」

「オヤジい、どうかの？」

ティアは法衣の袂から、財布を取り出し、ルークはズボンのポケットから、コインを一枚取り出す。

「ああ、これだったら、次の街まで行けるなあ…」

二人の手のひらを覗き込み呟く。

「それで、その街で首都の知り合いに手紙出して、迎えか路銀を送って貰うって寸法だ。もしくは、お嬢さんは教団の人の様だからの、その教会に駆け込むって手もあるの」

男は、満足そうに頷きながら『代案』を続けて出していく。
ルークとティアにとっても、特に文句の出ない案だった。

「あのう…馭者さん。これで、改めてお願い出来ますか？」

「あ、ああ、良いぜ。形見は大切にしなきゃな？」

少しバツが悪そうに再びティアは頭を下げる。同じく馭者の男も、バツが悪そうに苦笑しつつ快諾する。

しかし、この時ティアは『何処だか解らない場所に飛ばされた』事と『公爵子息を自分だけで守らなければならない』という事で、自分自身でも気付かない程に、頭が混乱していたのだろう。そして、魔物の巣を掻い潜り、ようやく人間に会い、尚且つ馬車で移動出来ると聞けば『気が抜ける』のも致し方ない事だろう。

本来の彼女なら、首都までの馬車代を聞いた時点で、この溪谷

の細かな地理を確認しただろう。そして『首都』というある種、曖昧な言葉では無く『王都バチカル』と回りくどくても念を押したかもしれない。

こんな小さな行き違いが、ルークとティアの旅を、より困難な物にしてしまう事を、この時二人は知るよしも無かった。

第十一話 お節介おじさん（後書き）

今回登場した一番しゃべっている、おじさんがオリジナルのパティーメンバーです。

最初は彼一人だけを加えて、原作を再構成するだけしか考えていなかったのです。しかし彼は『ルークの立場、心持ちもある程度、理解でき味方でいれる』という役回りだった為に原作のままのパティーメンバーとは必ず『内輪揉め』が起きてストーリーが全く進まない事に気が付いたのです。

プレイ中は特に気にならなかったのですが、原作パーティーメンバーの台詞を文章化して見ると、個人的に到底、人として見逃せない物も多々含んでいたのも、大幅な『性格改変』に踏み切りました。

製作スタッフのインタビューを見る限り、ルークは『現代の怠惰な若者』で他のパーティーメンバーが『何でも知っていて説教出来る立派な大人』という役回りの様ですが…悪い所を注意せず放置して、取り返しの着かない失敗をしたら、『だから言ったのに…』という感じで全員で取り囲んで『全人格を否定する』のが『立派な大人』とは個人的には思いたくないのですが…皆さんはどう感じましたか？

第十二話 痛恨の失敗

朝の澄んだ空気を掻き分け、山道を抜け、大きな橋を渡る辻馬車。

馬車の内で寛ぐルーク。馬車に乗るのは初めてだったが、中々快適である。これで『馬のいない馬車』だったら「言う事無し！」……だったのだが。

「そういや、ご兩人。自己紹介がまだだったの。『ここで会ったのも何かの縁、一期一会と行こうじゃないか？』って話だの。わしは、イシヤマ・コゲンタってケチな野郎だの。ちなみに言っとくて、イシヤマが家名で、コゲンタが名前だの」

と、とりとめの無い世間話（もつともルークとティアはもっぱら聞き役）をしていると、唐突にイシヤマ・コゲンタは自己紹介して来た。

「ああ、そーだっけ？オレはルーク。ルーク・フォン……」

ルークが名前に続けて、家名を名乗ろうとした瞬間、耳をつんざく爆音が響き渡った。

「なんだあ？！！」

ルークは慌てて外を見ようと窓に飛び付く。次の瞬間、ルークの目に何とも凄まじい光景が飛び込んできた。

この辻馬車の十倍は有るか、という巨大な陸上戦艦が一隻、馬車を一台に追跡していた。

甲板に設置された譜業砲が、火を吹き馬車に砲弾が襲い掛かる。

しかし、馬車は右に、左に、と見事な動きで砲撃を躲し、凄まじい速さで戦艦を引き離して行く。

「高速小型哨戒艦…速い。でも…」

「ありゃあ『漆黒の翼』とか言う盗人だの。自動四輪車とは、また珍しいモンを。しかも、動かしてる奴、盗人にしとくにや勿体ない動きだの」

「自動？もしかして、あれが『馬のいらぬ馬車』か？！スゲエな！戦艦より速ええなんて！」

小回りの効く小型艦、と言っても大型艦と比べての事である。瞬間的な加速性能と旋回性能では自動四輪車に分が有る。その上、駆動系を極限まで改造しているに違いなかった。

自動四輪車が先程ルーク達が渡った大きな橋に、ほとんど減速せず飛び込み、渡っていく。

自動四輪車は、橋の中段に来た所で大きな円筒形の何かを、荷台から次々と吐き出して行く。

次の瞬間、光った。そして、空間を揺さ振る轟音。しかし、爆風はほとんど感じ無い。光に驚き、目を閉じていたルークは不思議に思い、慎重に目を開け様子を伺う。

見ると、六角形の光の板が蜂の巣状に組み合わさり半球を作り、辻馬車を覆っていた。

「今日は珍しいモン大行進だの…。見せ物じゃない本物の『譜歌』を間近で見れるとは、お見逸れした音律士殿」

コゲンタは目を見張りティアに頭を下げる。

「…いえ…、た…いし…」

ティアの声が擦れている。「コホン」と少しむせた様に咳き込む。

「ティア…！大丈夫か！？」「ええ…大丈夫、ありがとうルーク。少し難しい『譜歌』を慌てて使ったから、喉がびつくりしたのね？きつと…」

ルークには、まだ少し喋りにくそうに見えた。しかし、冗談交じりに苦笑して誤魔化すティアを、これ以上追及するには気が引けたが、言わずにはいられなかった。

「ムリして使わなくなつて、大丈夫だったかもしれないだから…。これからはムリすんなよ」

「…そうね、ありがとうルーク。でも、『やっておかなくて』後悔するより、『やっておいて』後悔する方が良いじゃない？…なんて、ええと？何て言えば良いのかな…？」

ルークの心配を有り難く思いつつもティアは首を横に振る。

「要するに『備えあれば憂い無し』って話だの。『大は小を兼ねる』とも言つか？」

「あ、そういう感じです。無理しないと、いけない時もあるから…とにかく、わたしは大丈夫だから」

ルークの気遣いを、突き返す様な形になってしまった事を後悔しつつも、ティアは微笑みかける。

「チツ…ワケわかんねえ。勝手にしろよ…」

やはり不承不承といった様子ではあったが、ルークはとりあえ

ず矛を収めた。

「我々の為に、誠にかたじけない。音律士殿、改めてお名前を伺いたい。拙者、エンゲープのイシヤマ・コゲンタと申す」

「ええと…ご丁寧にどうも。メシユティアリカ・グランツと申します。ティアとお呼び下さい。……え？エンゲープ…？」

先程の気さくな態度とは全く違う、折り目正しい言動に恐縮してしまうティア。しかし、ある事に気が付き体が固まった。

「なあ、エンゲープってなんだ？」

「村の名前でしての。畑やら、田んぼやら、果物やらを育てて世界中に売りさばいてる『食料の村』って感じで、村と言っても、こちらの街よりデカイですがの」

「ふうん…知らねえなあ」

「あははは」

ルークとコゲンタが何か話しているのは解るのだが、何を言っているのかは頭に入って来なかった。

「しかし、漆黒の翼の奴ら無茶苦茶しやがるの。『ローテルロー橋』が落ちてしまった。ありゃあ、治すのにどれだけ懸かるか？」

「ダイジな橋だったのか？」「そりゃあ…あれが無きゃ向こうの大陸に行くのは海路しか無く成りますからの」

少し待つて欲しかった。そう、ティアは色々な事を、待つて欲しかった。今し方、壊れた橋がローテルロー橋だったとしたら、『目的地』とは、逆方向だった。

ティアは、根本的な部分で自身が勘違いをしていた事を理解した。つまり、ここは…

「マルクト…？向かっているのは…首都は首都でも…帝都『グラン
コクマ』…？」

「うん？どーした？ティア？」

ティアは今すぐ、ルークに土下座してしまいたい衝動を堪え、
絞り出す様に言った。

「ルーク、ごめんなさい。間違えたわ……」

第十二話 痛恨の失敗（後書き）

何だか、文章がごちゃごちゃしてしまいました。要修業です。

書きながら思ったのですが、アビスは「街」が少ないですね。マルクトの場合は自治領のケセドニアと炭鉱のアクセリユスを数えなければ、グランコクマ、エンゲーブ、セントビナーの三つです。

ティアに「勘違い」させる為に曖昧な台詞回しで乗り切りましたが、物凄く書きづらかったです。

アビスの世界は「地球の縮図」「現実的」という触れ込みでしたが…

皆さんはどう感じましたか？

第十三話 旅は道連れ世は情け

「え？じゃあ、ここ…マルクトなのか？」

「ええ…そうなの…」

「きよとん」と聞き返すルークに、ティアはうなだれる様に頷く。

「え？では、首都は首都でもキムラスカのバチカルに行くはずだった…と？」

「はい…そうなんです…」

バツが悪そうに頭を斯くコゲンタに、さらにティアはうなだれる様に頷く。

「え？そんじゃあ…悪い事しちゃったなあ…」

「はい…そう…じゃなくて！ちがいます！しっかり確認をしなかった、わたしがいけなかったんです！」

本当にバツが悪そうに頭を下げる馭者に、ティアはうなだれる様に頷いてしまいそうになるが、慌てて首を振る。相当堪えているようだ。

「じゃあ…どうする？予定通り、エンゲープの旦那が言ったみたい
に、次の街まで乗って行くか？」

「そうですね…。只、今は情勢が情勢なので、バチカルに連絡が着くかどうか…」

「ああ、そつだよなあ…」

ティアは馭者の質問に、一応受け答えはしているものの「どうするのが一番良いのか解らない…」というのが正直な所だった。

「しっかし…。迷いに迷ったモンなの？バチカルに行くつもりがタル溪谷とはなあ。あははは…」

「ち、致命的な方向音痴だったんです…。多分…わたし…」

コゲンタは苦笑しつつ率直な疑問を述べ、ティアはそれに『バチカルから超振動で飛ばされて来た』という事を誤魔化す為とはいえ、少し可笑しな言い回しで応じる。やはり、堪えているようだ。

「ええ…。と。トチカンねえし！しょ、しょうがねえよ！気にすんなよ！なっ？！ハハハ」

ルークはうなだれるティアを気遣い努めて明るい調子で笑うが、ティア自身はそんなルークを見て、さらに沈痛な表情になる。

「土地勘が無くても、場所を特定する方法は知識として知っていたのに…わたしはそれを活かせなかった…。例えば、あの光る花『セレニア』と言うのだけれど、音素が濃い場所、この場合、自然界では『セフィロト』位でしか、あんなには咲かないの。それから『セレニア』が咲いていられる環境の『セフィロト』はマルクト側にしか無い…。よく考えれば解る事だったのに…わたし…」

ルークの解らない単語が飛び交っているが、あくまで、ティア自身は『自分が悪い』という事を譲る気は無いらしい事はルークにでも解った。しかし、ルークも食い下がる。

「……屋敷の外を見て回るなんてメツタにデキねえし！むしろ、望

むトコなんだよ！イイじゃねえかマルクト？！ジヨートーだよ！！
だからそんな顔すんな！あと謝んな！ウゼエっての！！」

ティアの態度は、『騎士』という立場から来る責任感や使命感
だという事は、世間知らずのルークにも理解出来る。

しかし、なんとなく癢に触った。まるで『頼りにならない』『
弱い』『対等では無い』と突き付けられている様で、癢に触るのだ。
そして、ルークは真っ直ぐにティアを見据え吠えた。

「ルーク……ありがとう……」

「ん……」

「どんな事をしてでも、絶対に貴方を連れて行くから。協力してく
れる……？」

「まかせろって……。たよりにもしてる。『持ちつ持たれず』だろ？」

「ありがとうルーク……」

「だから、ウゼエって……」

端から見れば『余人には侵しがたい』二人だけの世界を、作り
出している様に見えなくも無い。

もつとも『いきなり外国に放り出された』二人なのだから、当
然と言えば当然ではあるが……。そして、そんな事情が有るとは、つ
ゆ知らない『若い二人の世界から存在を抹消された』と本人達は思
っている。『おっさん二人は「ダウトから愛の逃避行！」』『どこ
かの貴族の御家騒動！』『君と響き合う物語！』『心が出会う
物語！』等々、好き勝手な想像を巡らせて、こっちはこっちで盛
り上がっていた。

「まあ……なんとなく甘酸っぱい感じで、話がまとまった所で、年
寄りから提案なんだかの？あははは」

「甘酸っぱいってなんだよ！？甘くも酸っぱくもねえよ！」

照れくさそうに、バツが悪そうに、コゲンタが『若い二人だけの世界』に侵入を図る。

その瞬間、ルークはコゲンタの物言いに突っ掛かる。

「もし、良かったらエンゲープに来んな？村を上げて歓迎ってワケにはいかんがの。勿論、手紙も出せるし、教会も有る、すぐに路銀に成りそうな仕事も当然有る。まあ『急がば回れ』って話だの。あははは」

コゲンタはルークを宥める様に屈託なく笑い、言い放った。

第十三話 旅は道連れ世は情け（後書き）

ティアの反省会の回、そしてルークの恥ずかしいセリフでした。ルークとティアの掛け合いは書いていて恥ずかしいですね…。年齢的に辛いです。

『悲観的に準備して、楽観的に対処する』この言葉は、危機管理のもっとも基本的な考え方です。

簡単に言えば『備えあれば憂い無し』という意味です。準備段階では最悪の青写真を頭の中で描き、いざ事が起これば、その青写真を元に積極的に事当たるといふ形になります。

この考え方は、アビスの物語でもキーワードになりますので頭の隅に入れておいて下さい。

第十四話 一難去つて…？

「歩いてエンゲープへ行くぜ。観光がてらさ」

…という事で、ルークとティア、そして、お節介で変なおっさんイシヤマ・コゲンタは、辻馬車を降り歩いてエンゲープに行く事にした。

もちろん、コゲンタは馭者に『差額払い戻せよ？』って話を忘れ無い。その時の馭者の泣きそうで怒り出しそうで優しそうで何とも言えない、複雑な表情を見たルークは『哀愁』という感情を感覚的に理解した。

それはさておき、ルーク達三人は『食料の街エンゲープ』に向かい、東ルグニカ平野を東にゆつくりと進んでいた。

そして、その道のり『明るい外の世界』はルークの好奇心を大いに刺激した。

ルークは、ここぞとばかりにティアに質問した。

『草花の名前』はもちろんの事『何故こんな形なのか？』や『何故こんな色をしているのか？』という事まで聞いて来るルークに、ティアは内心舌を巻いた。何とか、持てる知識を総動員してルークの疑問に答えるが…。答える事が出来ない疑問も多く有った。

そんな時、助け船を出したのはコゲンタだった。

もつとも、かなりイイカゲンな部分が多かったが…。『この草は食べられる』『痺れ薬に成るけど、痛み止めに成る』『実は毒草だけど、虫除けには持って来い』といった事には非常に詳しくかった。

「もしかして、イシヤマさんは植物学者か何かなんですか？」

「ゼンゼン見えねえなあ」

「あははは、まさかまさか、エンゲーブで身に付けた知識と実体験の話だの。いやあ『腹が減ったからって無闇に草なんか食うもんじやない』って話だ」

「バカじゃねえの？」

「ル、ルーク…！」

「あははは」

中々、波乱万丈な人生を送ってきたらしい。

「さあ、もうエンゲーブに着きますぞ？」

コゲンタが前方を指差す。「ようこそエンゲーブへ」と書かれたアーチが見えて来た。

しかし、集落というか人家は見当たらず。街道に突然アーチが「ぽつねん」と立っていた。

「……。家とかゼンゼンねえじゃん。ホントにエンゲーブとやらに着いたのかあ？変な草むらばっか」

「ルーク、あれが畑よ。野菜や果物を作っているの」

「ちなみに、この辺りのは麦だの。パンやらパスタやらの材料になる」

「へえ…元からあの形じゃねえのか」

ルークは、パンやパスタの作り方を尋ねる。ティアとコゲンタは、分かりやすく噛み砕いて説明しながらエンゲーブの中央部に向かって歩いた。

エンゲーブの簡単な構造は、広大な田畑が広がる『外周部』と商店や民家、役所などが有る『中心部』と二つに別れている。つまり、村の敷地に入っただとしても、しばらく歩かなければ集落にはた

どり着けないのである。

ティアの、今の心境を一言で言い表わすなら「認識が甘かった……」につきる。

都市部の人間の「もう少し」「すぐ近く」「すぐとなり」と地方の人間のそれとは、大きな隔たりが有るという事を思い知った。

小一時間ほど歩いて、ようやく『中心部』に着いた。

「へえ、これが『家』かぁ。思ってたより小さいな？その分、数があるのか？」

それは公爵邸に比べたら、どこも『小さい』のは当然であろう。しかし、その言葉には「嫌味」は無く、純粹に「感心」しているようだ。

「なあティア。探検しようぜ！？牛乳を出す牛が見てみてえなあ。

ニワトリも見てみてえ、タマゴだ！」

『好きこそ物の上手なれ』とは良く言った物である。ルークは実に元気だった。

「探検は良いのだけれど、まずは教会に行つて、担当預言士さんに助力を求めないと……お金の事とか……」

「あ、そっか」

「あははは、村を回るなら後で、わしが案内しよう。しかし、申し訳ないが先にコレを届けさせていたきたい」

苦笑するティアにコゲンタは荷物を掲げ、笑いかけた。

「教会は市場を抜けた向こう側だの。あそこの預言士は、まあ……見た目はアレだが、良い奴だから親身に成ってくれるだろう……。わし

は村長のローズという人のトコに、しばらく居るから何かあったら来てくだされ」

何やら意味深な捨て台詞を残し「じゃあの…」と笑ってコゲンタは、去って行った。ルークとティアは、なんとなくコゲンタの姿が見えなく成るまで、その場にいて見送った。

ルークとティアは市場にやって来た。

二人は、その賑わいに圧倒されていた。親子連れに行商人、老若男女さまざまな人々で溢れ、活気に満ちていた。

「おお！スゲエ人だな！？オレ初めてだ！」

「わたしも、ダアトの市場以外は初めてね。本当に凄い人…。ルーク、はぐれない様に…」

「あ？！アレはなんだ！？」

「ルーク…！」

ルークは何かを見つけ、市場の喧騒に勢い良く飛び込んで行ってしまう。

ルークの姿は瞬く間に人混みに消え、ティアはルークを見失ってしまふ。すぐに、後を追うが追いつく事が出来ない。

「ルーク…！何処…？良かった、いた…！」

幸いな事にルークは、意外に早く見つかった。やはり、あの緋色の髪は良く目立つ。しかし、何やら様子がおかしい。たくさんリンゴやオレンジが並んだ屋台の前で、店主らしき中年男と口論していた。

「だからあ！払わねえなんて言つてねえだろ！」
「ルーク…！？一体どうしたの？」

ティアは怒鳴るルークに急いで駆け寄る。

「ティア！？」

「あ？なんだ？このボウズ、預言士さんのツレかい？こいつが、リングを食い逃げしようとしたんだよ！」

「誰が食い逃げなんかするか？！金払うって事忘れてたんだよ！」

なんとなく、ティアには大体の事情は解った気がした。

ルークは公爵子息である。大貴族とて、買い物はしない事はないだろうが、庶民のそれとは『次元』が違うと言っても過言では無いだろう。『貴族』という肩書きの信頼で後払いや一括払いは当たり前。

まして、食べ物等の細々した物を直接本人が、買う事など先ずあり得ない。そして、七年間屋敷から出る事を許されなかったルークは当然、買い物経験など無い。そうした、様々な『認識の隔たり』から来る不幸な誤解だった。

「すみません…。彼は…ええと…ダアトの…そう、修道院から出た事が無いので…。どうかお許しください」

「ああ…いや、お代を貰えれば文句も何も無いだがね…へへへ…」

深々と頭を下げるティアに、氣勢を削がれた店主は苦笑いするしかない。鼻の下も少しばかり伸びているのはご愛嬌。

「四十よ…四十ガルドだ。払えるか？」

「はい、本当に申し訳ありません…」

ティアは法衣の袂から、財布を取り出し、硬貨数枚を店主に手渡す。

「まいど。おいボウズ、これからは、金も無いのに勝手に食ったりするなよ?」

「うるせえよ…!」

少しばかり、おどけた調子の店主は苦笑する。本当にもう気にしていないようだ。

しかし、ルークとティアは、いたたまれない気分になってしまい、そそくさとその場を離れた。

本来の目的地である教会を目指して黙ったまま歩く。そして、その沈黙を破ったのはティアだった。

「ええと…ルーク…その…何て言ったら良いかな…?」

「し、知らなかったんだから、仕方ねえだろ!ウかれてて、ココがマルクトだったコト忘れてたんだよ!」

「ええと…そうじゃなくて…。ルーク…!」

叱られると思ったのか、ルークは言い訳を、始めるが、ティアは少し強めの口調でそれを制する。

「ルーク、この機会に『買い物』の仕方を覚えましょう。知らないより知っていた方がきつと良いと思うから…ね?」

ティアは言い聞かせる様に、ルークに微笑みかけた。

第十四話 一難去つて…？（後書き）

この物語のティアは、あの黒っぽくて夜の蝶みたいな妙にセクシ
ーな軍服では無く、普通のオラクルルーンや教団員とさほど変わら
ない格好をしています。（リグレットが似た服を着ていた位であの
格好のオラクルって出てこないんですが…情報部の制服だったんで
しょうか？）

プロデューサー曰く『アビスは日本の若者達全員に対するメッセ
ージでもある』という事なのですが…説教みたいな事が、ことさら
嫌われる世の中で、そのメッセージを『若者向けゲーム』に入れる
チャレンジスピリッツには脱帽するしかありません。

アビスのテーマの一つに『戦争』があります。

『戦争を知らない子供達』に物申す！というわけです。しかし、
こちらのプロデューサー、アビス発売当時41歳で、戦争はもちろ
ん戦中戦後も体験していない『戦争を知らない子供達』の一人です。
もしかしたら従軍ジャーナリストや戦場カメラマンから転身した
のかとも思いましたが、88年（当時24歳）にナムコ（現バンダ
イナムコゲームス）に入社し、テイルズオブファンタジア等のプロ
モーション業務を経て02年にテイルズオブデイスティニー2のプ
ロデュースを担当後2010年4月までテイルズシリーズのプロデ
ューサーを務めた様です。

氏の知っている『戦争』は「学校の勉強」と「報道」「戦争体験
談の視聴」くらいでしょうか？いずれにしても「人伝」という可能
性が高いでしょう。年齢から来る知識量の差は多少有るでしょうが
基本的には私達とさほど変わらないであろうと個人的には思います。
皆さんはどう感じますか？

第十五話　また一難…？

ルークとティアは、やっとの思いで混雑する市場を抜け、エンゲープのローレイ教会へとやって来た。

ローレイ教団の特徴的な音叉型のシンボルを掲げた大きく立派な建物がそこには有った。

しかし、周りは木造わらぶき、石積みの建物ばかりで妙に浮いていた。

「此処みたい…。入らせてもらいましょう」

「ああ…」

ゆつくりと大きな扉を開け、二人は聖堂に足を踏み入れる。

そして、そこには「怪人」がいた。教団の法衣に身を包んだ筋骨逞しい大男。スキンヘッドにアイパッチの大男である。大男は、ルークとティアの姿を認めると、傷だらけの歪んだ唇をさらに歪め言った。

「ようこそ、神の家へ…。何用かな？」

見た目に反して、静かではあるが聞き易い落ち着いた声だった。

ローレイ教団の教会は、ただ人々がローレイや始祖ユリアに祈りを捧げたり、預言を授かったりする為だけの場所では無い。

病氣や怪我の治療、孤児や貧困者の救済支援、教会同士の結びつきを利用した手紙（伝書鳩）や荷物のやり取り、巡礼者の宿の提供や支援、など多岐に渡る。

ティアは担当預言士に、ルークの素性と超振動の事を、ひとま

ず臥せ『不足の事態で準備もまま成らなかった旅』という事と『ロ
ーテルロー橋が落ち、ケセドニア経由でキムラスカへ行けなくなっ
た』事を話し。バチカルに向かう為に必要な最低限の費用と、『証
書』を頼んだ。

『証書』とは、ローレイ教団の旅の預言士に対し発行される
『身分証明書』の様な物である。

この『証書』を持っていれば関所や、検問所、国境をスムーズ
に通る事が出来る。そして、事件事故に巻き込まれたとしても『身
の証』が立てられる。

勿論、野盗や強盗の類には通じ無いだろうが「有ると無いとで
は全く違う」のである。

「変わった方だったわ…」

証書とガルドを大切に物入れに仕舞いながら、ティアが呟いた。

「ああ、オツカネエ顔なのにニコニコ(?)してて、スゲエ親切な
おっさんだったなあ」

「え…? ああ、そういう意味じゃなくて…」

確かに「山賊の首領だ!」と言われたら信じてしまいそうな凶
あ、もとい勇壮な顔立ちだった。しかし、ティアは苦笑して首を横
に振る。

「わたしが『変わっている』って思ったのは、あの預言士さんが『
預言』に頼らなかつた事よ。ほとんどの預言士は、苦難を乗り切る
方法として『預言』を詠む事を薦めるの…」

「『預言』? ああ、あれか。誕生日にヨんでももらう奴な。…で、何
でそうなんだ? オレ一回もヨんでもらった事ねえからイマイチわか
んねえなあ?」

ルークは首を傾げる。一方で、ティアは少し驚いていた。「預言偏重」と言っても過言では無い、この時代に一度も『預言』を授かった事が無いというは、実に『変わっている』事だった。よく考えれば、ルークは屋敷から出る事が許されていないのだから、必要無いと言えは必要無いのかもしれない。

「わたしは、誕生日くらいしか詠んで貰わないけど、凄い人は食事の献立も『預言』で決めているらしいわ…」

「めんどくせえ…！」

「そうしてしまう程に『預言』は良く当たるって事かな…。でも、時々『良い預言』に安心してしまつて何の準備や計画しないで、大変な事になつてしまう人もいて…」

複雑な面持ちのティア。

「『預言』自体は、ただの『道しるべ』で何の『力』も『意味』も無く、ソレに『力』と『意味』を持たせるのは人間自身だから…。あの預言士さんは、ソレをちゃんと知っているのね」

「なるほどなあ…そうだよなあ…」

一応、ルークは頷いてはいるが、少し理解が追い付いていないようだった。ティアは、そんなルークに苦笑し…

「…さ、買い物に行きましょう？貸して貰つたお金だから、大切に使わないと…お買い物覚えるには『お誂え向き』だけどね」

「よ、よおし…。さんすうは苦手だけど、やってやるぜ！望むトコだ！」

気分を変える様に、ティアは少しおどけた調子で話題を変えた。それにルークは、妙な気迫で応える。

ルークとティアは旅の準備をする為に、再び市場にやって来た。まずは、最低限に実戦的な武器を購入する為に、小さな武器屋に二人はやって来た。ルークは木剣の代わりに、ほぼ同じ感覚で使える剣を選ぶ。そして、ティアは儀式用の杖を下取りに出し、打突にも使える戦闘用の杖を選んだ。

ルークとティアはお互いに、武器を持たせなければならない事に「自分にもっと実力が有れば…」と、複雑な感情を抱いた事は言うまでも無い。

そして、道具屋で干肉などの保存食料、寝袋など細々した旅の道具を購入する。

嵩張らない様に、荷物を小さな二つの背囊に詰めてルークとティアはそれぞれ一つずつ背負う。

「ルーク、重くない？」

「こんくらいラクショーだって！なんならティアのも持つぜ？キタえてっからな！」

「わたしも、大丈夫。鍛えているから」

ルークとティアは、微笑み合う。

買い物を終えたルークとティアは、宿屋に向かう事にした。

「まずは、宿屋さんで荷物を置かせてもらって。一休みしたら、イシヤマさんに会って、いろいろ見学させて貰いましょう？」

「よっしゃ！いくかぁ！確か入り口の方だったよな？」

「あ、ルーク……！？元気だなあ……」

宿屋の方角に、威勢良く駆け出すルーク。ティアは、そんなルークを見て苦笑するしか無かった。

ルークとティアは、宿屋の前にやって来た。そこには、何やら人だかりが出来ていた。

「何か有ったのかしら？」

「なんだろう？…っかしジャマクせえ。入れねえじゃんか…！」

ティアは首を傾げ、ルークは毒付きながらも、宿屋の前にいる者達の話し声に聞き耳を立てる。

「駄目だ…。食料庫の物は根こそぎ盗られてる」

「北の方で火事があったからずっとだな。まさかあの辺に、脱走兵だか何だかが隠れてて食うに困って…」

「いや、漆黒の翼の仕業って事も考えれるぞ？」

どうやら、宿屋の食料庫が何者かによって荒らされたらしい。

「なんだ？漆黒の翼って食い物なんか盗むのか？あんなスゲー馬車持ってんのに」

ルークは特に他意は無く、素直な疑問を口に出したただけなのだが…

「食い物なんかとはなんだ！この村じゃ食料が一番価値のある物なんだぞ！」

宿屋の主人らしき男は、ルークの『なんか』を『侮蔑』として受け取り、声を荒げる。

確かに、農村なら農作物が『一番価値のある物』だろう。それならば、鉱山なら『一番価値のある物』は採掘された鉱石。軍事組織なら、様々な特殊技能や戦闘技術が『一番価値のある物』であろう。『一番価値のある物』は、その人の職業や生活環境によって違ってくる。

突然の災難に、冷静さを欠いているのは明白だった。

「なにケチくせえコト言ってんの。盗まれたんならまた買えばいいじゃん」

「ルーク…！やめて、そんな言い方しては駄目よ…！すみません、わたし達は農業の事は疎いので…」

「俺達がどんな思いで、鍬ふるってると思ってたんだ！」

「え？！ええと…そうじゃなくて…！」

ティアが間に入りルークを諷めるが、ルーク達は徐々に語気が強くなって行く。売り言葉に買い言葉、屋敷から出る事が出来なかったルークには、解るはずも無い事ではあるし、宿屋の主人も、ルークのそんな事情を知らない。『不幸な行き違い』だった。

と、そんな時である。ルーク達がリングを買った、食材屋の主人が駆けてきた。

「おおい！ケリーさんのトコも泥棒に入られたって！？」

どうやら、宿屋の主人とは顔見知りらしく食材屋は開口一番、質問した。

そして、すぐにルークとティアの存在に気付いた。

「あれ？預言士さんとボウズじゃないか？まさかボウズ、また食い逃げしたんじゃないだろうなあ？ははは」

些細な冗談、ほんの軽口のもりだったのだろうイタズラっぽい笑顔の食材屋の主人。

しかし、それは今この場では一番言っではいけない台詞だった。その場にいる村人達の怒りに火を着けるのに十分な台詞だった。

「なに！てことはウチの食料庫をやったのもお前か！！」

「泥棒は現場に戻るって言っしな！」

「お前、役人に突き出してやる！」

村人達は怒りの形相をあらわにし、ルークを取り囲む。

食材屋の主人だけは「何が何やら…」という表情で、状況に付いていけない様だった。

ティアがすぐにルークを庇う様に、村人達の前に飛び出す。

「待つてください…！誤解です…！ルークは…！」

「邪魔すんな！」

「…！」

ティアを村人の一人が突き飛ばす。常日頃から鍬を振る鍛えられた彼らの腕力は、侮れない。ティアは転びはしなかったものの、たたらを踏んで大きく体勢を崩してしまう。

「ティア！このヤロウ！」

ルークは、反射的に腰の剣に手を架ける。しかし、木剣から真剣に持ち代えた事に思い出す。

魔物達の死がルークの脳裏に、現れては消える。正直に言えば、後味は悪かった。可哀想だと思った。自分達が来なければ、その魔物達は死んでしまったりしなかったとも考えた。

しかし、「魔物だから…」「やらなければ、やられる…」と割り

切れた。言い訳出来た。

（コイツらは人だ…魔物とはちがう）

その躊躇いがルークの身体を素人のソレにした。
村人達に取り囲まれ羽交い締めになされてしまう。

「さあ、来い！先生に懲らしめてもらう！」

「役人に突き出すのはそれからだ！」

「はなせよ！このヤロウ！！」

村人達はルークを四人係りで、担ぎ上げる様にして村の奥へ連れ去る。

「ルーク…！」

「ティアアア…！」

何の罪も無い村人達を打ち負かしてしまう訳にはいかず、ティアは只ルークの名前を呼ぶ事しか出来なかった。

この、不幸な『災難』がルークに、さらなる運命の『出会い』に導く。

第十五話 また一難…？（後書き）

『ルークは、ひきこもり、ニート等の不真面目で無責任な若者がモデル』とプロデューサーや製作陣のインタビューで上げられる『常套句』ですが、「ひきこもり、ニート」不真面目、無責任」という先入観に取り付かれている様に個人的には思えます。

「働いたら負けかなって」というフレーズ。とある報道番組で取り上げられて以来、ひきこもり、ニートの『代名詞』と言っても過言では無い程、印象的なフレーズです。確かに、インパクトに満ちたコミカルなフレーズではあります。恐らく製作陣はこの言葉を聞いただけで『全て知ったつもり』になったのかもしれませんがね。

しかし、今ひきこもりだったりニートだったりする人達の中には、『真面目過ぎる責任感』や『周囲の期待』『周囲の要求』から、自身の実力以上の事（自惚れという意味では無く）をやるうとし、無理を続けた結果、体調を崩したりタイアしてしまい回復したとしても社会情勢や経済情勢の為、復帰するに復帰出来ないという人も少なく無いはずです。

ひきこもりやニートの問題は、個人個人の生活環境や人間関係で、事情が全く違ってくる複雑な問題です。

『自己責任』『自業自得』『個人のワガママ』と決め付ける事の方が『不真面目で無責任』な事のように思えます。

皆さんはどう感じますか？

第十六話 犯人は、この中にはいない

ティアはすぐに、ルークを追った。脚力には、あまり自信が無いティアは中々追い付く事が出来ない。

食材屋の主人もまた、状況を全て把握出来ていないがティアに続く。

「あの人ら、何であんなにキレてるんだ?!俺のセイだよな?!ボウズがああなったの」

「わたしの責任です...!わたしが、もつと...!」

「と、ともかく...急ごう預言士さん!でも大丈夫だきつと!行き先はローズさん...村長のトコだ。村長ならきつと上手く納めてくれる!あそこには今先生もいる!きつとリンチなんてこたあ無いよ!」

やや引きつった笑顔で、子供に言い聞かせる様に食材屋の主人は、ティアに笑いかける。しかし...

「私刑?^{リンチ}...ルーク...!」

最後の聞き捨てならない単語に、ティアの顔は、さあど蒼くなり、さらに走る速度を上げるティア。

「あそこだ!ローズさんの家だ!」

食材屋の主人が指差し叫ぶ。その先には、華美さは無いが立派な造りの藁葺きの家が有った。

玄関先に人垣ができ、しきりに中を伺っている。

何やら怒声が聞こえる、まさかリンチが始まってしまったのはと、ティアは人垣を掻き分け中へと急ぐ。

「すみません…！通してください…！通して…ルーク…！」

やっとの思いでティアは、ローズ宅の玄関をくぐった。

そして、ティアは一種異様な光景を目の当たりにした。それは

……

いい歳をした大の男達が、まるで叱られる子供の様に、床に直接正座させられていた。かなり、つらそうだった。

「お前らあ…『もう少し大人になれ』って話なんだが…。もう、人の親の奴も居るだろう？」

「『短気は損気』って言葉が、有ってなあ…。まあ、焦って抜いても良い大根は採れないって話だな？」

「『急がば回れ』とも言うなあ…。手間を惜しんで、良い作物が出来るか？って話だの」

「『疑わしきは罰せず』って言葉も有るなあ…。それっぽい感じだけで、吊し上げにしたら『あその連中は証拠も無く、ヨソもんをコソ泥扱いするデタラメな奴らだ！』って話になって、作物が買って貰えなくなるぞ？風評被害は怖いぞあ？」

「ルーク殿が、優しい方だったから良かったものの…腰の物に、もの言わせてたら、お前くらい命がいくつ有っても足りんぞ？解つとんのか？そこん所…」

「さっさと謝れい。土下座だあ！」

…とこんな感じで、束の間の道連れ、イシヤマ・コゲンタが村人達にお説教をしていた。身振り手振りが激しい、かなりの演技派だ。

「ルーク…！大丈夫なの…？酷い事されなかった…？」

突然のお説教場面に、少し呆然としていたティアだったが、ルークを見つけると、すぐに駆け寄り怪我をしていないか心配する。

「あ、ああ…大丈夫だ、ティア。おっさんが、いきなりキレて怒りだしたから…助かったんだけど…」

「そう、良かった…。ごめんなさい…わたしが、もっと…」

「だから、謝んなくて！それよりも、このジョーキョーどうすっかな…？」

ルークは頬を掻きつつ、苦笑しティアを諫める。

「そうね…どうしましょうか…？」

ティアも苦笑して首を傾げる。

そして、コゲンタのお説教は佳境に差し掛かっていた。

「こうなりやお前らに代わって、わしがお二人に土下座するしか無いかあ?!」

コゲンタの毛細血管が、村人達の羞恥心と両足の痺れもまた、限界が近づいていた。しかし、それらの危機を救ったのは村人達にとって予想外の人物だった。

「おっさん！もういいって！やめてくれよドゲザなんて！さすがにウゼエって！」

それは、村人達にとっては憎むべき敵(?)ルークだった。

「ほら、オレってさ外…とうか、こういう町に来るコト自体ほとん

ど初めてでさ…買いもののしかたイマイチ理解してなかったんだよ。ドロボー扱いはムカついたけどよ、リンゴ食い逃げみたいな感じになっちまったのはジジツだし…。ああもう、なんつうのかなあ…？
」

ルークは苛立たしげに髪をかく。ルークは怒られる事も、怒られている者を見るのにも嫌いで、屋敷でも『メイド達の失敗を自分がやった事』にして執事ラムダスから『厳重注意』を受けたり（勿論、右から左へ聞き流した）『それ以上の事』を故意にしでかしうやむやにしたりした。他人の言い訳も、何故か頻繁にしてしまっていた。

そして、ルークの言い訳は続く。

「えーと…よーするに！今までで一番ウマイ、リンゴだったぜ！…何かちがうな？ともかく…ゼーイン悪かったたつてコトで！あ、いや！ゼーイン悪くないってコトで！」

実に良い奴だった。自然に自分も『悪くない』としているあたり、そこはかとなくスケールが小さく、実に良い奴だった。

「どうやら、ルークさんは許してくれた様だね？すまないねえ、ルークさん。この所立で続けだったものだから、皆カリカリしていたんだよ。村長として、もっと早く対応するべきだった…。本当に申し訳ない…」

今まで、コゲンタの後ろで事態を静観していた壮年の女性、エングーブの村長ローズが何の躊躇いも無く深々と、ルークに頭を下げた。

「もういいっての…！アタマなんか下げんなよ。キリねえって、お

ばさん」

バツが悪そうに、そつぱを向き言うルーク。今、知り合ったばかりの大人に頭を下げられるのは初めてで「どうして良いのか解らない…」の一言であつた。

「ありがとう、ルークさん」

ローズはそんなルークを見て、苦笑いを本物の笑顔に変え感謝を口にする。

「待ってくれ！俺はまだ納得して無いぞ！コイツが泥棒じゃないって証拠も無いじゃないか！？」

宿屋の主人ケリーが、痺れた足でふらつきながらも立ち上がり叫ぶ。

「お前なあ…それを言っちゃあ、おしまいだぞ？」

自分の宿屋の食料庫を荒らされたのだから「納まりが着かない…」のは無理もないが、その理屈が通れば法治国家は成り立たない。コゲンタが、ケリーに再び言つて聞かせようと口を開きかけるが…

「はい 先生、此処は第三者の私が、理論的に説明した方が納得してもらい易いと愚考しますが どうでしょう？」

青い特徴的なマルクト軍の軍服に着た、長身長髪のマルクト軍将校が陰悪な雰囲気をもせず朗らかな笑顔で手を上げた。

将校は柔らかな微笑みを浮かべ、眼鏡の位置を人差し指で直し

つつ、前に出る。

「大佐：そんな事解るのかい？」

「はい、解ってしまいました。こちらのルークさん？が食料泥棒じゃない可能性あれこれ思い付きました。」

ローズの疑問に快活に頷く。

しかし『大佐』とは驚きだ。「見た目ほど若くないのかも……」と、そんな事を考えティアは彼に注目する。

「不謹慎ですけど、こういうシチュエーションって懂れていたんですよ。では：様式美に則って、まずは一言。」

「やれやれ。」と苦笑しつつ、咳払いをすると大佐は人差し指を立て高々と右腕をかがげ……

「犯人は、この中にいない！この謎は私が必ず説き明かします！！ジェイド・カーティスの名に懸けて！！」

びしりと何を指すでも無く、右手人差し指を虚空へ叩きつけ、マルクト帝国軍第三師団 師団長ジェイド・カーティス大佐が高らかに名乗り上げた。

「うふ これクセになりそうですね。」

ジェイド・カーティスは、夢見る様に朗らかに微笑んだ。

第十六話 犯人は、この中にはいない（後書き）

大人気の鬼畜さんの登場ですが…この物語の彼はかなり性格が違います。

不真面目な感じになっています。

原作ゲームの性格の彼が好きな方は注意が必要です。

原作ゲームでは、ティアは泥棒と勘違いされたルークを見て『捕まった方が彼の為かもしれない…』と考え、半ば放置します。

しかし、この行為はルークにとってもティア自身にとっても、命の危険が有る『暴挙』と言っても過言は無い行為です。

『群集心理、集団心理』という言葉が有ります。

群集の中で生じる、個々人の特殊な心理的特徴を指す言葉です。

1、匿名性

自己の言動に対する責任感、個性が無くなり、無責任、無反省な行動になりがち。赤信号みんなで渡ればなんとやらです。

2、被暗示性

暗示にかかり易くなる。その場の雰囲気に従って行動し、目立つ人、声の大きい人、の過激な号令に盲目的に従ってしまう事も。興味も関心も無い、何らかの集会で何時の間にか声援を送っていた…とかですね。

3、感情性

感情的になり、論理的に考えられなくなってしまう。欲しくも無い怪しげな壺が何時の間にか物凄く良いモノに見えきて…

4、衝動性

理性のブレーキが聞かなくなる。大金をはたいてヘンテコな壺をセツトで買ってしまった…という感じですネ。

これらの心理は、良い方向に働けば、一致団結した試合や応援をして、大勝利を掴み取るという事に繋がりますが…悪い方向に働けば、集団リンチ事件、暴動など、に発展してしまいます。

買い物の仕組みや一般常識は命懸けで知る様な物ではありません。普通に暮らしてきた一般人なら『一人に大勢で乱暴なんて…』と多少、樂觀的な考えをしても仕方が無い所もありますが、原作のティアは優秀な軍人です。『1割でも危険の可能性が有るなら、その1割を0にする為に行動する』のが危機管理の基本です。自身にも『とばっちり』が降り掛かる可能性も有り、自分自身に対する、危機回避能力も疑問符を付けざるおえません。

例え、ルークがあの場合で無事に誤解が解けたとしても、マルクトの人々に反感や偏見を持ってしまい。将来、王位継承をしたルークが無用な闘争を起こしてしまう可能性が有ります。

平和を象徴である導師イオンを守り、国際紛争の解決に尽力する神託の騎士団であり『本来は優しい少女』であるティアが絶対にとつてはいけない行動なのです。

第十七話 導師と大佐と名探偵

「では、こちらのルークさんが泥棒さんでは無いかもしれない可能性を、一つ一つ上げて行きましょう」

ぴつと、人差し指を立てながら種明かしをする手品師の様にジエイドは語り出した。実に楽しそうな顔をしている。

「そのイチ ルークさんのお召しになっている服！多少デザインは奇抜ですが、材質、装飾、製法、どれもこれも一級品です 見た目が良いだけの乱造品ではありません 果たして、泥棒さんが着る事が出来るでしょうか？」

「ね、素敵でしょう？」と、まるで服屋の店員の様な自然な語り口で、緊張感が全く無い。

「そのニイ ズバリ、ルークさんの喋り方ですね。言葉使いその物は、お世辞にも良いとは言えませんが 発音自体は上流階級特有の『ソレ』です。微妙な息の吐き方も完璧で、やろうと思って出来る事ではありません」

その場の全員の視線が、ルークの口に思わず集まる。居心地が悪くなったルークは、ジロリとジエイドを睨むが柔らかな微笑みが返ってきただけだった。

「そして、そのサアン ルークさんの、お知り合いらしいき、お嬢さん え〜と、失礼 お名前をお尋ねしてもよろしいですか？私はジエイド・カーティスです。よろしく願います」

ジェイドは爽やかに微笑み、軽く頭を下げる。
学生同士の様な、気安い挨拶にティアは困惑するが…

「ティア、と申します…」

表情には出さず、名前だけを告げる。

「ティアさん 綺麗な響きの可愛い素敵な名前ですねえ おつと失礼、話が逸れました こちらのティアさんの、お召しの法衣。これは神託の盾の譜術士が着る儀礼用の法衣なんです。ねえ？ティアさん」

ジェイドは可愛らしく首を傾げ、ティアに質問をする。

「はい、その通りです…」

ティアは、ジェイドの独特のペースに、困惑するがやはり表情には出さず、簡潔に答える。

「ふうむ 上流階級らしき少年と、儀礼服の神託の盾の騎士の二人連れ。なんだか冒険小説の始まりのようで、興味津々のシンですねえそれに、ティアさんは譜術士として、かなりの『力』をお持ちの様です…。見かけ倒しの詐欺師という事は、あり得ません」

ジェイドの紅い瞳が、眼鏡の奥で怪しく光るが、すぐに柔らかな微笑みで覆い隠され消える。

「……！」

「ティア？どした？」

「うつん、なんでもない…」

ジェイドの瞳に、一瞬怯んでしまうティア。

そんな彼女を、訳も解らず氣遣うルークに、ティア自身は苦笑して誤魔化する。

「さあ、つづきまして、そのヨオン　漆黒の翼らしき一団を我が軍の哨戒艦が、ローテルロー橋の向こうに追い出したという情報が入っています。まあ、正確には取り逃がしたんですけどね　つまり、ルークさんが漆黒の翼だったとしても見捨てられる程度の存在：キタない！さすが盗賊、キタないですねえ！ドンマイ！ルークさん」

ジェイドは、胡散臭いくらい屈託の無い笑顔でルークにエールを送る。

「いや、だから…オレ漆黒の翼じゃねえし…」

「ほんのジョークです」

ルークのやや、冷ややかな返答。しかしジェイドは、それを物ともせずに朗らかに微笑む。

「皆さんお待ちかねの、そのゴオ　…」

「その五は、今来ましたよ？ジェイド」

ルーク達の後方、入り口の方から、良く通る耳心地良い少年の声がした。

「これはイオン様　そのご様子ですと、何かを発見してしまった様ですねえ？いよっ！名探偵」

自然と皆、ジェイドの視線を追って声の主に注目する。

そこには、美しい翠色の髪の若草色のゆつたりとした法衣を着た、中性的で優しげな少年と、焦げ茶色の髪をリボンで二つに結い桃色の服の上に白い法衣を着た、小柄な澁刺とした印象の少女が揃って笑顔で立っていた。

もつとも少女の笑顔は苦笑い、浮かない顔だ。

「ええ、見つけましたよ。大発見ですよ、ジェイド」

イオンと呼ばれた少年は、屈託の無い笑顔を浮かべる。

「もう！イオンさま。大発見じゃありませんよお…！ヘタしたら教団の信用問題な大問題ですよ！」

少女は頭を抱える様にして、肩を落としイオンの発言を諫める。

「大丈夫ですよアニス。そうならない為に、ぼくは此処に来たのです。それに、ジェイドもいてくれます」

「うふ 煽ててもアメちゃん位しか有りませんよ？」

アニスというらしい少女は、緊張感の無い二人のやり取りを見て、さらに困った顔になる。

一方、ルークは「また新しいヤツが出てきた…」と思考が達観的に成り始めていた。

が、ある事に気が着き隣にいるティアに小声で話しかける。

「なあ、ティア。あのイオンってヤツ、ユクエフメーのイオンじゃないか？アイツを探さなきゃイケナイから、師匠がオレン家、来れないコトになって代わりにティアが…って感じだったよな？」

ルークは、ティアと出会った時の事を思い出しながら疑問を口にする。

「ええ…間違い無く、その導師イオン様よ…。でも、どうしてマルクト軍の人とこんな所に…？」

ティアはルークの質問に答えながら、首を傾げる。

「もしや、マルクトのヤツらにユーカイされて?!…って感じじゃねえなあ…」

「そうね…。イオン様と一緒に入って来た女の子、導師守護役…導師様専属の護衛騎士の事なんだけど…。導師守護役と一緒にいう事は少なくとも無理矢理、連れてこられたんじゃないと思うけど…。何処かで伝達に行き違いが有ったのかも…」

「ふーん…」とルークは何となく女の子、アニスに視線を移す。とても、そんな大役が勤まる程強くはルークには見えない。もしかしたら、ティアの様に譜術が上手いのかもれないが…。

それよりも、自分達は何をすれば良いのだろうか？ルークには思いつかない。

「で、どうすんだ？ティアもオラクルだし、ムシなんてデキねえよな？」

「そうなんだけど…、今此処で騒いだら、余計に話がややこしくなってしまうそうだし…。しばらく様子見るしかないかな…？」

ルークの問いに、ティアは何とも言えない複雑な表情で答える。

「ハハ、なんか…めんどくせえなあ？」

犯罪者扱いされて、大勢に取り囲まれているより、ずっと気は楽ではあるが、もはや苦笑するしかないといった感じでルークは肩

を竦める。

「ごめんなさいルーク…」

ルークの軽口を軽口と受け取らなかつたらしく、ティアは沈痛な面持ちで俯いてしまう。

「べつに責めてるワケじゃねえよ！勘違いすんなよ！…それより、さ…」

多少無理矢理にでも話題を変えようと、ルークはジェイドとイオンに視線を向ける。

「メータンテーのスイリ？を聞こうぜ…？オレに罪をかぶせた真犯人にフクシユーしてやろうぜ…！ヘッヘッヘッ…」

「ルーク…復讐なんて何も、生み出さないわ…こんな感じかな？ふふ…」

やっと、ティアから苦笑いでも愛想笑いでも無い、本当の笑顔が零れる。

そして、ルークとティアは改めてイオン、ジェイドに注目する。すると、イオンはアニスから、二つ折りにした懐紙を受け取る。

「これを、被害にあつた食料庫を一つ一つ、回って見つけました…」

皆に見える様、気を配りながら、イオンは懐紙を開く。懐紙に包まれていた物は…

「何か…動物の毛…？みたいだけど」

ティアは呟き、さらに良く観察する。

猫の毛よりも長く、犬の毛よりも柔らかそうだ。色は淡い赤、青、緑、黄、実に彩りが良く虹を連想させる。

「これは…恐らく聖獣チーグルの抜け毛ですねえ　しかも、数匹分…ふうむ」

新しいおもちゃを、見つけた子供の様に目を輝かすジエイド。
イオンは、やや表情を曇らせ、ジエイドの言葉に頷き続ける。

「それらしい足跡も、あちこちで見つけました…。壁を潜り抜ける為に、穴を掘って埋め戻した跡もありました…」

「ほほう…　と、いう事はあ。状況証拠的に、新たな容疑者、聖獣チーグルが捜査線上に現れた訳ですねえ　謎が謎を呼んでしまう訳ですねえ」

ジエイドは「うんうん」と楽しそうに、しきりに頷いている。

「まだチーグルが犯人だと決まって訳では…」

「勿論です、あくまで『容疑』…疑わしいというだけです。証拠の裏付け…『立証』出来なければ『罪』も『罪』には成りません。法治国家の大前提ですねえ　ルールは大切！ですよ」

眼鏡の位置を直しつつ、やや低い声で諭す様にジエイドは語り掛ける。…が、すぐに柔らかな口調と表情に戻り、中腰になりイオンと目線を合わせ微笑み掛ける。

「『罪』と言えば　相手が本当に泥棒だとしても、捕まえるまでは良いですけど…。そのノリで『百叩きの刑』なんて流れはペケですよ？官憲のお仕事を勝手にとってしまうのも、十分な『罪』ですか

ら。私は書類を書くの嫌いなので大目に見ますけどねえ 気を付けてください？本当に捕まった人いますから」

ジェイドはびつと、親指のみ立て「軍人さんと約束だ」と顔面蒼白に成った（ジェイドがした）村人達に、胡散臭い頼もしい笑顔を送った。

「大佐：うちの連中を脅かさないで下さいな。デカイのは図体だけなんもんでねえ」

「申し訳ありません しかし、脅しだけで済みそうでしたです」

ローズが苦笑して村人達を庇う。ジェイドもまた、苦笑し頭を軽く下げつつも最後の駄目押しを忘れない。

「ルークさんも嫌な事が有っても、すぐに怒ったり憎まれ口もペケですよ 男の子たる者『なんだこのくらい！』と笑って済ます位で無くては 売り言葉に買い言葉とは言いますが、売って良いのは親仲間が『馬鹿にされた時の喧嘩』買って良いのは『恩』だけです？男の子として」

人差し指をチツチツチツと気障に左右に振り、ジェイドはルークに笑い掛ける。

「うふ な～んちゃってえ いやぁ良い事言いますねえ」
「けっ…！うっせえっつの…」

ルークは、一瞬でも「ちょっとかけえ…」と思ってしまった事が照れくさく、口調がいつもよりキツくなる。一方、全くジェイドは気にした様子も無く続ける。

「まあそんなこんなで、ルークさん ケリーさんその他の皆さん
仲直りと行きませんか？アクシユアクシユ」

にぎにぎと、両手を可愛らしく結んで開いて微笑む、ジェイド・
カーティス三十五歳。

「う…ん、その、騒ぎを大きくした事は謝るよ、すまん…」

「すまねえ、ボウズ。俺があんな軽口叩いちまったから…」

「別に、もうイイつつの…！おっさんにサンザン怒られて、おばさん
もアタマ下げてくれたんだし、これ以上はナンカちがうだろが…
？終わり終わり！」

バツが悪そうに、頭を下げるケリー達村人に、いかにも「うつ
とうしい…」という口調と態度で返すルーク。しかし、そっぽを向
いても赤くなつた耳までは隠せない。

「ようし めでたし、めでたし ですよねえ？」

ジェイドは親指だけをびつと立てて「どーよ、どーよ？」とい
う笑顔で、イオン、アニス、ローズ、コゲンタ、ティアの顔を見回
す。

「ええ、流石はジェイドです」

「大佐、カッコ良かったです…？」

「助かったよ…？大佐」

「ええと、ありがとうございます…？」

「御見逸れいたした…？」

イオン以外は何故か疑問系なのはご愛嬌である。

「まっねっ」

微妙な言い回しを無視し素直に皆の賛辞を、自然とイラッとくる爽やかな笑顔で、ジェイドは受けとった。

第十七話 導師と大佐と名探偵（後書き）

ジェイド・カーティス、オンステージいかがでしたか？

原作のジェイドは不真面目そうで根は生真面目で少し融通が利かないタイプに感じましたが、この物語のジェイドは『ラクする為、楽しむ為ならどんな努力も惜しまない』真面目に不真面目なタイプです。頭良さそうな事を言わせた為、やたらと長セリフが多くなっています。本当に申し訳ありません。

『恩は売る物では無く、買う物』

私の好きな小説シリーズに一度だけ言われただけでしたが、印象に残っているセリフです。感謝されようと考えるより、感謝しようとする事の方が大切、と言う意味です。確かに、自分は誰にも感謝しないで、感謝だけされたいというのはムシの良い話ですね？

人は『やってあげた事』や『やってくれなかった事』ばかり良く憶えていてしまう物です。原作のパーティーメンバーはルークがお礼を言っただけで物凄く驚きますが、メンバー達自身はルークにお礼を言ったのでしょうか？

「詠唱中は守って」もらったり、色々と助けられたはずですが「戦いの厳しさを教えてた」とか「世間を教えた」と言う事の方が目立った気がします。

『やってもらった事』にちゃんと感謝して『やってあげた事』を自然に感謝してもらえる、というのが理想的な形のもしれませんがね？

第十八話 真犯人！？ちーぐる？チーグル？

「しかし、食料庫荒らしはチーグルかもしれない…？しかし、そいつは何やら妙だの…」

コゲンタは腕組みつつ、ぼつりと呟いき首を傾げる。

「ほほう 妙と言いますと？」

自身の意見を、否定する様な意見であるにも関わらず、全く気にする素振りも見せず、ジエイドは、コゲンタと同じ様に腕を組み首を傾げ、嬉々として話題に食い付いた。

「チーグルは基本的に草食、まあ…人の食べ物も食えん事もないだろうがの…。木の実やら果物、キノコなんかも食うかな？肉食するにしても、小さい虫くらいははずって話でしてな…？」

「なるほどお」

「荒らされたのは、野菜や果物だけじゃないだろ？たしか…」

コゲンタは、自身の抱いた「ひっかかり」をジエイドに話つつ、ローズやケリー達に視線を送る。

「そうだね。肉も魚も持って行かれたはずだよ」

「あ、ああ…。ウチの倉庫も生肉、燻製どっちも盗られたよ」

コゲンタの質問に、頷き合うローズとケリー。

他の者達も口々に「俺のトコも…」やら「ウチもそんな感じ…」と頷く。

「ううむ…」

「ふうむ」

コゲンタは腕を組み、ジェイドはズレてもいない眼鏡を直し、思案する。

そんな二人を、眺めながらもルークは別の事が気になっていた。

「なあ、ティア。さつきからちーぐる、ちーぐるって…ちーぐるってナンなんだ？魔物かなんかか？」

ルークは根本的な所から解っていないかった。聞き慣れない単語に戸惑いつつ、ティアに質問する。

「『聖獣チーグル』ローレイ教団の象徴とされている小型草食動物で、とても可愛い。魔物…と言えば確かに魔物、なんだけど…」

ルークの質問に答えるティアだが、何やら歯切れが悪い。

「やつぱ『ズルガシコイ系』の魔物か？ほら、グレムリンとかみてえな？」

「ううん…全く逆さまね。図鑑でしか知らないんだけど、気性も穏やかで、身体も小さいから臆病だし。滅多に人里には近寄らないらしいし…」

ルークは、自身が良く読む物語にも登場する『悪戯好きな子鬼』を思い浮べるが、ティアは横に首を振る。どうやらルークが持つ『魔物』のイメージとは全く別物のようだ。

「だけど、人の言葉や文字も理解出来る位知能が高いらしいから、

やろつと思えば泥棒ぐらいやれてしまつかも…」

悲しそうに目を伏せるティア。

ルークは、ティアをフォローしようと言葉を探すが、此処まで状況証拠を並べられたらチーグルが真犯人であると、素直に思えてしまう。

「そう…ティア殿の言う通り、チーグルは頭が良い。だからこそ『人の恐ろしさ』を良く知っているはず…ならば何故『人を敵に回す様な事をしたのか？』って事になるかの…」

コゲンタが、ティアの言葉を肯定する形で、ルークとティアの会話に加わる。

「ん？オイおっさん、それって、やっぱチーグルがハンニンじゃおかしいってコトか？」

「『そうかもしれん』って話だの。まあ、まだ別の可能性も考えられますがの…」

勿体ぶった言い回しをして難しい表情のコゲンタ。

ティアは、コゲンタのその言葉で何かを掴む。

「それはつまり…『人を敵に回す』方が、リスクが少ないと思えてしまう事、あるいは…そうしなければ成らない事が、チーグル達に起こっている…という事ですか？」

ティアの考えに、無言で頷くコゲンタ。

「こりゃあ、一度チーグルの森を調べてみなけりゃイカンかなあ…？」

腕を組み、コゲンタは首を捻る。

と、その時「はいはい！」と三十五歳が元気良く手を再び上げた。

「ならば ソレは私達、マルクト軍が請け負いましょう。チーグルの森は魔物も生息していますから 普通の人では危機一髪ですよ」

頼もしく胸を叩き、優しく微笑むジェイド。

「親書が届くまで、こちらの村にはお邪魔させて頂くんですから、任せて下さい タルタロスのお皆さんは、とっても頼りになるタフガイばかりですから 早速、明日朝一番で『カーティス秘境探検隊』を組織しますよ！」

ジェイドは、胸を張り何の屈託無く部下自慢をし、冒険の空へと夢の翼を広げた。

「…なのでえ イオン様はお留守番ですよ？」

ジェイドはイオンと視線を合わせ、優しくはあるがキツパリと言った。

「……もちろんですよ。ジェイド」

「うふ 『間』が有りましたよ？イオン様」

イオンは、しばしの沈黙の後、輝く様な笑顔でジェイドの言葉に答える。

それに苦笑しつつ、ジェイドはアニスに顔を向ける。

「アニス イオン様を一人ぼっちにしてはペケですよ？お友達として」

「はあい、解ってます大佐。ワタシも導師守護役のハシクレなんですから！」

ジェイドと同じように頼もしく胸を叩くアニス。もつとも、性別、年齢、容姿、様々な要因から『頼もしい』と言うより『微笑ましい』と言う方が正確だ。

「と、言うワケで 皆さん。今晚は絶対に『こんな奴等といられるかよ！』って一人ぼっちで行動しないでください！それは『死ぬ力ンジ』ですからねえ！！」

「大佐あゝ…殺人事件じゃないんですからあゝ」

ジェイドの、真摯な訴えと表情に、「ガクリ…」と肩を落としてアニスは苦笑する。

「ほんのジョークです この感じの台詞にも憧れていたので、ノリで言ってしまったのです 夢が叶いました エンゲープの皆さん、ルークさんにティアさん、ありがとうございまあす！不謹慎で恐縮です！」

白々しい位に、爽やかな声と共に深々と頭を下げ柔らかな微笑みを、その場の全員に向けた。

「じゃあ行きましょうか？忙しく成りますよ？イオン様」

「はい、では皆さんご機嫌よう」

「失礼しまゝす」

「ローズさん また明日お邪魔させて頂きます」

「どうも どうも」と朗らかに愛想を振り撒きながらジェイドは出口へ、それに続くイオンとアニス。

台風の様な男だった。見ているだけ、なら面白いが「積極的には絡みたくはない…」が、その場にいる者の正直な感想だった。

「ジェイド・カーティス大佐……楽しい人……」

「あん？ナンか言ったか？ティア」

「うっん…なんでないわ」

どうやら、一人だけ少し違う印象を抱いたようだった。

「ふう、何かと騒がしい日だよ今日は。ルークさん、本当に…」

「シッコイっての！…おばさん？へへ…」

またしても謝ろうとするローズを、ルークはキツイ口調で遮りそっぽを向くが、すぐにその、しかめっ面は苦笑いに変わる。

「そうだったねえ？そうだった。ははは」

つられてローズも笑顔になる。

「さあ今日は、もうじき日が暮れる。今夜は村に泊まっていきな？もちろん、宿賃はこっち持ちだよ？」

屈託の無い笑顔をルークとティアに向けつつ、宿屋のケリーに目配せするローズ。ケリーは苦笑いするしかない様子だった。

「…そんな、いけません。これ以上ご迷惑かけられません…！」

ティアは慌てて辞退するが…

「なんだよイイじゃん、ティア？泊めてくれるってんなら、泊めてもらおうぜ？」

ルークは、邪気の無い顔で言う。

「もう、ルーク…！教会に泊めて貰う事だって出来ますし…」

「言っちゃ悪いが、あそこの寝台カタイぞ？その点、宿屋の女将は働き者で布団もしっかり干してあつて柔らかい。出される飯も美味い！まあ…オヤジの早合点癖は玉に傷だがの。あははは」

気安くケリーと肩を組みコゲンタは少し意地の悪い笑顔で言う。

「うるさいよ！まあ、なんだ…？正直、このボウズに『わだかまり』がもう無いわけじゃないけど、もう疑うのも面倒だしなあ。遠慮はいらないよ預言士さん？迷惑料、なんなら預言士さんへの『お布施』だって、考えてくれりゃあ良いさ」

コゲンタの嫌味にどくづくが、すぐにティアの方を見てケリーは、やや照れくさそうに、鼻の頭を掻きながら言う。

「……解りました。お世話に成ります、宿屋さん。わたしは、ああいう村や街の宿泊施設は利用した事が無いので…。色々教えて頂けますか？」

しばしの黙考の後、ティアは困った様に微笑み、ケリーに折り目正しく頭を下げる。

「はは、俺の所みたい田舎の宿屋なんか特別な事なんて必要無

いさ。あえて言うならベットから落ちない様、気を付けなきゃならない事くらいかな？ははは」

小粋なジョークを飛ばす、妻子持ち宿屋のケリー、鼻の下が微妙に伸びているのはご愛嬌。

「貴族様や騎士様の使う寝台と比べたら、そりゃ切ない事だのう…。気をしっかり持てよケリー？」

「どういう意味だよ！？」

ぱしぱし、と気安くケリーの肩を叩き、悪戯っぽい笑顔でコゲンタは言う。

「まつ、なんにしても馬車んナカよりマシだぜ。野宿なんて…ワルくはなかった…かな？」

ルークは草原の心地よい感触と柔らかな風、そして何よりも『膝枕』を思い出す。ルーク自身、何故かは解らないが、顔が熱くなる。

「ルーク…？」

「な、なんでもねえ！アハハハ！」

様子のおかしいルークに気遣わしげに問いかけるティア。何だか解らないが、ルークは笑って誤魔化する。

「じゃあ、行こうぜ！おっさん！たのしみだなあ！小さいベット！アハハハ！！」

ルークは多少、裏返った笑い声を上げ足早に館から飛び出した。ティアは、首を捻りながらもルークに続き館の玄関を潜る。

「そんじゃあ、ローズ殿。わしはルーク殿を宿屋まで送ってくる。後程、今後の事を話し合おう?」

「ああ、そうしよう」

茶飲み話の約束をするかのように、気安く頷き合うコゲンタとローズ。

「おいおい、先生…。もしかして一人で森に行くつもりかよ!? 眼鏡の軍人さん、魔物がいるって言ってたぞ!」

ケリーが驚き思わず、大声で尋ねてしまう。

「でつかい声出すんじゃないの。別に魔物とやり合いに行くんじゃないだ。ただ『どんな感じかな?』って見て帰ってくるだけの話だの。エンゲーブの民として何が出来るか? 何をすれば良いか? 見極めなきゃなあ、村の雑用係として。あははは」

にやり、と不敵な笑みを浮かべ、コゲンタは事も無げに言っただけのけた。

第十八話 真犯人！？ちーぐる？チーグル？（後書き）

『聖獣チーグル』についての説明的な話と、次なる目的地を示唆する回でした。

ルークがいてくると、比較的 naturally、キーワードや固有名詞の説明する文章を入れられるので、実に頼もしい奴ですね。

知らない事、教える事、教えて貰おうとする事、これは、人にとって大切な事柄です。

しかし、アビスのシナリオはそれらを半ば否定している雰囲気を感じます。

原作パーティーメンバーの年齢（ジェイドの35才）を越えてから、知ったり教えられたりする事の方が、世の中多いと個人的には思います。我が子の誕生に立ち合う事、我が子を抱き上げる事、その子と手をつなぐ事、涙を拭く事、慰める事、孫を抱き上げる事……挙げればキリがないでしょう。

皆さんはどう感じますか？

第十九話 チーグルの森へ

明くる朝、コゲンタは日が登り切らない内に、起き出した。朝食を噛みしめる様にゆつくりと胃に納めていく。

身支度を整え必要最低限の道具を、風呂敷や小さな行李を肩に掛け村を出た。

一定のゆつくりとした歩幅で、エンゲーブの村の真北に有るチーグルの森へ、コゲンタは歩を進める。

時折、魔物が姿を見せるが、コゲンタはその度に無視して突っ切り、身を隠し、魔物が嫌う物質を詰めた匂袋をぶつけて追い払い、のらりくらりと確実に森へと近付いていく。

太陽が登り切り、辺りが明るくなる頃には、チーグルの森はもう目の前だった。

「さあて、ぼつぼつヤルかあ？」

身体をほぐす様に、コゲンタは伸びたを一回すると、何の気負いもなく森へと分け入った。

「え……？チーグルの森へ？どうして……？」

エンゲーブの唯一の宿屋『ケリーズイン』（村人曰く気取り過ぎ……）の寢室……といっても一人用のベットを、いくつも並べただけの大きな部屋で、ルークは起きだすなりティアに

『ティア！チーグルの森に行くぞ！』

と、唐突に言い出し、ティアは困惑するしかない。

「そりゃチーグル、ツカまえんだよ！決まってるだろ？」

ルークは邪気の無い「変なコト聞くなあ？」という顔で苦笑する。

「ええと、そうじゃ無くてね…。どうして、ルークはチーグルを捕まえようと思うの？とりあえず疑いは晴れたんだし…。貴方がしなければ成らない事じゃないと思うけど？」

ティアは、一つ一つ言葉を選びルークに質問する。

「え…？んん？そりゃあ…ム力つくから…？いや、なんかチガうなあ？でも、ム力ついたのは確かだな。ヤツらのセイで、ヒドイめに合うトコだった！謝らせるしかねえよな！？それに…」

ルークは、力強く「うんうん！」と頷く。が、不意に歳相応の少し大人びた表情になる。

「ローズ…あの、おばさん。こまってた…しさ…」
「ルーク…」

ルークは言いづらそうに、ティアから目を反らしながら呟く。

「あ、いや！その…！オレをドロボーあつかいしたヤツらを見返してやんだ！チーグルも見てみてえし…。ついでに、チーグルどもに『ギャフン！』と言わせてやるんだ！」

照れ隠しなのだろう…まくし立てる様に、吠えるルーク。

「ルーク…でも、やっぱり危険よ…。他の魔物もいるし、触れるだけで害になる生物や植物だっているだろうし…」

「デキるだけ闘わずに逃げる！…なさけねえけど…。そうゆーヘン

なモンにはさわんねえ！だから教えてくれよ？ティア詳しいんだろ！？」

ティアの忠告を何となく理解しつつも、首を横に振り食い下がる。

ルークは、何の迷いもなく『全幅の信頼を寄せる瞳』をティアに向ける。

何となく、ティアは居心地が悪い。どうすれば、ルークは森へ行くのを考え直してくれるのだろうか？

「頼りにしてくれるのは嬉しいけれど…。知っているとんでも、図鑑の知識を覚えているだけで実際に見たり体験した訳じゃないから…」

「大丈夫だつて！心配シヨウだなティアは？とにかく行くんだ！決めたんだ」

笑いながら、荷物と剣を手に、部屋を出て行くルーク。が、すぐに何か言いにくそうな顔で舞い戻る。

「なあ…ティア、森…。チーグルの森って、どう行けばいいんだ…？」

「もう…ルーク」

ティアは思わず苦笑するしかなかった。

ルークが、チーグルの森に行く事を決っていたティアだったが、『屋敷に帰るまでいろんなモンが見たかったのに…』などと、不貞腐れた顔で言われてしまったら、彼女には頷く事しか出来なかった。

ティアは自分が、流され安い人間だと、改めて認識した。

「チーグルの森は此処、東ルグニカ平野の北端…それから先にも大陸は有るんだけど、凄い山脈が有って、人の足で越えられる様な物じゃないから…北端ね。エンゲーブからも、ずっと北…あっちへ、まっすぐ行けば着くはずなんだけど…」

村の北口にやって来たルークとティア。ティアは、ルークに説明しながら、真北を指差す。

へえ…と呟き、ティアの指差した先を眺めるが当然、森は見えない。田園風景が広がっているだけだ。

「しかし、ティアって何でも知ってたなあ？」

チーグルの森へと、歩き出した二人。頭の後ろで手を組み農道を、ゆつくりと歩いていたルークは不意に、自身の数歩後ろを歩くティアに感心した口調で、話しかけた。

「書物や人づての話を、聞きかじっただけ…感心して貰える程の事じゃないわ…。わたしの場合、本当に『知っているだけ』で実際に自分で『見たり』『試したり』した事なんて数える位しかないわ」

本気でティアに感心するルークに苦笑するティア。

「それに…わたしは騎士団にいる分、世の中の事とかの認識はルークと対して変わらないと思うわ。訓練、訓練で気が付いたら、一月近く部屋に戻って無い…なんて事も珍しくないし。ダートの街の事も、考えたら何も知らないかも…何年も住んでいるのに…」

「ふーん…って！？一ツキも何やんだよ?!」

自嘲気味に苦笑しているが、「特になんでもない…」という口調のティアのセリフを、思わず聞き流してしまいそうになるが、ル

ークは咄嗟に聞き返す。

「ふふ、まあいろいろ…かな？」

柔らかに微笑み、少しおどけた様にはぐらかすティア。楽しく話せる話題ばかりでも無いからだ。

「ともかく、世の中はわたしみたいに『知ってる』だけで満足して『深く考える事』を、しない人も多いの…。言い訳みたいになっちゃうけど、『考えたくても考える暇が無い』というのが正確だけど…」

ティアは、「そんなんじゃないいけないんだけどね…」と苦笑する。そして、ルークは不貞腐れた様な顔をしてティアを見る。

「ふーん。ヒマねえ…それオレがヒマジンってコトかよ？」

「え…！ちがうの…！そうじゃなくて…」

言い回しが、ルークにとって無神経だったと思ったティアは、あわててフォローしようとするが…

「ハハ、わかってるって。まあ、ヒマジンだったのはジジツだけだな！ねてるか、剣ふってるか、本をテキストに眺めてるか、だしなあ…」

突然、屈託無く笑いルークは頷く。

「ルーク、でもね…。わたしは知らない事は、それほど悪い事じゃない。知る事が必ずしも良い事じゃないって思うの…」

首を横に振りティアは優しく微笑む。

「は？なんで？知ってた方がトクだろ？ふつう」

ティアの言葉に驚くルーク。知らない事はつまらない事、駄目な事、叱られる事、という認識がこの七年で身についたルークには少し「寝耳に水」であった。

「知っているから解らない事…知らないから解る事だ…て有るの。例えば…そう、ダアトの美術館に『名画』…て有名な風景画が有って…。その画、実は水面に写った景色だけを描いた物だったの、だから誰もソレと気付かないまま長い間上下逆さま…、つまり普通の風景画として飾っていたの…」

「水に写って…？あ！そうか。たしかに、水に写った方だけ…てのは解りツライかもなあ」

ルークは「そんな事が有るんだなあ…」と楽しそうに頷く。

「それでね…。ある日、大勢の美術家や愛好家が気付かなかった事を、たまたま美術館を訪れた騎士が『逆さま』である事に気が付いたの。その方は美術の知識は無かったんだけど…」

「ウツ！？ハハハハハ！！」

「カンタビレ様？！此処は美術館ですよ…！！」

「だ、だって！オマ！これ！さか、逆さ！水に写って！こんな気取って飾ってんのに！ウハハハハハハ！！」

「？……あ！！」

「ダサ！ダサア！！ウハハハ…は、腹が…！わ、笑かすんじゃないよお！ウハハハ！！」

という感じで、その後、嚴重注意を受けた事を、苦虫を噛む様な想いで思い出しながら表情には出さずティアは微笑む。

「確かに知識も大切だけど、時には知識に捉われない…つまり無知な視点で物事を見る必要も有るって事かな？」

「なんだかよく解んねえけど…。剣術と同じだよな？型を気にしすぎると、ダメになんだ。師匠が言ってた」

首を傾げるルークに、ティアは優しく微笑み頷く。

「そうね…大切な事は一つだけじゃないのよ、きつと…」

「うーん、そっか…。よく解らねえけど…解ったぜ！」

笑い合う二人、チーグルの森へと歩を進める。

第十九話 チーグルの森へ（後書き）

美術館の件は、パリのマルモッタン美術館所蔵の、クロード・モネ作『睡蓮』が何年も上下逆に展示されていたという話をモデルにしました。

その『睡蓮』は蓮池の水面に鏡写しになった草や雲を描いた作品で、大のモネファンでは有るものの美術とはおよそ方向性の違う、半導体や光通信の権威 西澤潤一氏が『上下逆さま』であると、気が付いたというエピソードです。

多くの企業や研究者が「不可能」とサジを投げた部品や理論を考え出した『最もノーベル賞に近い男』は、やはり何処か違う様ですね？

『無知は罪なり』この言葉は、ルークの境遇や態度を批判する常套句ですが…この言葉には続きがあります。

『無知は罪なり、知は空虚なり、英知持つ者英雄なり』
ソクラテスの言葉です。

要するに、学ぼうとしないのは愚かな事ですが、ただ知っているだけで満足する事もつまらない虚しい事です。

本当に立派な人に成りたいなら、時には物事を初めて見る様に無垢な視点で捉え、知識を生かす事が大切ですよ…という事です。

ルークはワガママで無知だ…という先入観に捉われて、やるべき事（情報の開示、意見交換）をやらない原作パーティメンバーという風にも見る事が出来ます。皆さんは、どう感じましたか？

第二十話 森での再会 ルークとイオン

チーグルの森、鬱蒼とした深い森ではあるが、不思議と日の光が良く差し込む豊かな森であった。

故に、チーグルの森という名に反して多種多様な生物達が棲息している。

当然、魔物と分類される者も棲んでいる為、よほど森に慣れた者でなければ近付かない場所である。

コゲンタもまた、薬草を採りに森に何度が入った事があった。しかし、今回はなにやら様子がちがった。

森の生物達に自身の存在を教える為、等間隔で笛を吹いていたにもかかわらず、コゲンタの前に魔物が立ちはだかった。

それは『ウルフ』だった。狼、山犬とも呼ばれる魔物である。

狼は二頭、背中の中を逆立て唸り声を上げ、身体を低くしコゲンタとの間をにじり寄って詰めてくる。

縄張りに踏み込んだとはいえ、狼の方から人に近付いてくるの「やはり、何かが少しおかしい…」ことであつた。

一般に思われている程、狼は人を襲う事は無い、むしろ徹底して避ける。

人の使う武器が自分達の脅威になるという事を、文字通り「痛いほど…」理解しているはずなのだが…。

コゲンタは油断無く腰を落とす。素早く腰の雑囊から、卵ほどの大きさの袋をふたつ取出し、狼達めがけて投げつけた。

それは、魔物が嫌う匂いを発する物質や刺激物を詰めた物だった。

ひとつは、前にいた一頭の鼻先に直撃して一時的に動きを封じ

る。ふたつ目の袋は狼に当たらず、地面に落ち破れて、刺激臭を発する。

『ギャアン!!』

悲痛な声を上げ、のた打つ狼。

再び雑囊に手を入れ構えるコゲンタ。それを見た、もう一頭狼は後ろに飛びずさり距離を取り、低く唸りコゲンタを睨む。

「ふむ、まあ…そう何度も通じるモンじゃあ無いわなあ?」

苦笑しつつも、そのままの姿勢でコゲンタは、狼を見据える。

コゲンタは再び匂い袋を投げた。先程とは比較にならない鋭さで、風を切り袋が真っ直ぐに狼に迫るが、狼は右に跳ね回避する。

しかし、狼は右前足が鋭い痛みに教われ体勢を崩し転倒する。

狼の右前足に『コヅカコガタナ（カタナの鞘に収納されている付属品）』と呼ばれる、小さな刃物が刺さっていた。まずは、解りやすい位置に物を投げつけ、敵が回避するであろう左右どちらかに、追撃を加える時間差攻撃である。今回は右に『賭けた』コゲンタの勝ちだった。

「左に避けるべきだったの? 御免…!」

一気に狼に詰め寄ったコゲンタは、鞘ごと引き抜いたワキザシで狼の頭を強かに打据えた。

狼は目を回し動かなくなる。

匂い袋の直撃で苦しむもう一頭も同様に鞘で打据え昏倒させる。

「ふうむ…」

打った拍子に、狼の足から抜け落ちたコヅカを拾い、懷紙で拭
いつつ、目を回した二頭の狼をコゲンタは観察する。

まだ若い雄と雌、恐らく『つがい』だろう。この狼達が、若く
未熟な為コゲンタを考え無しに襲った…とも考えられなくもない。

しかし、やはり何かがコゲンタには引掛かる。

「もすこし見てみない事には始まらん…かな？」

コゲンタは呟くと、コヅカを再びワキザシの鞘に戻し、確かめ
る様にワキザシを握り直すと、さらに森の奥へと足を向けた。

何処かから、さらさら、と水の流れる音が聞こえる。近くに沢
が有るのだ。

突然、コゲンタは立ち止まる。

「おいおい、今度はコイツらか…。やっぱ、おかしいぞ？この森は」

四つの苔蒸した小さな岩から、突如タコやイカの様な足が生え、
怪しく蠢いて気味が悪い。

岩が浮かび上がり、赤い目を光らせコゲンタを囲む様に、ふわ
りふわり、と飛ぶ。

それは岩では無かった。人の胴ほどもある巻き貝『ライオネー
ル』だった。池や海ではなく、森の湿気の多い場所などに棲む宙
に浮く奇妙奇天烈な貝だ。単純に『浮き貝』とも呼ばれる事もある。

「お、おいおい、待て待て！わしは、まだ何にもしてないだろが？
！」

こちらからチョッカイを出さなければ襲ってくる事は、まず無
いはずなのだが…。浮き貝達はひとつしか無い目玉をギラリと赤く

光らせコゲンタを取り囲む。

赤い光は警告色、つまり浮き貝達は怒っている。

「八つ当たりかの？もしかして…？」

やや悲壮な苦笑いを、浮かべるしかないコゲンタ。

腰の雑囊から、なにやら手のひら大の玉を取り出すコゲンタ。それを浮き貝に、ではなく自身の足下に叩き着ける。

突如、大量の白い煙が吹き出し、コゲンタもろとも浮き貝達を覆い尽くす。

「ふふん…『三十六計逃げるにしかず』っての。要するに『逃げるが勝ち』って話だ。あははは」

コゲンタは、混乱する浮き貝達を尻目に、煙幕から飛び出し一目散に逃げる。

チーグルの巣が有る、この森の中心の大樹を目指すコゲンタ。

ふと、木々の隙間から見える青空に純白の光が柱の様に立ち上がるのを見た。

「近い…！向こうか…！？」

しかし 轟音も、熱気も、衝撃もこちらに伝わって来ない不可思議な光だった。普通の譜術とは、少し違う様に感じる。

「異変の原因では…」と考え、コゲンタは縦横無尽に生える枝や弦、根を擦り抜ける様に避けて、ほぼ全力疾走で光の発生源へと急ぐ。

茂みの向こうから、獣の蠢く気配がする。数は…多い。気配を殺し、木の陰から慎重にコゲンタは様子を伺う。

狼の群れが子供を取り囲んでいた。

数は八頭と、かなり大所帯だ。

しかし、子供は地に膝を着きながら、果敢にも足下に複雑な譜陣を刻み、譜術を行使しようとしている。

牙を剥き、狼の内の二頭が子供に襲い掛かる。

子供が右手を高く掲げると譜陣がより一層、強く白く輝き子供を中心に狼を巻き込み、光の柱が天を貫く。

二頭の狼は、チリも残す事無く消滅した。やはり、大した音も熱も揺らぎさえ感じ無い、先程の光の柱と同じ物だ。

狼達は唸り声を上げながらも、子供を遠巻きに囲む。

その時、子供は胸を押さえ苦しそうに呻きつづくまる。

譜陣が弱々しく明滅し、消えてしまう。

その、自分達にとっての好機を見逃す狼達では無い。仲間を手に掛けた仇を、喰い干切らんと動き出す。

しかし、狼達の進撃は仲間の悲痛な悲鳴で遮られた。一頭の狼が血を撒き散らし倒れ伏す。

「待った、待った！しばらく、しばらくう！！」

包囲の一角を切り崩し、うずくまる子供を庇う様に、ワキザシを抜き放ったコゲンタが、狼達の前に立ちはだかった。

「あなたは、エンゲープの…」

子供は、蒼白い顔を僅かに上げ、かすれる声で呟く。

美しい翡翠色の髪、それに彩を添える特徴的な髪飾り、淡い若草色の法衣…

「やはり、導師イオン…。何故この様な所に？」

「それは…」

「いや、今はこの狼どもを何とかするのが先決…」

狼達から視線を外さず、視界の端でイオンの様子を伺うコゲンタ。走って逃げるのは、まず無理だろう。

狼は残り五頭。コゲンタ一人だけならば「どうにかこうにか…」する自信は有る。

しかし人一人、しかも傷一つ付けては、いけない人物を守りながら相手をするのは、少々危ない賭けだ。

「導師イオン、私めが駄目だった時は、それを奴らにぶつけて風上へ…。まあ、なんとかしますがの、いちおう用心のため…」

コゲンタは、匂い袋と煙玉の入った雑嚢を座り込むイオンの前に置く。

「さあ…コイツで切られんのはイテえぞお…！」

ゆつくりと、ワキザシを構えるコゲンタ。

カッコつけたものの、コゲンタは待ちに徹するしかない。

その時、均衡を打ち破る者が現れた。

「おおっらあああつ…！」

雄叫びと共に、地面を這う衝撃波が一頭の狼を襲い、動きを一時的に封じる。そこへ一発の緋い砲弾が狼に降り注ぎ、叩き潰す。それは、砲弾では無かった。それは、コゲンタの束の間の旅の

道連れにして、泥棒扱いされた緋色の髪の少年…

「ルーク殿…!!」

ルークはダメ押し気味に再び狼に蹴りを入れ、飛び上がり宙返りでコゲンタとイオンの目の前に降り立つ。

「大丈夫か！？おっさん！そっちのヤツは！？」

見事に着地したルークは、肉厚で緩やかな反りの有る、頑健さと鋭さを兼ね備えた片刃剣を正眼に構えつつ大声でコゲンタとイオンに呼び掛ける。

「ああ、まだなんとも無い。導師イオンも怪我は無いようだ…」
「そうか！おっさん！オレが突っ込む！ソイツたのむ！オレはヴァン師匠の一番弟子だ！やってやるさ…！」

正に『勇猛果敢』の一言だ。しかしそれは、今すぐ逃げ出してしまいたい心を押さえ着ける為の『必死の勢い』だった。

「落ち着きなされ、ルーク殿。狼相手に力押しは上手くないぞ？ここはじっくり確実に守ろう…」

今にも、飛び出そうとするルークを、強めの口調でコゲンタはいさめる。

その時、美しくも妖しい旋律が響く。

紫水晶色の闇の音素が泡立つ様に、狼達を足下から包み込み、聴覚ではなく五感に直接働きかけ、静かに優しく狼達を、深淵の眠りへと誘う。

ばたばた、と次々に倒れ伏す狼達。見れば皆静かに寝息を立てて

いる。

「これは、ユリアの譜歌…『ナイトメア』？」

イオンは、やや目を見開き辺りを見回す。
ゆつくりと歌声が近付いてくる。

「ティア！やっぱスゲーな、譜歌！」

倒れた狼に慎重に近付き、爪先で突き危険が無いか確かめると、ルークは戦いの緊張感を消し、邪気の無い笑顔で歌声の主ティアに手を振る。

つられる様に、イオンも同じ方向を見る。

「ルーク…いきなり飛び出すなんてダメよ。危ないから…」
「イーじゃん、ナンとかなったんだしさ。あ、それよりコイツ！何か顔色ワリイぞ?!」

屈託の無い笑顔で軽口を言うルークだったが、イオンの事を思い出しティアをイオンの前に引っ張る。

「イオン様…失礼致します。どうか、御心と呼吸を楽に、静かに、御身体の音素の乱れを整えます…」

ティアは寄り添う様にイオンの隣に跪き、そつと優しい手付きでイオンの背中に手をかざす。

ティアは静かに聖句を唱えると、淡い柔らかな光がイオンを優しく包む。

しばらくすると、蒼白だったイオンの顔に朱が差し、額の脂汗も引き、苦しげだった呼吸も静かなものに戻った。

「ありがとうございます、音律士殿。だいぶ楽になりました、もう大丈夫です…」

柔らかに微笑みイオンは、音叉の杖を支えにゆっくりと立ち上がる。

「改めてお礼を言わせて頂きます。ぼくはイオン、ダートの導師イオンです。騎士殿、音律士殿、剣士殿、貴方がたの御名前をお教え頂けませんか？」

イオンはルーク、ティア、コゲンタの順に顔を見回し、何の躊躇いもなく、深々と頭をルーク達に下げた。

「き、騎士！？オレのコトか？！」

予期せぬ敬称にルークはうつろたえ思わず聞き返す。

イオンは「ええ…」と微笑み頷く。

「やめろよ！礼言われるほどのコトじゃねえよ！だいたい、初めに助けたのは、このおっさんで、魔物を倒したのはティアだし…。イヤミか？！もしかして！」

たまらなく嬉しい気分を隠して（どちらかと言えば失敗している）、横柄な口調でルークはイオンの謝辞を突っ返す。

「いいえ嫌味など…貴方がいなければ、ぼくは勿論、剣士殿も無事では済まなかったでしょう。それに音律士の譜歌は、戦士の剣や盾が有って初めて、その力を発揮出来るのです。だから貴方と貴方の名前、そして剣技に、敬意を払うのは当然です。本当に、ありがと

「うございます」

あたかも神に祈りを捧げる様に、イオンは両手を組みながら微笑み、再び頭を下げる。

「おがむな！わかったよ！ルーク！オレはルークだ！」

ルークは「終わり！終わり！」と言わんばかりに吐き捨て、そっぽを向いてしまう。

「ルーク殿…古代イスパニア言語で『聖なる焰の光』を表す名前です。勇壮ですが優しい響きの良い名前です。貴方の様な方にふさわしい」

何の照れも気負いも無い賛辞をイオンはルークに送る。

「……殿はいい。オマエに言われるとなんかヘンな感じだ。オレもイオンって呼ぶから……」

怒鳴り疲れたルークは、何かを諦める様にため息をつきつつ言う。

「はい！ルーク！」

花が咲いた様にイオンは微笑み頷く。

ルークは「何が嬉しいんだか……」と吐き捨てそっぽを向くが、不思議と悪い気はしなかった。

そして、世界の運命を変える出逢いが、また一つ紡がれた。

第二十話 森での再会 ルークとイオン（後書き）

ころころと、視点移動の繰り返しで、締まりの無い文章になってしまいました。文章力が欲しいですね…。

アビスの象徴とも言うべき、譜歌を実戦で使う事に挑戦した回でした。

これぞ正に『ファンタジー』という譜歌の描写を考えるのは楽しかったです。しかし文章にすると、かなり恥ずかしい事を知りました。

いかがでしたか？

『三十六計逃げるにしかず』この諺は、一般に「兵法三十六計」と呼ばれる中国の古い兵法書の一計、「^に歩ぐるをこれ上計とする」が元です。

要するに兵法家にとって戦争をする事自体よりも、「争いを避ける様に努力する」事の方が大切である、という事です。

ゲーム本編では何かと戦う事が『エライ』みたいな言い回しが多々見られます。

しかし、日本を護る自衛隊の人達の間では、自分達の役割に誇りを持ちつつも『自分達が必要とされる時は、皆が不幸な時だ。決して慢っては駄目だ。』という感じの上官からのお説教は御約束だと言います。

日々、平和を願いながらも厳しい訓練に身を置きながらも「日陰者」である事を望む…個人的にはバリバリの武闘派よりも渋くてカッコイイと思うのですが、皆さんはいかがですか？

第二十一話 バレた！！知ってた！？年の功！？

「剣士殿、先程は危ない所を…。貴方もローズ夫人の館でお会いしましたね？」

今度は、コゲンタの方を見てイオンは微笑む。

「申し遅れました。拙者、イシヤマ・コゲンタ、性がイシヤマで名前がコゲンタでござる。エンゲープの雑用係の様な者にございます。お見知り置きを…」

その場に手足を着き、額を地に付ける様に深々と頭を下げるコゲンタ。

ルークはその光景に啞然とするが、特にイオンは驚いた様子は無く困った顔をする。

「剣士殿、どうか頭を上げてください。命の恩人を跪かせるなど、導師として…いいえ、イオン自身としてしたくない。どうか楽に」
「…では、剣士殿はご勘弁ください。そんな勿体付けられたら肩の力が、どうにもこうにも…。あははは」

コゲンタは下げていた頭を上げ、屈託の無い笑顔を見せる。

「それは、いけませんね？では、コゲンタと呼ばせて頂きます…」

コゲンタに、つられてイオンも笑顔になり頷く。

そして、今度はティアに向き直るイオン。ティアは、すぐさま
跪き深々と頭を下げる。

「貴方も、どうか楽に。此処は公の場では無いのだから…頭を上げてください。お久しぶりですね？メシユティアリカ・グランツ響長…いえ、今は謡長でしたね？」

一国の主にして、ローレライ教団の最高指導者である導師イオンの口から一兵卒の自分の姓名、その上、階級まで正確に聞かされティアは驚いた。しかも、「久しぶり…」とは？思わず、イオンの顔を見上げるティア。

少し悪戯っぽく微笑むイオンと目が合う。

「お久しぶり…と言っても、ぼくの方が一方的に貴方を知っているだけなのですが…。ふふふ」

改めて言えば確かに、自分は良い意味でも悪い意味でも、神託の盾騎士団の中では有名だとティアは納得する。

主席総長の実妹。入団早々、師団長の側付き。兄の七光り。カントビレとただならぬ関係だ。…と話題の種には事欠かない、などとティアは内心納得していると、イオンは何かを思い出に浸るように瞳を閉じポツリと呟く。

「一昨年のレムの感謝祭。貴方の讃歌は素晴らしかった…」（そっちですか…）

声や表情には一切出さず、ティアは内心頭を抱えた。

レムの感謝祭とは、草木を育む母なる光の晶霊レムに、感謝と豊穰の讃歌を捧げ新年を祝う一大宗教行事である。

一年前、感謝祭のとりを勤めるはずだった音律士の少女が、緊張のあまり倒れた。その代理を引き受けた（本人の了承無くカントビレが…）ティアは、大観衆の前で讃歌を歌ったのだ。

はつきり言ってティアにとっては『消し去りたい過去』の一つ

だった。しかし、自身の給金では絶対に手を出せない、煌びやかな衣装を、着れた事は嬉しかったというのは内緒だ。

とりあえず、話題を反らしつつ『元臣下』として、イオンの真意を確かめなければ、とティアは口を開いた。

「改めまして、私は、『元』ローレイ教団 神託の盾騎士団第六師団所属、メシュティアリカ・グランツ謡長であります。お見知り置きを…」

静かに恭しく頭を下げ、ティアは名乗る。

「カンタビレの隊ですね。しかし、『元』ですか…？」

「はい、『元』です。私の事よりも、イオン様。ダアトでは貴方様が行方不明と…誘拐されたのでは？とも…。秘密裏にですが、主席総長を始め、多くの者が探索に出ています…」

努めて、冷静に抑揚の無い声でティアは続ける。

「行方不明？ぼくがですか？」

「はい。そのイオン様が何故、マルクト軍の方々と？そして、何故このような場所に、御共も着けず御一人で？」

「それは…」

ティアの、硬く重々しい口調に、イオンは咎められている気分になり口籠もる。

しかし、思わぬ人物からイオンに助け船が出された。

「おい、ティア！『元』ってなんだ！？『元』って！？もしかして、オラクル止める気か！？」

ティアに詰め寄る様にイオンとの間に割って入るルーク。

「もしかして、『あのコト』気にしてんのか!？」

ルークはティアの両肩を強く掴み問い詰める。

「『アレ』は、オマエは悪くねえって言っただろ!？」

「ル、ルーク…。いたい…」

「あ、悪りい…!」

慌てルークは、ティアを放す。ばつが悪そうに頭を掻いて、そっぽを向く様に離れる。

『あのコト』だとか『アレ』などと「意味深な…」言い回しではあるが、勿論『超振動でマルクトに飛ばされた』という事である。

『絆が伝説を紡ぎ出す物語』? 『永遠と絆の物語』? 『あのコト』『アレ』の部分を、もう少し詳しく…と、妄想を巡らすおっさんが一人。

一方、心優しい少年導師は、恩人の力に成りたい一心で…

「それは、もしかやルークが、キムラスカ王家筋の方だという事が関係しているのですか? ぼくに、出来る事なら…」

と、ルーク達にとって、此处マルクトでは『爆弾』とも言える言葉を口にした。

「イオン! しいー! しいー!」

ルークが、弾かれた様にイオンに飛び付き、慌てて口を塞ぐ。

「むくう…むう！」

「ルーク…！落ち着いて…！イオン様の呼吸が…」

イオンが苦しそうに呻いているのに、ティアはすぐ様気付きルークを諫める。今度は慌てて手を放すルーク。

「わ、悪რიい！大丈夫か！？」

「は、はい…なんとか…」

居心地悪そうに、ルークはイオンを氣遣う。

「ええと…イシヤマさん。ルークは…その…」

マルクトの民であるコゲンタに、ルークの事を誤魔化そうと口を開くティアだったが、良い言葉が見つからない。

「ルーク殿が『キムラスカ王家と縁が有る人』って話ならば、誤魔化す必要は無い」

「え…？」

「溪谷で、お会した時から『もしかしたら』とは思ってはいた。だが心配無用、その事は誰にも他言していない。無論ローズ殿にもな…。あははは」

コゲンタは緊張感をほぐす様に、快活に笑う。

「おっさん、氣付いてたのかよ！？」

「自分も、元々キムラスカの生まれだからの。ま、見る者が見れば誰でも氣が付くだろうがの…。ルーク殿の様に、鮮やかな赤毛と碧眼の組み合わせはキムラスカ王家以外では珍しいからの」

何でも無い事の様に、笑いコゲンタは言う。

「その様子じゃあ、相当な大御所の様だ。ま、何にしても、肩を並べて剣を振るい、助け合った御仁を裏切る様な卑劣な真似は、この腰の物に誓ってせん…って話だ。あははは」

腰の脇差しを「ま、二束三文のナマクラだかの…」と、軽く叩き柔らかくコゲンタは笑う。

「ティア…」

ルークは、振り返りティアの顔を伺う。

「イシヤマさん…、信じて良いんですね…？」

ティアは、切れ長の瞳をさらに細めコゲンタを真っ直ぐに見つめる。

コゲンタは、その視線を真っ向から見つめ頷く。

それを見たティアは、ルークに頷き微笑む。

ルークは、ほっと胸を撫で下ろす。

「ま、つもる話も有るだろうが、此処じゃ何時、狼どもが目覚ますかも解らんからの。せつかく死なせずに済んだ奴もいるんだ、逃す手は無いぞ？」

譜歌によつて、深い眠りに着いた狼達を、コゲンタは、指差しながらルーク達を見回す。

「そうですね。彼らを既に手に掛けた、ぼくが言える事では有りま

せんが、無益な戦いは避けたい…」

「オマエ、あんなスゲー譜術使えるクセにヘンな奴だな？」

コゲンタの提案にイオンは頷き、狼達を悲しそうに見る。

そんなイオンに、ルークは聞き方によつては嫌味とも取れる言葉を口にする。

無論、ルークには他意は無く、心からイオンの譜術に感心し、あんな凄まじい譜術を駆使するイオンが、「戦いたくない…」と言う事が不思議だったのだ。

「ふふふ、ヘンでしょうか？ ぼく自身、争い事が嫌いというのがあります、ぼくの身体は先程の譜術、『ダート式譜術』を使うのには向いていないのです。すぐに疲れてしまつて…」

イオンは、自嘲的に笑う。

「ふーん、じゃあアレ、もう使うな。オマエは後ろで見てろ」

特に何でも無い様に、ルークは言つたつもりだった。しかし、イオンの反応は違った。

「あ、ありがとうございます、ルーク。守つて下さるんですね？ 感謝いたします」

イオンは再び、神に祈る様に手と手を組み頭を下げる。

「カ、カンチガイすんな！ また倒れられて運ぶのがメンドーなだけだ！ 女のティアや、おっさんのおっさんに運ばせるワケには、イカねえだろ！？」

ルークは、慌てて乱暴な口調で吐き捨てる。しかし、イオンには通用しない。さらに、顔を綻ばせ続ける。

「優しい方ですね。ルークは…」

「ダレが優しいってんだ！？アホなコト言っただけで、サッサと行くぞー！」

イオンからの、心からの謝意に耐えきれなくなったルークは、逃げる様に目的地に向かって歩き初めた。

「ルーク、待ってください…！」

それに、イオンも続く。

「んん？」

「え…？」

ふと、ルークとイオンはある事に気が付いた。

「え、ええと…？」

「むう…？」

ティアとコゲンタも何かに気が付き立ち止まる。

四人は、ほぼ同時に振り返った。

第二十一話 バレた！！知ってた！？年の功！？（後書き）

この物語のティアは、ルークを送り届けたら、オラクルを辞める、辞めさせられるつもりでいます。

事故だった、とはいえ国王の命令で、匿われているルークを外に連れ出し、危険に晒しているのだから騎士として（キムラス力の騎士でないなら、尚更）当然と言えば当然ですね。

原作のティアは、一国の騎士団長を殺害するつもりで、ルークの家に侵入します。

例え、それが『正義の行い』だったとしても、『罪は罪』です。騎士団長が、不正を行っていたなら、それを処罰するのは、その上司である国王や宰相の職務です。

ティアの階級では『越権行為』という言葉を使っても憚るほどの事柄です。

しかし、原作のティアは事件後も『騎士』として名乗り振る舞います。個人的には違和感を禁じえませんが。

皆さんは、どう感じましたか？

第二十二話 チーグル発見！ 這い寄る影

『GAUUUU…！』

ソレは猛っていた。無機質で虚ろな眼球を、上下左右に走らせる。

ソレの目当ては、見つからない。

苛立たしげに、丸太の様な両腕を無造作に振るう。 二本の木の幹が弾け抉りとられ、崩れ倒れる。

糸で粗雑に縫い合わされた、感情や知性を全く感じさせない口から、不気味な呻きが漏れる。

『GUUU…I…N…！DoCo…D、Da…！！』

ソレは、倒れた木々を蹴散らし、岩を踏み潰し、一直線に森を進む。

『I…ION！』

とある違和感に気が着き同時に振り返った、ルーク達四人。

交差する四対の視線。そう、交差してしまっていた。

ルークはティアと目が合った。しかし、ルークはすぐに反らした。

イオンはコゲンタと目が合った。お互いに、愛想笑いを送る。

何故、ルーク達の目が合ってしまったているのか？

それは何故か？答えは簡単、ルークとイオンは『森の奥へ』向

かい、ティアとコゲンタは『森を出よう』としていたからだ。

「あのう…？」

「あ…ははは」

困った様に苦笑し合うイオンとコゲンタ。

ティアはルークを見つめるが、ルークは、すぐに目を反らした。ティアは子首を傾げるが、気を取り直してルークとイオンに問いかける。

「ええと…。ルーク、イオン様、どちらに…？」

ルークは、「今さらなんで…？」という表情で、ティアの質問に答えた。

「チーグルのトコに、決まってるだろ？そー言っただろ？」

「ルークもですか？！心強い…。ぼくもチーグルに会わなければ…ならないんです。導師イオンとして…」

神に感謝する様な、調子でイオンは笑う。しかし、その笑みはすぐに、深刻な物に変化してしまう。

「なんだ？オマエもチーグルが目当てか？ちょうど良かったな？…ついでに、連れてってやるよ、ついでにな！カンシャしろよな！？」
「ルーク…」

何故か途中で、気恥ずかしくなったルークは、裏返った声で横柄な口を叩く。

そんなルークに、イオンは、本当に心から感謝の微笑みを送る。ルークは、すこぶる居心地が悪くなった。

「イオン様、お待ちください。ルークも少し待って、お願いだから……」

ティアは、困惑する思考を押さえ込み、努めて冷静にルークとイオンを諫める。

「ルーク……。この森は危険なの、ウルフ達の様子を見ただしょう？いくら、わたし達が彼ら縄張りを侵しているからと言って、無闇に人を襲う事はしないの」

ティアの言葉にコゲンタは、同意して頷き続ける。

「魔物除けの……と言うか、魔物に人の存在を教えて、寄って来ない様にする為の笛で、逆に寄ってきましたからの。あははは……」

コゲンタは「苦笑するしかない……」という複雑な表情だった。

「やんごと無き方々連れて、無茶するほど『自惚れ屋じゃあない』って話でござる。あははは」

「つまり……『行くな』と？」

「ま、そついう話で……」

悲しそうに、イオンはコゲンタを見返す。しかし、コゲンタは苦笑し頷くのみだった。

「イオン様……導師という御立場として、教団の象徴たるチーグルの事を、お考えなのは解ります。しかし、私ではイオン様を御守りする力量も資格も有りません……」

ほとんど抑揚の無い声で、ティアは只、『自分が弱い』という事実を告げる。

「でもそれは、イオン様が御一人だから問題なのであって、導師守護役やマルクト軍の方々と一緒なら…。魔物との戦闘で、はぐれてしまったのなら一度、エンゲーブに戻って合流出来るよう村に残っているマルクト軍の方に連絡を…」

「いいえ、森へは一人で来ました。ジェイドもアニスも此処にはいません。譜術で動きを封じたので、すぐには追っても来れないでしょう…。悪い事をしました…」

ティアの提案を遮る様に、凜然と言い放つイオン。

最後の譜術のくだりで、ティアは只立っているだけなのに滑りそうに成った、しかし何とか踏み止まる。無視すべきか…？

「恐れながら、ともかくお帰りください。申し開きも、わしらでは無く御供の方々にの…」

冷静で、あたかも突き放す様な言葉を、躊躇い無くコゲンタは言う。

悲しそうに俯くイオン。華奢で、実際の身長よりも小さく見える身体が、さらに小さく見える。

「何とぞ、お帰りください…」

イオンの、捨てられた仔犬の様な雰囲気胸を突かれるティア。しかし、コゲンタは、あくまでも仔犬と『破天荒な突っ込み所』を無視し言う。

「おいコラ！おっさん！ケチケチせずに連れてってやればいいじゃないか！？一人でこんなトコまで来るヤツだぜ？どうせまた一人で

ムリして、さつきみたいになるだけだ！きつと…なあ？！」

イオンに救いの手が差し出された。ルークだった。

「ルーク…。はい！何度だって…！ぼくは、ぼくに出来る事をした
いんです。どんな事でも…」

ルークからの、救いの手に喜びながらも、何かに耐える様にイ
オンは声を漏らす。

「別に、ケチケチして言っているわけでは無いんだがの…あははは。
よし、解った！確かに、こんなトコまで来て『すぐ帰れ！』ってん
じゃ酷な話だ。導師イオンにもチーグルの件、見届けて頂こう！」

無表情だったコゲンタの顔と声が緩み、快活に微笑みかける。

「あ、ありがとうございます！コゲンタ！」

イオンは花が咲いた様に微笑む。

「ただし！チーグルを見つけ、事情を聞いたらば、その事情がどん
なモンでも、帰っていたたく。これは譲れない、よろしいか？」

先程とは違い、感情は籠もっているが、厳しめの口調でコゲン
タはイオンを真っ直ぐに見つめる。

「…はい、解りました。どちらにしろ、ぼく一人では行けないのだ
から…。コゲンタの指示に従います」

まだ少し不服そうなイオンだったが、何かを思い直し、躊躇い
無く平民のコゲンタに頭を下げる。

「はっはあああ！」

コゲンタは、地面に飛び込む様に、土下座をする。

「もうイイからいくぞー！」

いい加減、面倒くさくなったのかルークが声を上げ駆け出す。

「ルーク、一人で先行するのは危険だわ。待って……」

チーグルの巣穴を目指し、森を進むルーク達。

コゲンタが先頭を務め、音に敏感な音律士のティアを殿（しんがり、行列の最後尾の事）に、ルークとイオンを挟む様な陣形をとっていた。

ルークは初め、「オレが先頭だ！」と意気卷いたが、コゲンタの「導師イオンを守りつつ、状況に応じてわしか、ティア殿の援護をしてもらう重要な立ち位置。この中で、一番動きの速いルーク殿にしか任せられん……」という口車……もとい、要請によってルークは今の立ち位置を快諾し現在に至る。

ルークは物珍しそうに、視線をあちこちに送る。

イオンもまた、ルークよりは遠慮がちだが、あちこちを見ている。

「スゲエ……、なんかワカらんけどスゲエ……。屋敷の森とゼンゼンちがう……ゴチャゴチャしててフクザツだ」

「緑の密度に、圧倒されますね……」

ティアは、ルークとイオンの「微笑ましい……」とも言える反応

を見て、「来た価値は有ったかも…」と思った。改めて、二人を護りぬく事を心に誓う。

その後も、何度か森の魔物達と遭遇し、戦いとなったが、コゲンタの匂袋で怯ませると、すかさずティアの譜歌『ナイトメア』で行動不能にし、ほとんど戦いらしい戦いをする事無く「のりくり…」と、無駄な流血を避け進む一行。

と、その時、ルークが妙な物を見つけた。
獣道の真ん中に、赤い拳大の物が落ちていた。

「あん？リンゴ？なんでこんなトコに？」

そう、リンゴの成る木も無いのに「ぽつん…」と一つリンゴが落ちていた。

コゲンタが後続のルーク達を手だけで制し、一人近付いて行く。

「ふうむ…」

慎重にリンゴを拾い上げ、コゲンタはしげしげと眺めると、皆にも見える様リンゴを軽く掲げて、ルーク達の元へ戻ってくる。

「村の焼印が有りますね」

「エンゲーブの物で、間違いない様ですね…。チーグルは此处を通ったという事ですね」

ティアとイオンがリンゴを見て呟く。

「落としてイキやがったのか？マヌケなヤツらだぜ！ハハハ」
「いやぁ全く全く。そのマヌケに、まんまと盗みを働かれた、わし

らは一体…？あははは…」

「き…気にすんな！おっさん！ハハハ」

チーグル達の失敗を嘲笑うルークだったが、それが同時に、コゲンタ達の侮辱になってしまった事に気が着き笑って誤魔化する。

「もしかすつと、まだ近くにいたりしてなあ！？」

誤魔化しついでに、ルークは周囲を見回す。それは草むらから唐突に現れた。

それは一言で言えば、コザルの様な、コブタの様な、短すぎる手足に巨大な耳、能天気な絵に書いた黄色い不思議生命体。

「な…？！」

「みゅ…？」

目が合った。まん丸なドングリ眼と目が合った。

「チーグルです！」

イオンが思わず声を上げる。

「み、みゅう！」

チーグルはイオンの声に驚いたのか、一目散に逃げ出した。

「あ！イオン！このバカヤロー！」

「す、すみません！つい…」

イオンを睨み

ルークはイオンを咎めるが、友人同士のやりとりの様に、それほど刺がない。

「それよりイオン、おうぞ！走れるか！？」

「ルーク…、落ち着いて。森の中を走るチーグルに、人の足で追いつくのは難しいわ」

今にも走り出そうな、ルークをティアは諫める。

「じゃあ…、どうすんだよ…？居場所がワカル、譜術とか譜歌があるのか？もしかして！？」

出鼻を挫かれたルークは、不貞腐れた様な顔をするが、すぐに「興味津々…」といった顔になり、身を乗り出してティアを見る。

「ふふ…当たらずとも遠からずね。チーグルは魔物の中でも、音素の扱いに長けた種族なの。さっきのチーグルも風の音素を纏って加速していたから」

「へえ、ナマイキなヤツらだな。で…つまり、どういうコトなんだ？」

ルークは、チーグルに対し憎たらしい顔をしつつも首をひねりティアに先を促す。

「つまり、風の音素の痕跡を辿って進めば、チーグルの巣にたどり着けるはずって事よ」

「スゲエな?! 譜術士スゲエ!!」

ティアは少しだけ、得意げに微笑み、ルークは憧れの眼差しを

向ける。

「よっしっ！行くぞオマエら！待ってるよチーグル！ゼッテー」『ぎやふん』って言わせてやるぞー！」

拳を振り上げ、氣勢を上げ少々不穏な台詞をルークは言う。

「あの…、ルーク。出来れば穏便な方向で…」

イオンが、不安げにルークを見る。

「言葉のアヤだよ。イチーイチ気にすんなよ！ほら、おっさん先頭まかせたぜ！」

「あははは、よし行こう。ティア殿、誘導を頼む」
「はい」

ルーク達は、チーグルが姿を消した方向へ歩き出した。

『GUUU…！』

ソレは、直感的に何かを感じ取った。

首を緩慢な動きで、ある方角へと向けた。

ルーク達が向かった方角と同じ、チーグルの巣が有ると思われる方角だ。

『…I…O…N…！』

ソレは無惨な唇を「ぬたり…」と歪め、何の迷い無く、その方角へ巨体を向けた。

第二十二話 チーグル発見！ 這い寄る影（後書き）

原作ストーリーでは、イオンと一緒に森を進む事を、『世間を良く知る優秀な軍人』のティアでさえ、何の疑問も躊躇いも無く受け入れてしまっていますが、『平和の要』であるイオンが、『何かが起っている魔物も住む森歩く事』を許すというのは違和感しか感じなかったので、コゲンタに憎たらしい事を言わせました。

8月という事で、終戦や戦争体験を題材にしたドラマや特集番組を、皆さんも目にする事が多いと思います。

アビスのテーマの一つとして『戦争』があります。

プロデューサー曰く『戦争っていうのは、それこそ世界中で起きている出来事ですよね。でも紛争を含めて、戦争が身近でない国というのは、本当に日本だけなんです。アジアの近隣諸国でも支度を始めているし、アメリカは世界各地で戦っている印象ですし。。。』

確かに、『本当に悪い事を知らなければ、本当に良い事も出来ない。』とか『戦争を知らずして平和は語れない』など、昔から様々な人達が語っていて、プロデューサーの言葉も一つの『真理』と言えます。

しかし、プロデューサーが『現代の若者』であるルークに、『立派な大人、制作陣の代弁者』であるティアとジェイドに、やらせた事は『軍人でも無く偶発的に戦場に迷い込んでしまった少年』に殺し合いを強いる事でした。

こんな理不尽が、本当に正しいと言えるでしょうか？

確かに、痛み（戦争の悲惨さ）を知れば、平和の貴さを実感す

る事でしょう。

しかし、痛みを強いる事と、平和の貴さを教えるが〃（イコール）でしょうか？ 私は、敢えて違うと断言します。

そして、プロデューサーは、こう続けます。

『戦争が起きると、個々の判断というものが出来なくなりますよね。』
「国の意志を背負って自分もやる」みたいな。本編で流れる戦争のシーンは、そういうふうな視点で見てもらいたいと思います。』

つまり『どんな状況でも自分の意志を、しっかり持て』という事でしょうか？ なるほど、原作パーティーメンバー（多数派）も、『しっかりとした自分の意志』を、ルーク（少数派）に押し付けて従わしていますね？こんな理不尽が、正しい事とは思いたくは無いですね。

確かに、それぞれの立場に立って物事を考える事は大切ですが、『戦争を知らない者』だからこそ解ったり見える事だって有るはずです。

『心は熱く（優しく）、頭脳は冷静に』です。

二十三話 不思議な樹と新たな仲間（前書き）

約二ヶ月ぶりの投稿となります。

憶えておいででしょうか？

今回、ルーク達はチーグルの巣穴にたどり着きますが……

二十三話 不思議な樹と新たな仲間

ルーク達は、チーグルの後を追ひ、ティアの誘導で進む。

ふと、ある事に、ルークは気が付いた。

「なんか……？ヘンじゃねえか？このへん……。魔物のヒリヒリしたカンジ？がしねえ……？」

「そう……、ですね。なんだか、穏やかです」

イオンが、ルークの言葉に頷く。

先ほどまで森を覆っていた、緊迫感なりを潜め。暖かな、優しい木漏れ日の中を小鳥達が遊び、さえずっている。

「この辺りの木、あれも、それも、これも、魔物を寄せ付けけない不思議な樹だ」

コゲンタが、いくつもの木を指差し言う。が……

「ま、どうしてなのか、からくりの方は、わしにはサッパリだがの。あははは」

頭を掻いて苦笑する。

「あんだそりや……？」

ルークは呆れ交じりに苦笑する。

「あれは、『ソイルの木』という種類の木で、魔物を寄せ付けない、正確には凶暴性を抑えてしまう香りを発するの。だから、『ウルフ』

や他の魔物がいなくなったわけじゃ無いと思うわ。わたしも、本物を見るのは初めて……」

ティアが、コゲンタの説明を引き継ぐ形で、捕捉する。

「これが、『ソイルの木』……。確かに不思議な感じのする木ですね？」

「そうかあ？香りたったって、トクに匂いなんてしないぞ？」

イオンも、木の事は知っていたらしい。もう一度、木を観察する。

一方、ルークは鼻をうごかし首を傾げる。

「ふふ……、人の嗅覚で嗅ぎ分けられない位の香りだから。わたし達には無理よ」

「ふーん、なるほどなあ……」

ルークは頷きながらも、未だ釈然としない顔で、木々をまた観察する。

しかし、ルークには『ソイルの木』とやらずと、今までの森の木々と、何がどう違うのか解らなかった。

一行は森を進む。と、その時、最後尾のティアが立ち止まる。

「ん？ティア、どした？おっさん、ティアが……」

ティアの様子に気が付いたルークは、コゲンタを呼び止める。

「風の音素が、ここで途絶えています……。ここで行使を止めたのね……」

「じゃあ、どうすんだ？もう追っかけられねえのか！？」

ティアが、静かに告げる一方で、ルークは少し慌てて聞いたです。

「いや、どうやら着いたようだぞ？ほれ」

コゲンタが木々の間、空を指差す。

ルークは初め、それは山だと思った。

「あれがチーグルが巣を作っている、と言われる大樹だ。わしも此処まで近付いたのは初めてだの」

『大樹』と言う事は、あれは一つの木、ルークの想像を絶する大きな木という事になる。

大樹に向かって小一時間など歩くと、一行は開けた場所に出た。

「でっ………けえ………！」

大きな泉の真ん中に、大樹は悠然と鎮座し、たくさんの枝葉を空へと掲げていた。

物語にたびたび登場する『世界樹』が、本当に有るとすれば「こんな感じだろう」と考えてルークは見上げる。

巨石の様な幹を、複雑に絡み合った根が支えている。これならば、チーグル位の大きさの生き物が、住み着くのに十分な大きさの、洞なり凹みなりが有るだろう。

「樹齡は、軽く千年は越えているでしょうか……？」

「千年……。言葉だけで気が遠くなる年月ですね……」

ティアの言葉に、イオンは何処か遠くを見る様な目になり、大樹を見上げる。

「なかなか良いトコだの。用事が無けりや、二、三日ゆっくりしたいところだのう。あははは」

などと益体の無い事を言いつつ、視線を巡らす。

「あつこら辺から、根元に行けそうだの？」

ルークの現在位置から、ほぼ反対側に、大樹の根に苔や腐葉土が固まった、自然の橋が出来ていた。

一行は、泉をぐるりと回って橋を渡り始めた。

「へへ！いよいよゴタイメンってワケだ。目にモノ見してやるぜ！」

ルークはイタズラっぽい笑みを浮かべ、拳を鳴らす。

「ルーク……！あまり乱暴な事はしないで下さい。チーグル達にも、きつと事情が……。まだ彼らが、犯人と決まったわけでは……」

ルークの不穏な言動を、イオンは諫める様に、チーグルを擁護する。

「へへ、言葉のアヤだよ。イチーチ突つかかなよ！それに……」

ルークは屈託無く笑い、軽やかに大樹の根で凸凹した地面を「けんけんぱっ……」という調子で飛ぶ。

「もう決まったようなもんだ！ほら、もう一つ何か有ったぞ！イモか？これは？」

ルークは、くぼみに成った所から、ジャガイモを拾い上げ、コゲンタに放って寄越す。それにしても、よく見つけた物である。

「おっと。確かに、ウチで採れたモンだの、焼印がある……。ま、何にしても『落とし前』付けさせるにしろ、見逃すにしろ……。話を聞いてみない事にはの？」

コゲンタは、片手でジャガイモを受け取ると、施された焼印を確かめる。

一つ頷くと、コゲンタはルーク達を笑顔で見回す。

「はい……！」

「そうですね……。まずは話を聞かないと……」

「サツキから……。話す話すって……。魔物だろ？相手は……。ん？ワカんだっけ？」

コゲンタの言葉に、イオンとティアは頷く。

一方、ルークだけは首を傾げて疑問を口にする。

「そのはず、ですが……」

「歳を経た魔物は、人の言葉を解して喋る事も有る、らしいけど」

「ほお、チーグルって『そう』なる、スゲー種類なのか？」

ティアの言葉に、ルークは感心し、質問するが…。

「ええと……、それは……。さあ……？」

ティアは頼りない返事を返し、苦笑して誤魔化す。

「伝承では、始祖ユリアに力を貸したと言われていますから、話せるように成る個体もいるのかもしれないね」

イオンがティアをフォローする様に説明する。

「あのナリで……？ 思い浮かびませんのう……」

「ああ、想像デキねーよ。いや、むしろ、したくねえよ！ なんかブキミだ」

二人で揃って首を横に振る、どうやらコゲンタとルークは、チーグルが喋る様を「まるで、夢のよう……」と思っているティアとは正反対の考えらしかった。

そうこうしている内に、巣穴の入口前に着いた。

どうやら、大樹を太い根が持ち上げる様にして出来た穴のようだ。

まるで、生き物が口を大きく開けている様で、なんとも不気味だ。

思わず「ごくり……」と、ルークは唾を飲み下す。

「いよいよ……ですね……」

イオンが一人、一歩前へ歩み出る。

「ああ、待った待った。導師イオン、勝手されちゃ困りますのう……。先頭はわしですからの！ あははは」

イオンの行く手を遮る様に、コゲンタが前に出る。

「導師イオン、あなた様に毛筋一つでも傷付いたら、神託の盾総出で八つ裂きにされちまいますからの……、逃げる方が得意だが『限度』ってモンがある。あははは」

まるで、散歩にでも出かけるかのような気安さで、コゲンタは穴を潜る。

「あ、そうそう、大丈夫な様なら声をかけるますからの、それから入って来て下されい……」

コゲンタは一度振り返って、ルーク達に、そう言う穴の中へと消えた。

「ルーク、どうしたの……？ 恐い顔して？」

コゲンタの背を見つめ、眉間にシワを作り難しい顔をするルークに、ティアは気付いた。

「んん……いや、その……。さすがに、『ヤツザキ』はネエよなあ？ アハハハ……」

ルークは、乾いた笑いを浮かべる。

「そう、ね……。『総出』で『八つ裂き』は無い……、かな？」

それは、文字通り『あり得無い』のか、只『総出』と『八つ裂き』が無いだけなのか、ルークには解らなかった。もう一度、問い

直そうとした時…

「おおーい……！導師イオン、ルーク殿、ティア殿！入って来ても大丈夫だぞう！」

穴の中のコゲンタから、声がかかる。

「あ……、光の子らよ……『アピアースライト』。さあ、行きましよう？ルーク」

ティアは杖の先に、光の音素を集める。

杖の先が、淡く発光している、照明には十分だろう。

「ティア、ぼくの杖にも光の音素を」

「え……でも、それは…」

イオンは自身の細身の杖、掲げティアに歩み寄る。しかし、ティアはイオンの体調を気づかい、躊躇する。

「大丈夫ですよ。それくらいなら、何とも有りません」

イオンは、ティアを安心させる様に微笑み頷く。そっと、杖の先と先を合わせる。蠟燭の灯火を分ける様に、光の音素がイオンの杖にも宿った。

一方、なんやかんやで、誤魔化された気分のルークだったが、とりあえず「傷一つ負わないし、負けねえ…」という感じで気合を入れ直す。

「よっし！行くぜ……！」

何時でも、抜剣出来る様、剣の柄を軽く握りつつ、ルークはコゲンタに続き穴へと飛び込んだ。

穴の中、チーグルの住処は意外な程広く、大樹の根が絡み合い半球を形作っている。そして仄明るい、そこに、イオンとティアの音素の灯火が加わり、更に良く辺りを見渡せる様になる。

そうして、ルークの目に映ったのは、見渡す限り、チーグル、チーグルチーグルチーグル……。色とりどりのチーグルが、ある者は怯えながら、ある者は身体中の毛を逆立てて威嚇し、ルーク達一行を「ぐるり…」と取り囲んでいた。

単体でなら、「かわいいと思わなくも無い…」と感じたルークだったが、これだけ揃った光景には、正直恐怖を感じた。

ルークは、不意に以前読んだ本の内容を思い出した。昆虫の生態を生涯追いつけた男の『蜂』の書物だったと思う。

蜜蜂は、捕食者である雀蜂を数十匹で、包み込み自分達の体温を上昇させ『熱死』させるのだ。

蜜蜂達は、永い時間をかけ進化し、雀蜂よりも『致死温度』が僅かに高い身体を持っているのだ。

チーグルが、そういう特殊能力を持っていない事を、ルークは心から祈った。

「さて……チーグル達よう！わしは、お前さんらが盗みに入った、エンゲーブって村の者だ！！」

コゲンタの大声が、巣穴いっぱいに響き渡る。

その大音声に、驚いたのか、チーグル達の動きが止まる。そして、そんな事はお構い無しにコゲンタは続ける。

「どうして、わしみたいな者が来たのか……解るな？」

脇差しの鯉口を握り、「かちり……」と、鐸鳴りをワザと響かせる。

「我らを退治しに来たのかのう？」

老爺なのか、老婆なのか、よく解らない不思議な声がした。声がした方向を見ると、ややくすんだ紫色のチーグルが、そこにいた。

自身の身体程もある大きさの金属の輪を持つ姿は、部分的に伸びた眉毛の様な顔の毛と相まって『杖を付いた老人』その物だ。

「場合によっちゃ、ソレもあり得るなあ。百姓からしたら作物を荒らすなら『聖獣も害獣も大差無い』って話だな？」

小動物が、何の淀みも無く口を聴いている事に、ルークは大いに驚いたが、コゲンタが特に驚いた様子は無い。自分の感覚が間違っているのか？と思い、ティアとイオンの様子を伺うルーク。

ティアは、何故か顔が少し赤いが驚いてはいる様だった。

そして、イオンは何処か納得している様子で頷いている。

「もしかすると、その輪はソーサリーリングではありませんか？ユリア・ジェネが、友好の証としてチーグル族に贈ったという……」

どうやら、イオンは老チーグルが持つ輪が、何なのか心当たりが有るようだ。

「いかにも……。お前達は、ユリアの縁者か？」

「はい、ぼくはユリア・ジエネを始祖とするローレイ教団の導師、イオンと申します。貴方はチーグルの長老とお見受けいたしますが？」

頷く老チーグルに、イオンは柔らかに微笑み、頭を軽く下げる。

「いかにも……。一番、歳を食っている、というだけではあるがのう」

髭を撫でる様な仕草をしつつ、長老チーグルは頷く。

「やいコラ！なんで村の食いモンを荒らした！？みんなメーワクしてんだぞー！」

『トクにオレが！』と、心の中でだけ続け、ルークは長老チーグルを睨み付ける。

「一族を存続させる為に必要だった……」

長老チーグルは、力無く首を左右に振り、疲れた溜息を一つ吐いた。

「しかし、長老。チーグル族は草食のはずでしたね？何故、人の食べ物が必要に成ったのでしょうか？」

小さな身体を、更に小さくし、うなだれる長老チーグルに同情しながらも、イオンは冷静に予てからの疑問を口にする。

「食べる物が足りなくなつた……。」
というわけではありませんよね？ぼくは植物の事は素人ですが、こ

の森は豊かに感じましたが……」

努めて穏やかな口調で、イオンは質問を続ける。

「仲間の一人が誤って、北の森……ライガが住む森で、火事を起した。幸い大きな火事には成らなかったが、その森に住む『ライガ』の巣が焼けてしまった。そして、ライガ達は、丁度今が繁殖期の真っ最中……。卵を安全に孵す為に、この森へとやって来た……」

長老チーグルは、「何故こうなってしまったのか……」とでも嘆く様に呟く。

「なるほどの、それでか……」

「はい……、恐らく」

何かに納得した様に、コゲンタとティアは頷き合う。

「何がだ？何かなるほどなんだよ？」

「森で、わたし達が戦った魔物達の事よ。様子がおかしいって、話したでしょう？」

魔物だからと言って、『むやみやたらに人を襲う事は無い』という話を、ティアから聞いた事をルークは思い出し頷く。

「魔物達が苛立っていたのは、ライガ達が縄張りを盗られたからだったのね……」

「追い出そうにも、成獣のライガはドラゴンにも匹敵する、『正真正銘の魔物』だ。山犬……ウルフ達じゃ話にもならんだろうのお……」

ルークには、その『ライガ』が、どんな魔物なのかは解らなかったが、ドラゴンなら知っていた。

ドラゴンと言えば『最強』の代名詞と、言っても過言では無い。もちろん、ドラゴンにもピンからキリまでいるだろうが、英雄譚などでは最下級のドラゴンといえども、魔物としては強い部類になっている。

そんな魔物が、群れを成しているのなら、確かに「一大事……」の一言だろうとルークは思った。

「ライガの仔の生き餌には、我らチーグルが丁度良いからのう……」

長老チーグルは、頷いて納得しているのか、首を左右に振り否定しているのか、一目では判別出来ない複雑な仕草をする。

「なるほどの、ソレを見逃して貰う代わりの食い物を……って話か？こつちとしては迷惑以外の何モンでもないが……。ふうむ」

コゲンタは、ある程度チーグル達の心情を理解しつつも、エンゲープの一員としての意見を忘れない。
腕を組み、難しい顔で首をひねる。

「本当に、すまなく思っている……」

長老チーグルは、静かに頭を下げる。

「何とかならないでしょうか……？」

イオンは、コゲンタやルーク、ティアの顔を見回す。

「ライガ？だったか？ソイツら住むトコ燃やされたんだろ？かなり、

オンビンに済ませてんじゃね？だいたい、弱いモンが強いモンに食われるのは普通だろ？」

率直かつ、やや辛辣な意見を、口にするルーク。

「それは、そうかもしれません……。けれど……」

「むしろ、コイツらの『無いから盗んでくる』って発想の方がワケワカンねえだろ？」

追い討ちを掛けるルークの言葉。チーグルを、庇う言葉が見つからないイオンは口籠もる。

「確かに、浅慮だった……」

ルークの言葉に、ただ頷く長老チーグル。言い訳をされるよりも、かなり居心地が悪いと、ルークは感じた。

「『弱肉強食』……。確かに、それは一つの真理なのかもしれない。けれど、今の状態が、本来の自然の形ではありません」

一方、ルークは「『センリヨ』？『ジャクニクキョーシヨク』？コイツら、ムズい言葉知ってんなあ……」と、胸中で呟きつつ考える。

先程は、「ワケワカンねえ」とは言ったものの、チーグル達に同情出来なくもない。

恐らく、ライガとやらは肉食だと、ルークにも想像出来る。そして、草食らしいチーグルが、狩りが出来るはずがない。

チーグルにも「止むに止まらない事情があった……」わけだが、それはライガの方も同じだと、ルークは思う。

では、どうすべきか？誰も一言も喋らない、重苦しい沈黙が続く。

「じゃあ、話し合いでもするか？ライガも、この輪ツカ持ってつかもよ？ハハハ」

沈黙に耐えかねたルークが、のつもり渾身の冗談を飛ばす。

「そうですね。ライガと交渉しましょう……」

凜とした、真っ直ぐな眼差しでイオンは頷き、ルークの意見に賛同した。

「は？なに言ってるのオマエ？ジョーダンだって。なにマジになってんだ？ハハハ……」

「いいえ、良い考えだと思います。ありがとうございます、ルーク。貴方が、いてくれて良かった」

苦笑いするしかないルークに、イオンは柔らかに微笑み頷く。
どうやら、真面目に本気らしかった。

「長老、彼らと話がしたい。どうか、ソーサリーリングを貸していただけないでしょうか？」

イオンは、長老チーグルに頭を下げる。なるほど、チーグルの言葉が訳せるのなら、ライガの言葉を訳せるだろう。ルークは何となく、ソーサリーリングが欲しくなった。とその時……

「ちょっと待った、導師イオン。出来るかどうかはともかく、話し

合いで解決するってのは、これ以上無いくらい賛成だかの……。繁殖期のライガの巣に、ご自身も行くつもりじゃあないだろうの？」

コゲンタが、イオンと長老チーグルの間に割って入った。怒ってはいない様だが、表情は硬く厳しく見える。

「行くつもりなら考え直していただきたい。先程言った様に、ライガは雷をも食らうと言われる、真正正銘の『魔物』。いくらなんでも、そりゃ『無い』って話でござる。あははは」

コゲンタは、無表情に笑い首を左右に振る。

「ぼくは……、生まれから今まで、モースや他の詠師の望む『導師』を演じてきました……。だから、ぼくはぼくの意志で、ぼくにしか出来ない『導師』を演じたい……」

イオンは絞りだす様に、想いを口にする。

そんなイオンに、胸を突かれたルークは、コゲンタに向かって口を開いた。

「おい、コラおっさん！ サッキと同じだよ。どうせ、コイツ止めても行っちゃまうぜ？」

「ルーク殿……」

「もちろん、オレも行くぜ？ 止めたってムダだぜ。勝手に、ウロチヨロされるより見張っとく方が多分ラクだぜ？」

ルークの、イタズラっぽい笑顔に毒気を抜かれ、釣られて苦笑するしかない。

「しかしなあ……」

「イシヤマさん……。わたしも全力で支援します……。力を貸して頂けませんか？」

ティアは、コゲンタに深々と頭を下げ懇願する。

「コゲンタ！どうか……！」

イオンまでもが、頭を下げかねない雰囲気だ。

「解った！解り申した！導師イオンにも来て頂こう……」

降参とばかりに、両手を上げてコゲンタは、イオンが同行する事を承諾した。

「やったな！イオン」

「ありがとうございます。ルーク」

「ああ、ありがたく思えよ！へへへ」

「まったく、しょうのない……しょうのない……」と、ぼやくコゲンタを尻目に、ルークはイタズラが成功した子供の様に、イオンに軽口を叩く。

「話は着いたようだのう。しかし、このリングはチーグルにとって大切な宝。簡単には渡せない……」

ルーク達の話し合いが、一区切り着いたのを見計らい、長老チーグルはリングの貸し出しを断った。

「そんな……！」

「渡せないが、儂がお前達と共に行き、ライガの言葉を訳す。では駄目かのう？」

長老チーグルは、食い下がろうとするイオンを宥める様に代案を口にする。

「長老……。どうか是非とも……！」

イオンの顔が一瞬で破顔する。

しかしその時、周囲のチーグル達が騒ぎ出した。

チーグル達の声は、「ミュウミュウ……」と幾重にも重なり、かなりの騒音だ。

「皆、静まるのじゃ……！案ずる事は何も無い」

長老チーグルは、騒ぐチーグル達を一喝してしずめる。さほど大きな声ではなかったが、不思議な迫力があつた。流石は長老だ。

「さ、行こう。ライガの巣穴まで案内しよう」

長老チーグルは、力強く頷くと巣穴を出ようと歩き出した、のだが……。

「ふう……。やれやれ……」

リングを杖代わりにしつつ、人の歩幅にして三、四歩ほどたろうか、長老チーグルは大きく息を着き一休みする。そして、力強く頷くと再びリングを突いて歩き出す。

「ふう……。やれやれ……」

今後は、三步にも満たない距離で立ち止まった。

「ふざけてんのか？もしかして……」

「あ、あの……長老？」

困惑し、上手く言葉が出ないルークとイオン。

それほど、長老チーグルの動きは遅かった。

「あの……、長老様。無理を為さらずに……」

ティアが気遣わしげに、長老チーグルに声を掛けるが……。

「なん……の、これしき！」

腰を伸ばし、再び歩き出す長老チーグル。

「おおい！チーグル達よう！長老殿の代わりに行こう、という者はいないかあ？！」

見かねたコゲンタは、チーグル達に向き直り怒鳴る。しかし、先程までの騒ぎは何処へやら、一転して静かになるチーグル達。

「おぬしらなあ……」

チーグル達の、ある種の身勝手さに怒りを乗り越し、コゲンタは呆れ返る。

その時である。黙って動かないチーグルの中から、一匹の薄緑色のチーグルが飛び出して来た。

身体つきからすると、まだ子供のようだ。

「ミミュウ！ミュウ！」

「何を言う？！『ミュウ』！お前では無理じゃ！お前は大人しく此処にいる……！」

どうやら、子供チーグルは『ミュウ』という名前らしいが、長老チーグルの代わりに『ミュウ』が行くと言っている様だが、リングによって訳されない『ミュウ』の言葉はルーク達には理解出来ない。

「ちよいと失礼」

「ミュっ！」

コゲンタがミュウをつまみ上げ、長老チーグルの目の前、リングを触れられる位置に下ろす。

「悪い悪い、わしらにも解る様に話せ。続ける続ける、あははは」

「ミュウ！わかりましたの！」

ミュウはリングに触れて話し出した。

「おじーちゃん、コシがイタいんですの！やっとヨクなったのに……。だからボクが、かわりにライガさんのお家に行ってアヤマりますの！ライガさんのお家を燃やしちゃたのはボクですの！」

「ミュウ……。小さき者の失敗を償うのは、年寄りの役目だ。聞き分けるのじゃ。ライガの巣へは儂が行く……」

縋り着く様に、ミュウは長老チーグルに決意を訴えるが、長老チーグルは決して首を縦に振らず、宥める様に諭すのみだった。

ルークは感動的だと思った。二匹の、身内を危険晒したくない気持ち、良く理解出来る光景だとも思う。

しかし、長老チーグルのペースに合わせて歩いていたら、ライガの元に着くのが何時になるのか解らない。

はつきり言って、付き合う気になれなかった。

「おい、チビスケ。お主、ライガの巢の場所は解るか？解るなら、お主に任せたい」

コゲンタは膝を付き、最大限チーグル達に目線を合わせ、きっぱりと言い切った。

「じいさん、悪く思うなよ？ライガが相手だ。足下も『おぼつかない』モンを気遣いながらやり合うのは、キツイからの。なっ？」
「ううむ……」

コゲンタは長老チーグルに、諭す様に笑い掛ける。

「なに、安心しろ。ヤバくなったら、わしが身体を張ってチビスケも逃がす。必ずな……！あははは」

「オレは逃げねえぞ。そんなダセえコトするかつての！」

「『万が一』って話だ。ルーク殿、あははは。ま、よろしくなチビスケ」

吠えるルークに苦笑しつつ、コゲンタはミュウに笑い掛けた。

「ミュウ！ミュウですよ。ヨロシクですよ！」

こうして、ルークは運命の変える仲間と、また一人出会った。

二十三話 不思議な樹と新たな仲間（後書き）

体調不良、携帯電話の故障、その他諸々の出来事が重なり、投稿が遅れに遅れてしまいました。

こんな作品でも楽しみにして下さっている方々、本当に申し訳ありません。

遅れた一つの要因は、『何故、ミュウはソーサリーリングを持つてまでライガのテリトリーに侵入したか？』が解らなかったからです。シナリオ上は、『ライガの森で火事を起こした』という結果だけで、『こういう理由で行った』という動機が明言されていませんでした。

何故、チーグル族に様々な能力を与えるリングを持ち出してまで、まだ幼いミュウはライガの森で、結果的に火事を起こしたのでしょうか？

1・ただのイタズラ

2・能力（火炎放射など）が低い、出来ない事への焦りから練習のため持ち出した。

3・ライガの森でしか採取出来ない物を採りに行った。

本編シナリオで語られていない以上、独自解釈（捏造？）でしかありませんが、単純に考えるばこんな所でしょうか？

しかし、1・ではミュウの『キャラクター』にズレを感じます。

2. は、1. よりはあり得ますが、いくら何でもライガの森にまで足を延ばす理由としては不自然です。

実はライガの巣と、チーグルの巣は近所だった。という事でしようか？そうではない（二つの森との間に距離がある）としたら、チーグルの森からライガの住む北の森に燃え広がったのでしょうか？そんな、大規模森林火災が起きたなら、マルクトは『食料ドロボウ』だの『不法入国』だの『和平交渉』などと呑気は事を騒いでいる場合ではないのですが……。

3. はあり得なくも有りませんが、本編シナリオでは全く触れていないので想像の域を出ません。

山火事、森林火災と一口に言っても、様々な災厄の原因になります。

長期的な事で、森林の保水力低下による土砂崩れ、洪水被害の拡大、特定生物の増減による生態系の崩壊（例、感染症を媒介する虫を食べる鳥が減り、虫が増加し感染症の流行）など。

短期的な事では、煙、ガスなどによる健康被害、天候によっては火災旋風などが発生する可能性も有り直接的に人命、財産に被害が及びます。

当然、マルクトの国力は著しく低下するでしょう。キムラス力から見れば、長年の大敵を叩く絶好の機会以外の何物でも有りません。

人間の生活と自然は、やはり切り離す事は出来ないわけですね。とくに、テイルズのように中世的な世界ならば、尚更でしょう。

二十四話 敵か味方か？唸る豪腕

『ミュウ』の協力を得る事にしたルーク一行。巢穴を出ると、まずは自己紹介から始める事にした。

「ミュウですよ！あらためてヨロシクですよ！」

ミュウが元気良く大きな耳を揺らし、お辞儀する。

そんなミュウを見て、ルークは何か胸に『つかえ』を感じた。それは何のかまでは解らない。

「ではまず、ぼくから。ぼくはイオン、ダアトの導師イオンですよ。よろしくミュウ」

「ミュウ……？だーとさん？どーしさん？いおんさん？」

「イオンが名前ですよ。イオンと呼んでください。ふふふ」

「イオンさん。ヨロシクですよ！」

小さな子供に語り掛ける様に、優しく微笑むイオン。何とも、微笑ましい光景だった。

「わしはコゲンタってモンだ。『くん』でも『さん』でも『呼び捨て』でも、好きに呼べ。よろしくな、ミュウ」

「ミュウ！コゲンタさん、ヨロシクですよ！」

膝を付きミュウと出来るだけ視線を合わせ、頭を撫でる様に、ぽんと軽く叩きコゲンタは笑い掛ける。

一方、ルークは怒りとも悲しみとも着かない、この気分は何だ

？と自問自答を繰り返していた。

改めてルークは、ミュウを睨み付ける様にして見つめる。

「わたしはティア。訳有って、こちらのルークと旅をしているの。短い間になると思うけれど、頑張りましょうね？よろしくね、ミュウ」

コゲンタと同じように、ミュウと視線の高さを合わせ、ティアは柔らかい微笑み掛ける。

「ヨロシクですのティアさん！」

何なんだ、この気分は？一言で言えば『違和感』だ。そう、『違和感』だった。

ミュウは幼い子供の様ではあるが、十分『流暢』と言える言葉を話しているのだが、良く観察すると発している言葉と口の動きが、僅かに一致していなかった。

なんとなく気味が悪くなった。ルークは、喋っているミュウを出来るだけ視界に入れずに行こうと決意した。

「ルーク……？どうしたの？」

「いや、べつに……」

一向に口を開かないルークに首を傾げ、ティアはルークに声を掛けるが、気の無い返事が帰っただけであつた。

「ミュウですの。ヨロシクですの！ルークさん」

「ああ……」

ミュウの方から挨拶をするが、こちらも気の無い返事のみであ

る。

「ルークさん、ミュウですよ！」

聞こえていなかったと思い、ミュウはもう一度ルークに頭を下げるのだが……。

「うつせつ！ いっぺん言えばわかるっつーの……！」

「ミュウウウ……」

思わず声を、荒げてしまうルーク。竦み上がるミュウに小さく舌打ちして、そっぽを向くと……

「名前なんかより、ライガだ、ライガ。早い方がいいんだろ？ サツサと案内しろ、ブタザル！」

ルークは森の奥、ライガの巣が有るであろう方向を指差し、ミュウに道案内を促すのだが……。

「？ ルーク、豚猿とは？」

ルークの口走った、聞き慣れない単語に、イオンは首を傾げ質問する。

「コイツのコトだよ。ブタっばいしサルっばいだろ？ サルは、まだホンモン見てねえけどなあ……」

改めて一同は、ブタザル……ミュウを注視する。

なるほど、言われてみれば、チーグルはサルっばいブタ、あるいはブタっばいサル、に見えなくも無い。

「ミミュ！ミュウはブタザル！ブタザルですの！なんだかツヨそうでカッコイイですの！」

ミュウは飛び跳ねんばかりに、はしゃぎ喜ぶ。

「確かに、なんだか雄々しさの内に愛嬌もある、不思議な面白いアダ名ですね。ふふふ」

「あははは、まあ……じゃあ、たのむぞ？ブタザル」

「ミュウ！ブタザルにおまかせですの！」

「チヨーシのイイ奴だな……。ウゼえ……」

イオンは微笑み、コゲンタは苦笑し、ルークは忌々しそうに舌打ちする。

一方、ティアはある一つの境地に到達していた。

ルークが付けた、『ブタザル』というミュウのアダ名、はつきり言つて「酷い……」「かわいそう……」としか思えず、ルークの言動に憤りを覚えた。しかし、『ブタザル』のアダ名で、喜びはしゃぐミュウを目の当たりにした瞬間、その憤りは氷解した。

一言で言えば『落差』だろうか？

『ブタザル』という厳しい名前を、愛くるしいチーグルが名乗る……、その『落差』にティアは魅せられた。

自分から呼び掛ける事はしようと思わないが、ミュウ自身が『ブタザル』と名乗る事は、「あり」か「なし」でいえば、ティアの内では「あり」だと思った。

「じゃあイキますの！ボクに付いてきてくださいですの！」

ミュウは元気良く、ルーク達に声を掛け、ソーサリーリングを浮き輪の様に抱える。

そして、不思議な事にミュウの身体が、ふわりと浮き上がり空中を泳ぐ様にして一行の前に躍り出た。

「ますますワケわかんねえ生きモンだな……」

ばた足と、耳の羽ばたき（耳ばたき？）で、ふわふわと目の前を飛ぶ生きモンに、ややゲンナリしながらもルークは生きモノ……もとい、ミュウに続く。

根の橋を渡り、ルーク達が大樹を見上げた場所までやって来た。

そこには何故か、二匹の成獣……大人チーグルが、待ち受けていた。

「ミュウ……」

ふわふわと浮かんでいたミュウが、しばらくしてしまう様に地面に降りてしまった。大きな耳も力無く垂れ下がり、明らかに大人チーグル達に萎縮してしまっている。

「あんだコイツら？ウゼえのが三匹に……」

「ミュウの見送りでしょうか？」

「そういう雰囲気では無い様に、見えますけど……」

ルークとイオンは首を傾げ、顔を見合せる。

確かに、ティアの言葉通り、大人チーグル達の雰囲気は明らかに友好的ではない。

ルークには、ミュウが頭ごなしに罵られている様に思えた。

「ああ、もうウゼえ！ジャマだ！ドキやがれ！ケツトバすぞー！」

コゲンタの横をすり抜けミュウを跨いぎ、ルークは大人チーグル二匹の前に躍り出て足を振り上げ威嚇する。

大人チーグル達は、飛び上がり一目散に逃げ、茂みに飛び込んだ。

「ミュウ、あのチーグル達は一体？」

イオンは素直に疑問を口にするが、当のミュウは視線を左右に彷徨わし、何をどう話すべきか「解らない……」様子だった。

「話づらい事ならば、無理に聞きはしません……。ミュウ、許してください」

ミュウの様子を見兼ねたイオンは、質問を取り消すが……

「ミュウ……ボクがワルいんです……。ボクがリングを勝手にモち出して、ライガさん達のおウチを燃やしちゃったから！ミュウのセイで、ミンナがヒドイ目になって……。だからオニーサン達は怒っていたんですの……」

どうやら、先程の二匹は『お兄さん』……若者らしい。

それはさておき、ミュウは本当に、ライガの森失火の張本人のようだ。

「気になっていたんだけど……。どうしてミュウは、ライガの森に一人で行ったの？小さい貴方が、リング……武器にもなる道具まで勝手に持ち出すなんて、よほどの事よね？」

ティアはミュウと視線を合わせ優しく語り掛ける。

「わたし達は、まだ会って間も無いし、お互いの事もまだまだ知らないけれど……。わたしは、ミュウの『仲間』に……。うん、『力』になりたいの」

ティアは杖を傍らに置き、小さなミュウを怯えさせない様、下からミュウの両頬に優しく包む様に触れる。

「ボクは……」

躊躇いがちに、ミュウは事の顛末を語り始めた。

ミュウの話はこうだ。ある日、ミュウの祖父である長老チーグルは長年の持病であった腰痛が悪化し、歩く事もままならない状態に陥った。

他のチーグル達は、長老チーグルの病状を心配はするものの、次の族長を決める事の方を優先した。

冷たい様にも感じるが、チーグルも厳しい野生に生きる獣である、一族を率いる『より所』は当然必要だ。

しかし、ミュウ達、子供チーグルには苦しむ長老チーグルを放っておく事など、出来はしなかった。

そこで、ミュウ達はライガの住む北の森に有るとされる不思議な石『懷炉石』を採り行く事にした。

『懷炉石』とは音素の結晶であり、その石自体が発熱している訳ではないのだが、懷に入れておけば不思議と身体が暖まり凍える事はない。

布団大に懷炉石を敷き詰め、それに寝る事によって身体を暖め癒すという民間療法も存在する。長老チーグルの腰も、それで癒そ

うという訳である。

かくして森へは、ミュウが代表として行く事になり、子供チーグル達は大人達の目を盗み、ソーサリーリングを持ち出した。

リングで音素を操る力を増加させたミュウは、首尾良く石を拾う事に成功した。

しかし、場所が場所である。何時ライガと遭遇するかも解らない状況で、ミュウの緊張は限界に近かったのだろう。

草むらから飛び立つ野鳥の羽音に、驚いたミュウは思わず炎を吹いてしまった。

木や草が燃えはしたものの、その時点では大した燃え方ではなかったが、恐怖に駆られたミュウは、すぐにチーグルの森に逃げ帰ってしまった。

ミュウが石を持ち帰った数日後、石のおかげか長老チーグルの腰が快方に向かい始めた頃、ライガ達がチーグルの森へとやって来た。

ミュウが去った後、炎はゆっくりと森を焼き、ライガ達の巣穴までも住めない状態にしていた。

ライガ達の、その他の魔物を遥かに凌駕する鋭敏な感覚は、焼けた森に僅かに残ったミュウの匂いと音素の痕跡を見逃さなかったのだ。

ウルフや他の森の魔物の、血に塗れたライガの群れは、チーグル達に『この世の終わり』を感じさせ、冷静な判断力を奪った。

そして、ライガ達はチーグル達に命と引き換えに、大量の食料を要求した。

生き物は不安に駆られた時、攻撃的になるものである。そして、人間（この場合チーグルも含むなので、知的生命体）は反撃を受けない様、立場と力の弱い者、なおかつ優しく真面目な性格の者を選

び否定する。

そうする事で精神的安定を得る。要するに、『悪い事は皆、他人の所為』にしてしまえば楽なのだ。

そうして、大人チーグル達はミュウを選んだ。騒ぎを引き起こした張本人の上、ミュウは『優しく真面目なイイ子』で実に都合の良い人材だっただろう。

事実、ミュウは今回の件の責任は全て自分に有ると思っている（思わされている？）という事は話を聞けば明らかだった。

確かに、ミュウは叱られ反省しなければならぬ事をした。しかし、「全ての責任が有るか……？」と言えば「断じて否」である。

ティアやコゲンタから言わせれば、子供の（しかも親族）の耳に入る状況で、長老チーグルを半ば見捨てる話をした事と、『子供でも使え、使い方によっては武器にもなる危険な道具』であるソーサリーリングを、子供の手の届く場所に保管するという重大な過失を二つ犯している彼ら、大人チーグルにも十分に責任が有る事である。

「ありがとう、ミュウ。わたし達を信じてくれて……。精一杯力になるわ……。必ず」

ティアは、そつとミュウを抱き寄せ微笑み掛ける。

「ミュウ……ウウ……。ティアさん、ありがとうございますの……」

ミュウはティアの胸に顔を沈め、嗚咽をもらす。

コゲンタは、二人の親子の様な微笑ましい姿を視界の端に捉えつつ、「それにしても……」と考える。

『聖獣チーグル』などと勿体付けられている上に、能天気な姿に似合わず「なかなか、どうして生臭い……」連中だと思った。人間と大差ない。

良い奴もいれば、悪い奴もいるし、良い事をしながらも悪い事をし、悪い事をしながらも良い事をする。

知恵を持つという事は、実に不可思議な事だ。不可思議ゆえに、世の中には様々な喜劇や悲劇が溢れるのだ。

「おいコラ！いつまで泣いてんだ！？シャキツとしろブタザル！！サッサとカタつけて、サツキの奴ら見返すぞ！！」

首根っこを捕まえて、ルークはミュウをティアから引き剥がし、ハッパをかける。

「ミュウウ……ルークさんも……ありがとうございますのぉ」

ルークの、やや乱雑な扱いを物ともせず、優しい（？）言葉に感激している。

「はぁ？！カンチガイすんな！礼なんかいるか！うつとーしい！」

ルークは縋り付いてくるミュウを振り払い怒鳴るが……。

「でもでも……。やっぱり、ありがとうございますのぉ……」

やはり、ミュウには通用しなかった。

「ふふ……。ミュウ、疲れたら、わたしの肩か服に掴まってね。飛び続けるのは大変でしょう？」

「ぼくに掴まってくれても構いませんよ？ミュウ」

ルークとミュウのやり取りを優しく見守っていた、ティアとイオンは、ミュウに微笑む。

「ブタザル！その時はオレが運んでやる！コラ、イオン！お前、只でさえオソイクせに……。オレはキタえてっからな！ティアもこんなモンにマトワリつかれてトッサの時ヤバイだろ？！オレがイチバン速えしな！」

ティアとミュウが二人で楽しそうにしているのが、何故か気に入らない、そして、何となくイオンが心配なのは本音、何とも複雑な表情でルークはまくし立てる。

「ルークさんはやさしいヒトですよー！！」

「だから……、チゲえー！！」

何はともあれ、この少年少女達にとっては、自分だけでも「良い事をする、良い奴で在り続けよう……」と、コゲンタは心に誓った。

「こっちの方角で合っているのだな？ブタザル」

「はいですよ！」

コゲンタを先頭にミュウの案内の下、森を進んでいた。

と、その時コゲンタの足が止まった。後続のルーク達に『止まれ』の合図を送り、何時でも抜刀出来る様ワキザシの鯉口を切り構えた。

「なんだ！？どうした！？魔物か！？」

ルークもまた戸惑いながらも抜剣し、すぐ様隙少なく構える。

「なにかが、来る……！」

刹那の瞬間に、複雑な譜陣がティアの足元に描かれる。一言『発動』を命じるば防御譜術が、何時でも展開出来る。

沈黙……。その瞬間が異様に長く感じる。ルークは入り過ぎる力を抜く為、細く長く息を吐く。

その時、ルークにも聞こえた、巨大な何かが疾走する轟音が。

「左からです……！」

ティアが叫んだ瞬間、無数の枝と木葉を吹き飛ばし、巨大な影が一行の目の前に飛び込んで来た。

一言で言えば、それは、不細工だが巨大で不気味なデク人形だった。人の胴体ほどの文字通り丸太の腕、頭に当たる部分の暗い洞に浮かぶ二つの光の眼。

「ウドゴレム……！」

魔物の正体を認めた瞬間、ティアは音素の障壁で仲間達を包む。

『ウドゴレム』この魔物は、悪霊や低級妖魔の類が、朽ち木に取り憑き、生者を襲い生気を貪る。ライガとは別の意味で、真の意味での魔物だ。

ウドゴレムは、元が木であるから当然、痛覚が無い。つまり、攻撃の要が『剣士』のみである、今の一行にとっては『鬼門』だ。

決定打になるとすれば、譜術、譜歌だけである。ティアの譜術では威力に欠ける、譜歌では詠唱に時間がかかり過ぎる。

コゲンタとルークが『盾』にすれば、何とかなるか？有り得ない……。音律士として、進んでしてはならない事だった。

「うん？なんかヘンじゃねえか……？」

ルークが何かに気がついた。

見ればウドゴレムの左腕が肩口から、ごっそりえぐり取られ、そこから血液の様に黒いモヤが漏れだしている。

突如、巨大な黄土色の砲弾が飛来し、ウドゴレムの頭部を打ち碎いた。

地響きと共に砲弾が地面に転がる。いや、それは砲弾ではなかった。太い獣の腕、正確には獣の腕も模した物。つまり、巨大なぬいぐるみの腕だった。

頭部を無くし、よろめくウドゴレム。片膝を着く形で、ようやく踏みとどまる。

しかし、その瞬間である。先程の腕の倍以上の大きさの黄土色の影によって、ウドゴレムは頭から踏み潰された。

ウドゴレムは、大小様々な木屑に成り果て散らばった。

ウドゴレムだった物の中心にソレは、虚ろに立っていた。転がっていた腕が、糸によって手繰り寄せられ、蛇の様に糸が動き、胴体の左側に再び縫い付けられる。左腕だったらしい。

ソレは、熊だろうか？あるいは猫に見えなくも無い。

身体中を荒縄の様な糸で縫い止められている。縫い目は、いずれも乱雑で実に痛々しい。

ソレの、ボタンを縫い付けただけの虚ろな眼が、ぎょろりとイオンを捉える。

『……ION……!!』

ルークは、ソレが確かに笑った様に見えた。

「イオンが狙いか?!」と、ルークは油断無く構え直しソレを睨み付ける。

「アニス……!どうして此处に……!?!」

イオンが驚愕の声を上げる。

しかし、アニスと言えば、イオン共にいた導師守護役の少女だ。あの少女と目の前の化物とは全く繋がらない。どういう事なのだろうか?

ソレは、太い指を器用に使って、自身の口を縫い合わせた糸を引き抜いた。

人一人丸呑み出来そうな大口を、ソレは開けた。

攻撃か!?!とルークは抜けかけた緊張感を戻し剣を構え直す。が、またしても驚愕で力が抜けた。しかしルークは、滑って転ぶのだけは何とか踏みとどまる。

「や、と……見……けたあ!イオンじゃあま……ヒロイ……れすう」

ソレの大口から、焦げ茶色の髪を二つに結った可愛らしい少女の顔が出てきたのだから、驚くのは無理もない。

ソレは太い二つの腕で、口から少女を引きずり出した。

「イ、イオンしゃま……」

地面に降り立った少女は、くたりと膝を折りその場にへたりこんでしまう。そして、何故か呂律が回っていない。少女に何が有ったと言うのか？

「アニス！なんという無茶を……！ダクト式譜術のマヒ状態で動き回るなんて！神経系にどんな負荷が掛かるか……！」

イオンは、少女アニスに駆け寄り優しく抱き起こす。というか、イオンの仕業らしい。

ルークは絶対にイオンを本気で怒らせない様に心に誓った。

「助かりました、音律士さん。すっかりスッキリ、痺れが取れちゃいました。ワタシは導師守護役アニス・タトリン謡長であります。このご恩は忘れません！」

「いいえ、当然の事をしたまです。御気になさらずに……」

ティアの治癒術によって、マヒ状態から回復した少女アニス・タトリンは、小さくなったソレ（トクナガという名前らしい）を背中に背負い、ビシリと敬礼をしティアに礼を言う。ティアも柔らかな微笑みで、それに応え控えめな敬礼をする。

「みなさん本当にありがとうございましたあ。さあイオンさま、タルタロスに戻りましょう。イオンさまが、いなくなつて上に下にも大騒ぎでしたけど……、今なら大佐も笑って水にナガしてくれましよう……たぶん……きっと、アハハハ……。ワタシも、マヒらせ

やがりましたコトをナガしちやいますよお？ザハザバ〜って！ね？だから戻りましょう！」

アニスはまくし立てる様に、イオンに帰る事を促す。表情こそ笑顔であるものの、「これ以上ややこしくしたくない……」という心情がありありと読み取れる。しかし……

「それは出来ません……」

その心情は、他ならぬ主イオンに一撃粉碎されてしまった。

「な、なんでですかぁ！？」

「それは、ぼく達はライガに会いに行かなければならないからです」「ライガ！？この森ライガがいるんですか！？ライガ退治なんて、最低中隊規模の部隊が何カ月も前から準備してヤル事ですよう？！柵を立てたり！お堀を掘ったり！猟犬を対ライガ戦用に何十頭もシツケたり！の一大事業で、こんな人数でヤルなんて……ムリです！ムチャクチャですよ〜！！」

身振り手振りを、ふんだんに交えながらアニスは、イオンの言葉に驚きながらも、異を唱える。

「大丈夫です、アニス。行くのは退治する為で無く、交渉する為ですから。安心してください。ふふふ」

イオンは、アニスをなだめる為、本当に穏やかな声で、彼女にとっては意味不明な事をのたまわった。

「どっちにしるムチャクチャだぁ！！」

アニスは盛大に頭を抱えた。

「落ち着いてください……、タトリン謡長。イオン様には何か良いお考え……、交渉材料がお有りなんです。結論は、まずそれを聞いてからでも……」

ティアは努めて冷静に、アニスをなだめ落ち着かせようとする。

「そうだお考えだ！ライガと話せ！なおかつ納得させる方法とは一体なんなのだあ！？お聞かせくださいーい！！」

混乱しているのか、奇妙な調子でまくし立てるアニス。しかし、よく喋る少女である。

「わしも、そいつは興味がありませんなあ。どのように、お考えなのかの？失礼ながらお聞かせ願いたい……」

コゲンタも頭を下げ、アニスに便乗する。

確かに、ルークもその事は気になっていた。真っ先にルークの冗談（？）に反応したのは、他ならぬイオンだ。一体どんな奇策が飛び出すのか、なんとなく楽しみだった。

「それはもちろん、『何処か別の場所に移ってください。』と交渉します」

しばしの、沈黙がその場を支配する。

「え……？あの、イオンさま？それ……だけ？ですか？」

肩透かしを食らった心境で、アニスはやや呆然としつつ再度確

認をとる。

「はい、誠心誠意、交渉します」

穏やかだが、何処までも真つ直ぐな眼差しで、イオンは頷いた。しかし、それでは、相手側にも十分な利益が有る代案を提示する『交渉』ではなく、相手の善意に全てを掛けた『説得』である。

「やっぱ、ダメだあ！！ムチャクチャだあー！！」

アニスは、またしても盛大に頭を抱え、今度は力無く膝を突くというオマケ付きだった。

ティアとコゲンタもまた、彼女と一緒に頭を抱えたい気分になった。

一方、ルークとミウは、何故アニスが頭を抱えたのか、何故ティアとコゲンタが固まってしまったのか、解らなかった。

ルークにもイオンの考えは、「少し虫が良すぎる……」という事は解ったのだが……

「アニス……！い、一体！？頭が痛いのですか！？」

イオン自身が解っていないかった。

「そつから説明しなきゃダメですかあー！！？」

森に、少女の悲鳴がこだまする。

果たして、ルーク達はライガ達の『譲歩』を引き出せるのか？そして、アニスはイオンに『頭を抱えている理由』を、理解してもらおう事が出来るのか？

それぞれの思い、様々な問題が絡み合い、一行の行く先に暗雲が立ち込めていた。

二十四話 敵か味方か？唸る豪腕（後書き）

アニスの本格登場ですが、アニスの階級が違います。ティアと階級を同じにする事で違和感無く『対等』の関係にする為の、ご都合主義的な姑息な手です。お恥ずかしいかぎりです……。

やはり、騎士、軍人、という性質上、階級は絶対的な事だと思います。何故か原作シナリオでは、ティア（響長）はアニス（奏長、響長より二階級上）に対して初対面から「タメ口」「呼び捨て」でしたが……。

自分より戦闘能力が低くかろうが、年下だろろうが、態度が悪かろうが、身分、階級が上なら（感情を隠してでも）敬い、頭を下げるのが騎士、軍人（現代なら社会人の方々全般でしょうか？）の仕事でもあります。

世の中はルークのように、世間に疎く、なんだかんだで寛容で優しい人物だけでは有ませんので気を付けなければなりませんね？

頭を下げるのは、その『人物』に対してだけで無く、自分の『仕事』その物に対してなのだと、個人的には思います。皆さんは、どう感じましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0460s/>

テイルズオブジァビス Average

2011年11月17日20時48分発行